

男の娘が I S 世界で生きるのは良いのか?
【修理中】

ジ・アンサー団

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

やまもとひとし

山本仁之はいきなり神アマテラス（↑幼女）に殺されてしまう

だがアマテラス（↑幼女）はIS世界に転生させると言われて異世界の世界に転生した

神（↑幼女）から3つの特典を貰い、IS世界で楽しく生きるオリ主の物語

「誰が幼女ですか!!」

「いちいちうるさいなあ」

「貴方が悪いのです!!」

ちなみに、この先品は、修理中の意味は、色々修正しないとイケない部分があるから、修正を行いますため、考えてみて、1日だけ、作品を打つのは良いと思いましたが打ちました。1日に1作。打ちますので、期待してください。

目次

プロローグ	1
原作前	
男の娘が自分の機体で2人の家族を助けた	6
男の娘が親切なフランス人に泊めさせてもらう	15
男の娘が犯罪者を殺すのは楽しいのか？	24
男の娘が天災を家に入れるのは良いのだろうか？	30
男の娘が天災に殺気を上げて家から追	

い出すのは楽しいのか？	34
男の娘がフランス人の家族になるのは良いのか？	38
男の娘が天災に取引をするのは良いのだろうか？	43
男の娘が天災に本当の事を話すのは良いのか？	47
男の娘がフランス人に「LBX」をあげるのは良いのか？	52
男の娘が亡国機業と戦う前になるのは良いのか？	57
男の娘が初代ラスボス「LBX」の姿になって、会話をするのは良いのか？	

男の娘が【LBX】で圧勝するのは良いのか？

68

男の娘がテロを飛行機に乗せて送り返すのは良いのか？

72

男の娘が姉に再開したが姉は創の事を忘れているのはかなり良いのか？

男の娘が5年前の相手を本気で戦う前は良いのか？

88

男の娘が【LBX】で戦っても発揮できないから【Dエッグ】を使うのは良いのか？

91

男の娘が【ジャッジ】で代表者を倒すの

は良いのか？

95

男の娘が代表に誤って千冬に殺気をあげるのは良いか？

100

原作スタート！

男の娘がIS学園に行つて、妹に【LBX】を見せるのは良いか？

109

男の娘が【LBX】を見せて楽しんでい

119

る。生徒は居ても良いのか？

男の娘が怒って先生は仕方なく相手に

134

なるのは良いのか？

男の娘が千冬と戦う前になつても良い

144

男の娘が千冬に妖刀を出すのは良いのか？

153

男の娘がまさかになっても良いのか？

162

男の娘が理由を言って、次の授業に行くのは良いのか？

174

男の娘が穏やかに、学園生活を送っているのは良いか？

181

男の娘がザコ2体を気絶させるのは良いのか？

189

男の娘が皇帝の力で無人機を灰にするのは良いのか？

197

男の娘が姉？それとも妹に再開するの

は良いのか？

204

男の娘が姉？それとも妹と戦うのは良いのか？

213

男の娘が【キング】と【熾天使】が争うのは良いのか？

220

男の娘が【キング】が【熾天使】に激しい戦いを繰り広げても良いのか？

226

男の娘が【キング】が【熾天使】に弱点を言うのは良いのか？

234

男の娘がクラスメイトの1人に聞かれるのは良いのか？

244

男の娘がドイツ人と戦う前になっても

良いのか？

249

男の娘が戦闘中止になって、天災に頼

んでも良いのか？

255

男の娘が逃げるって道でも良いのか？

263

男の娘がリーグ戦の戦いの前になるの

は良いのか？

270

男の娘が【中尉】と【改造シャドー】と

戦ったのは良いのか？

277

男の娘が【中尉】が軍人を救う前になる

のは良いのか？

287

男の娘が【中尉】で軍隊を救うのは良い

のか？

295

男の娘がオリジナル【LBX】を作るの

は良いのか？

301

男の娘が2人に【LBX】をあげるのは

良いのか？

307

男の娘が臨空学校に向かって、大変な

ことになるのは良いのか？

321

男の娘が天災に会っても良いか？

329

男の娘が最高の相棒で無人機に向かう

のは良いのか？

341

男の娘が無人機をオーバーキルをして

も良いのか？

347

男の娘がISのコアを欲しがっても良

いのか? ————— 356

夏休み編と 新、第1章 異世界宇宙編

男の娘がありえない事になっても良い

のか?・・・これは駄目だろ!? ————— 363

男の娘がコアで何をしようとしていた

のかを束に話しても良いのか? ————— 374

男の娘が子供を紹介して、旅行の行先

を言うのは良いのか? ————— 382

男の娘が異世界のステージを教え、束

に「LBX」をあげるのは良いのか? ————— 389

男の娘が異世界に行つて、戦闘準備を

行う前になるのは良いのか? ————— 400

男の娘が「キング」の姿になって、軍隊

みたいに指令をするのは良いのか? ————— 407

407

男の娘が「キング」で、異世界で暴れる

のは良いのか? ————— 414

男の娘が作戦を練つて、娘を使わない

といけないのは良いのか? ————— 425

男の娘がド派手なのか分からないが、

侵入するのは良いのか? ————— 435

男の娘がある人に認めさせるために2

人と戦うのは良いのか? ————— 442

男の娘が、雷の神を召喚するのは、大き

く良いのかな? ————— 449

男の娘が、雷の神で速攻に片づけても
良いのか？ ————— 456

男の娘が手紙を渡しさらに、「エクリプ
ス」の性能を言ってもは良いのか？

463

男の娘がチーム名を考え、会議に出て
も良いのか？ ————— 470

男の娘が作戦会議を行い、戦いの準備
になるのは良いのか？ ————— 478

男の娘が派手に、敵をぶっ放しても良
いのか？【前編】 ————— 484

男の娘が今度は地味に破壊しても良い
のか？後編 ————— 490

男の娘が俺たちの正体を明かし、宣戦
布告を言うのは良いのか？ ————— 495

男の娘が「パーフェクトワールド」から
ビッツと争う前になるのは良いのか？

500

男の娘が、ダークヒーロー（機体？）で
主役と戦うのは良いのか？ ————— 515

男の娘が、ダークヒーロー（機体？）で
決着するのは良いのか？ ————— 522

男の娘がチームラビッツに手紙を送
り、新たな挑戦を渡し、更には新たな相棒
を手にするのは良いのか？ ————— 528

男の娘が侵入者がかなり大変で、○○

になるのか？それは良いのか？ — 541

男の娘が何であいつが、宇宙人を家族にして、説明をしたのは良いのか

547

第2章 聖機師物語編

男の娘が新たな世界に着き、古代砂漠のひし形の【LBX】で助けに行くのは良いのか？ — 553

男の娘が新しいひし形の形をした【LBX】でワンキル？するのは良いのか？

559

男の娘が理不尽な事に頭で考えて、【長距離耐用型LBX】を〇〇になるのは良

いのか？ — 564

男の娘が、最大級で最大級の、最大級の【LBX】をスケッチに書いて隠し、皇女にある秘密の事を出そうかな？ 出さなかな？ つとと言う秘密を言おうとするのは良いのか？ — 573

男の娘が、テロリストが誰なのかを話し、異世界の女尊男卑の意味を教えるのは良いのか？ — 583

男の娘が、完璧な王様を持てる器を、すべき主に渡すのは良いのか？ — 592

男の娘が、自分が何者かを皇女に話したら、皇女は笑うのは良いのか？

男の娘が、家族と再会し、せつかくだか

ら、娘はあれって事になっても良いのか

? | 605

男の娘が、テロリストを迎撃するのは

良いのか?。前編 | 609

男の娘が、テロリストを迎撃するのは

良いのか?。後編 | 614

男の娘が、物語とあいつのさよなら

と、.....ある人に再開するのは良

いのか?。 | 618

第3章 最弱無敗編

男の娘が、新たなる世界に着き、少女を

助けて、男の娘が欲しい物を奪いに行く

のは良いのか? | 622

男の娘が、ウイルス強化体を完成させ

て、イカを撃破し、学園に入るのを約束を

しても良いのか? | 628

男の娘が、学校に体験入学したが、男の

娘だから仕方なくあれで学校に通うのは

良いのか? | 635

男の娘が、調査するのと、思いつきと、

リベンジしてくる厄介な奴とまた始まっ

ても良いのか? | 639

男の娘が、北欧神話でヨルムンガルド

と似ている敵に、この言葉と止めを刺す

のは良いのか? ————— 642

男の娘が、またまた家族を入れて、しかも入れた相手は新たな妹だ。それと、またまた動き出す前の北欧神話。 ————— 645

男の娘が、北欧神話の一撃で終わりにし、チーム出動するのは良いのか? 648

男の娘が、太陽の炎で巨兵を撃破は良いのか? それと、音楽流しても良いのか? ————— 652

男の娘が絆で、力をねじ伏せるのは良いのか? ————— 656

男の娘は、言い忘れていたことを話す

事と、女性に苦手な世界に連れて、新作【LBX】の試すの準備は良いのか? 660

男の娘が、真実という恐ろしいのんで1人の女性に驚きを与え、最新【LBX】を出すのは良いのか? ————— 664

男の娘は、聖書の神を使って、敵を一掃し、手紙を敵に渡し、のは良いのか? 667

男の娘が、ビジネスで爆弾発言を言っても良いのか? ————— 673

プロローグ

「……此処は……。」

何も見えない空間に浮いているような。

「此処は私の都です。」

後ろから声が聞こえて、振り向いたら衣を着ている子供が現れた。

「貴方は?。」

「私は、アマテラスです。」

「アマテラスって……いちよう分かるが分からない。」

「なんですかそれ?。」

「アマテラスって言ったたら、こんなに小さい子供で幼女ですか?。」

そう言ったらアマテラスは急に顔が赤くなって震えていた。

「誰が子供で幼女ですか!!。」

「アマテラスだよ。」

「なんですって!!。」

「それでアマテラスさんが、俺に、何の用ですか?。」

「話を切らないでください!! えっと、実は……。」

アマテラスは怒っていた顔から悲しそうな顔になって、土下座をした。

「ごめんなさい!!。」

「……何で謝るの?。」

「それは……貴方を殺してしまったからです。」

「……とにかく、土下座はもう止めて。」

「はい……。」

そう言いアマテラスは、土下座をやめた。

「あの、怒らないの……ですか?。」

「……人は死ぬのは当たり前だから。」

「え?。」

「それより、死んだ俺は、天国か? 地獄か?。」

「いえ、転生を行います。」

「転生って、異世界に向かうアレですか。」

「はい。アレです。」

「では、早速お願いします。」

「ああ、でも、特典も用意しますよ。」

「良いのですか?。」

「はい。何でもお構いなしです。それと、転生先を教えますね。」

「解りました。何処ですか?。」

「転生先はインフィニット・ストラトスです。」

「でも、そこは、女性しかISを動かせないのに主人公がそれを動かして学園に向かう

アレですか?。」

「物知りなんですね、はい。確かにその通りでございます。」

「なら、特典は、ダンボール戦機の機体とダンボール戦機の武器も全部持っている事にする。」

「後特典は2つです。」

「なら、原作キャラの家族を生存にすること。」

「後特典は1つです。」

「毎日500億円俺の金庫の中に入れてください、本物ので、スマホで?マークのアプリを入れてください。」

「働く気は無いのですか!？」

「うん。働きたくない。それに新しいLBXの機体を作りたいから。」

「はあ、分かりました。……ではそろそろ転生を行います。」

「はい。アマテラス様、色々ありがとうございます。」

「いえいえ、これ位大したことおとありませんから。それじゃあ、早速始めます。」

アマテラスはそう言い魔法陣が出てきた。

「貴方は、この魔法陣に入ればインフィニット・ストラスに行けます。」

「わかりました。では行ってきます………幼女さん!!。」

「はい。行ってらっしゃい……誰が幼女ですか!!。」

俺は急いで魔法陣に乗って、インフィニット・ストラトスに転生した。

「はあ、頭が痛い、こうなったら徹底的に虐めてやろう。」

アマテラスは何かをしようとしていた。

此処から先はオリ主のプロファイルになります。ちなみにこのプロフィールはプロリーグ編のプロファイルです。

自分で考えた名前、井上創（いのうえ はじめ）。

髪型【木下秀吉】と同じ髪型になっている。もちろん髪色も顔つきも、そもそも見た目が【木下秀吉】と似ている。大人になってもその顔は変わらない

言葉は作者流。

年齢5歳からスタート（原作前）。

好きなもの 機体を見るとか、機体を使って楽しむの二つ。

嫌いなもの 姉。

昔は家族に恵まれて暮らしていたが、親は俺を見捨て、一つの廃墟の工場で一人で暮らしている、というか毎日5億万と言う特典で廃墟じゃ無くなっているが。

原作前

男の娘が自分の機体で2人の家族を助けた

俺には、父親が居て、母親も居て、姉も居て、楽しい平穩があった。

でも、その平穩は、閉ざされることになった。

それは、ISと言う兵器が現れたからだ。

その兵器は女性しか操ることが出来ない兵器なため、男性はつまり、弱くなったってことだ。

そのせいで俺は、家族に捨てられた。工場に俺は捨てられた。工場は俺の家になって俺1人になった。

俺は恨んだ、ISのせいで、家族は失ったから、ISのせいで、俺は捨てられたから。

と言うふうに恨んでいたが

そもそも、特典のおかげでお金も手に入って、気楽に過ごせているじゃないか。ハハハハ!! すっかり忘れていたよ、……でも、やっぱ1人じゃ寂しいな(↑いまいち)。

そう言う生活が続き、更に1年経った。……早すぎだろ!!?

今頃、工場の地下で（↑LBXで地下を作った）LBX開発で新しい機体を完成に訪れていた。

「さて、これでいいだろ」

俺がさつき作っていた機体であるプロト・iを完成させた。

こいつはかなり扱いにくいのが、こいつはカッコいいしな、何か右のスカウ○ーみたいなイメージがまたまたカッコいいしな、それにこれはリーダーにもなれるから、本当にカッコいい。

それに背中のジェット機も見た目がロケットみたいでさらにまたカッコいいし……カッコいいが続くから説明はこれで終わりだ。

「確か、セシリアの両親は電車の事故にあったんだっけ？ だったら、早く助けに行かないとな……ちなみにこの「LBX」で（↑プロト・i）。」

俺は、セシリアの両親の事故を止める準備をした（↑まだ3日前）。

「よし……これで準備はOKだ!!。」

俺は荷物のカバンに、財布、スマホを持って、イギリスに向かった（LBXで）。

俺はセシリアの両親が電車に乗るのを待った。ちなみに、此処で3時間も待っていた……長い。

(やっと乗ったかく結構待って疲れたなあ。)

俺もセシリアの両親が乗ったのを確認し、俺もその電車に乗った。

乗った後、ふう〜と言うことは言わずだんまりも余りせずにして座っていた。

(あーあ。本当に疲れた。)

(とりあえず、このまま待って。事件の現場が出たら、自律稼働型LBXで事件を解決に

するか。)

「君、親はどうしたのかね?。」

(ん?セシリアの両親の父の方か、しかしイギリス語じゃあ、分からねえ…あつ! そうだ!。)

俺はカバンの中から「イヤホン」と「マイク」を出した。実はこれ、「イヤホン」は、どんな言葉でも耳に日本語で話してくれる優れものと、「マイク」はどんな日本語でも、相手の国に合わせて会話ができる優れものだ。

「すみませんどうぞ。」

「君は、耳が悪いのかね?。」

「いえ、イギリス語はあまり勉強していないから、分からなかっただけです。」

「その言い方じゃ、イギリスの人じゃ無いということだね。」

「はい、日本からやってきました。」

「家族は?。」

「…いえ、居ません。」

その発言でセシリアの親は少し悲しそうな顔をしていた

「落ち込まないでください、1人でも十分ですから。」

それからの会話が続き、セシリアの母親も会話に登場した。

その会話にオルコットが機嫌が悪いつと云う会話があったから、それは、「本当の事を説明したら誤解が解けるんじゃないですか」と云う言葉でそれを言つて誤解を解ければオルコットいが会話が終わった後、とうとう始まった。

ガタン!!

「うわ!!?」

「きゃあ!!?」

!!?」

揺れが起こり、皆体制が崩れ、その崩れでセシリアの父親は母親を支えた。俺は手すりに捕まった。

揺れが収まると、セシリアの父親は窓を開けて電車の前見た（俺も見たからな）。

そしたら、

大きな岩が目の前にあったのだもう少して電車は衝突する!!。

(急ぐか。)

俺はポケットからスマホを出してLBXに電源を入れた。そしたら。

電車の後ろから、何か凄い早く、来る3体のLBXが現れた(他の人はISだと思っている)。機体名は

【プロト・i】(俺の持っている機体では無い)

【イカロス・ゼロ】

【イカロス・フォース】

の3機の機体が現れた。

(頼むぞ、俺の最高の機体。)

「あれはISか!？」

「あんな機体、見たこと無い…。」

(2人は驚いているねえ)

ちなみに自立稼働型LBXは自分の意思でやってくれるから。

3機は自分の武器で岩を壊し、小さくなった岩を運んでレールの外に出した。これで、事件解決…:…だと思つたら大間違いだ。

(少し、遊ばせてもらおう。)

3機は空に行って消えてしまった。どうやら、武器をナックルに変えて、インビジブ

ルを使ったらしい。

「き、消えた!?!」

「嘘でしょ!?!」

……これでも驚いているのか?。

(ま、亡国機業からの使いだから、「殺しても構わない」、ってことにするか。)

そう頭に思い、3機の機体は直に殺しに行った。

「なんなのよ!!あのIS!!。」

「あんなのがあるだなんて知らないわよ!!。」

相手はどうやら、セシリアを殺すことが失敗したせいで怒っていたようだ。

何でそれが解るかって?、それは、ISには自立稼働型の機体に色々詰め込んだからだつまりLBXの目は俺のスマホに映っていたから。

「とりあえず、未知のISを亡国機業に報告する「グサツ!!」……え?。」

そう言いかけた女性は急に倒れた。何故なら、腹を貫かれたから。

いくら第二世代のISの装甲でもこの機体には無意味だからな。

「!?!気をつけろ!!あのISが何処かにいる!!。」

そう言い皆警戒していた。

(ほうほう。警戒してる、警戒してる。でも〜。)

イカロス達は一気に全員の首を斬り下ろした。

(はい、ざんね〜ん。)

亡国の所属の女性達は全員死んだ。

(さっすがインビジブル。かなり良いねえ〜。)

俺はスマホで見ていた俺は最後に、「もう帰れ」とコマンドをセットし3機は俺の向上に帰って行った。

(さて、そろそろ終わるか。)

そう思い、スマホの電源を落としポケットにしまった。

(さて、駅に着いたから、そろそろ、帰ろう。)

そう思い電車から降りようとしたが。

「少し、待ってくれないか?。」

「ん?。」

セシリアの父親に呼び止められた

「どうかしました?。」

「君、あのISは君なのかね?。」

「ちよつと!?! 貴方!?!」

(何だそんなことか、だったらこう言うしかないな。)

「I S って、そんな物騒なものは持っていないませんか?。」

「恍惚なくともいいぞ、あれは、君のI S かね?。」

(ちつ、疑い深いなあ。)

「でしたら、私はI S は乗っていませんが?。」

「私は君のスマホを見たんだ。そこにはI S を乗っている女性が多く殺されていた。これでもか?。」

(ちつ、どうやら此処までのようだ)

「……何が目的だ?、ビジネスか?。」

「いや、お礼を言おうと思ったありがとう。おかげで、事故に会わなかった。ありがとう。」

「いや、俺の勝手だ。それに、俺も電車に乗っていたなら、なおさら使わないわけがない。」

「それでもだよ。ありがとう。」

そう言いセシリアの父親が頭を下げた。

「頭はもう上げていいですよ。」

「そうか、すまない。」

そう言ってセシリアの父親は頭を上げた。

「それで、もう行ってもいいですか？この会話が、誰かに聞かれたら大変ですから。」

「そうか、じゃあ、またどこかで会おう。」

「さようなら、井上ちゃん。」

「……俺は、男の子だ。」

そう言った瞬間。2人は驚いたこんなにかわいい子が男性だと!？。

「じゃあ、さようなら。」

そう言って2人のから歩いて誰にも見えない場所でLBXを展開し実家（↑工場）に帰った。

男の娘が親切なフランス人に泊めさせてもらう

俺は今、フランスに居る。何故なら、シャルロットに会いに行くためだ。だがしかし。
「本当に森ばかりだなあ。」

俺はフランスの森でメツチャ迷ってるし!!。

「キヤーー!!。」

右の森から悲鳴が聞こえた。

「何の悲鳴だ?。」

俺は気になってLBXの「プロト・i」で悲鳴の声をした方に向かった。

にしても、「プロト・i」のジェットスピードってこんなに早かったっけ? かなり早いぞ。

……あつ!! 見えてきたあの子は、て言うか何に追われているの? ……犬!?! とにかく助けなくてはな。

俺は急いで少女に向かった。

「はこよ。」

「プロト・i」の蹴りで犬を吹き飛ばした。

その瞬間に「プロト・i」を閉まって、急いで「マイク」と「イヤホン」を付けて少女に「大丈夫？」と声をかけて、手を伸ばした。その手は受け取って、直に少女は立ち上がった。

「助けて頂いて、ありがとうございます。」

「いえ、当然の事をしたままでです。それより、君の名前は？」

「うん。僕の名前は、シャルロット・デユノア。」

(デユノアって子供だったらこんなにか愛いんだ。) // //

「じゃあ、僕も名前言うね、僕の名前は井上創って言う名前だよ。よろしくね。」

「うん。よろしく。」

お互い握手をした。

「君は何処に住んでいるの？、デユノアさん？」

「えっと、さつき犬に追いかけて回されて、場所はちよつと・・・。」

デユノアは、落ち込んでいるような顔をしていた。

「なら、お家へ送ってやろうか？」

「いいのですか？」

急に元気になった。デュノアって、此処まで子供なのかな？。

「うん。送ってあげるよ。」

「ありがとうございます。」

デュノアに気付かれ無いように、スマホを起動させた。

(さあーと、「LBX」「フェンリル」を起動。)

夜だから、見えないが、フェンリルの狙撃の時の目は凄いらな、これを使おう。

見当たらないが【フェンリル】はスナイパーライフルで、周りを見渡す。この時にフェンリルはナビゲートをしてくれる。

場所が分かった。

「デュノアさん、こっちです。」

「え？、解りました。」

シャルロットは解らず、俺について行くシャルロット、でも【フェンリル】は狙撃が
良いから、暗い場所でも【フェンリル】は百発百中だからな(撃たないけど)。

道を歩いていたら小さな小屋が見えた。

「あれは、何か小屋が見えてきたよ。」

「あつ！あれは!?!私の家だ!。」

シャルロットは自分の家を見つけたらはいやいで家の玄関の前に立ってインターホ

ンを鳴らした。

「ただいま。お母さん!。」

「あ、お帰りなさい、デユノア。」

そう言つてデユノアは、シャルロットの母に抱きついた。

「シャルロット、彼女は友達かしら。」

「彼女……。 (うわあ……やっぱり女性に見えるか。)

「あつ!お母さん!、紹介するね井上創さんだよ!。」

「……さん。」

「どうかしたの!?凄く落ち込んでいるけど!?。」

「俺は……男です。」

その一言で2人はビックリした。なんせ木下秀吉の顔や髪型では女の子だし…。

「あつ!、ごめんなさいね。」

「いえ、大丈夫です。慣れていきますから……じゃあ、そろそろ帰りますね。」

(会いに来たのはいいがやっぱり次にしよう。)

そう考え俺は実家に帰ることにした(↑工場)。

「え!?!……帰ってほしくない。」

「え?。」

は？……今なんて言った？。

「帰ってほしくない。」

「え!?でも…「いいじゃないの。」はい?。」

「今日は止まって行ってもいいですよ」

……シャルロットの母何か嫌な予感がする

「本当!？」

「ええ、本当よ。井上君はどうしますか?」

「じゃあ、お言葉に甘えて、泊めさせてもらいます」

「やったー!」

子供のデュノアはこんな奴だったっけ?メツチャ可愛いぞ

それからと言うもの長いからこの説明を言うぞ

デユノア家の人達と食事をとった。懐かしかったなあ。確か4人でご飯を食べたんだったな、……思い出してきて、泣きたくなかった……が俺は何で泣けないんだ!!。(涙が流れない。)

それから、風呂は大変だった。何せデユノアが入ってきたからだ。ダメに決まってるだろう!!。

最後に寝た。………て、デユノアは入ってくるな!!。

それからが続き、やっと1日が終わった。きつかった。

もう泊めることは無いから、そろそろ帰るか。代金はらってからな。

それから、手紙でも書いてくか、自分の身に起こることと、デユノアはどうなるのかを…。

それからその手紙と現金10兆円を置いて家に帰った。

その後のデユノア達は。

あれ?……創君は?……?。

あれ？机の上に何か置いてある。

『これを読んでいるシャルロットのご家族様へ、この手紙を読んでいることは俺は家を出ていると言う事。シャルロットのご家族の皆様、井上創を泊めて頂きありがとうございます。泊めて頂いた代金はタンスの中にあります。注意事項。(いきなり開けないでください。)

「いきなり開けないでください?。」

「タンスと言えば、1階にタンスがあつたと思う?。」

デュノアは1人で1階に行つた。

「あら、おはよう、シャルロット。」

「あつ!お母さん!、ちよつとこれ。」

デュノアがシャルロットの母にこの手紙を読んで、今はタンスの前に居た

「この中に代金が入っているの?。」

「解らない。けど、創君がこの手紙の事を書かれているなら、確かめてみたい。」

「解つたわ、お母さん頑張つてみるわ。」

お母さんがタンスを開けると。

「ドオオオオオ!!。」

「きゃ?!?。」

「うわツ!?!。」

いきなり、大量の札が出てきた。その瞬間で2人は埋まってしまった。

(ちなみに出てくる金はチョコモナ○ジャン○!!のドドドと出てくるシーン。)

「ぶはあ!!……え?!?こんなに!?!。」

デュノアは今日の前にある大金にビックリしていた。

「ふわあ!!。」

母も上がってきて大金を見てビックリしていた。

「これは、さすがに払い過ぎじゃあ。」

母もドン引きしていた。流石に此処まではやり過ぎだな。

「ん??。」

母は1枚の封筒に目を付け、それを開けて読んだら。

「!!?。」

「どうかしたの?お母さん?。」

「ええ、大丈夫よ。(これは……)。」

そう。そこに書かれていたのは。

作者「内緒にきまっているだろ!!。」

(これは、創君に会いにいかないと解らないわね。)

男の娘が犯罪者を殺すのは楽しいのか？

……あれから5年経った。これで歳は10歳になった。

今頃の俺は、今度はロシアに来ていた。えつと、有名な場所は何処なんだろうと探していたら。

『簪ちゃん!!、簪ちゃん!!。』

(何だこのドラマも別れのエンディングみたいな言い方は、あつちからか?)

俺は声のする方向に走って、向かったら、泣き崩れている。

(ちっつ、反吐が出な……。)

それから、色々聞いていたら、本当に怒ったわ。

(相手は誘拐したなら、審判で決めるべき!!。ならばこいつで相手に死刑を送ろう!!。)

俺はポケットから、電源を入れた、今回は俺が相手になってやろう。この、【ジャツジ】でな!!。

そして直さに、【ジャツジ】の姿になった。さあ、死刑の時間だ!!。

「嫌——ツ!!。」

少女は泣きながら叫び声を上げる。助けて、誰か助けてと。一瞬壁が壊れた音が皆は

聞こえた。

「何ッ!?!」

女性のリーダーが叫び、少女達や男達が破壊された壁の方を見る。すると、破壊された壁の向う側には謎の全体装甲（フルスキン）のIS（LBX）に剣と盾を持っているIS（LBX）が現れた。

「誰よあんだ!?!」

女性のリーダーが外にいる創に訊ねるが、フルスキンの装甲なため、顔が解らない。「罪を背負った貴様らには話さないつもりだったが、冥土の土産だ、俺の名前は教えないが、この機体を教えてやろう。」

「男!?!」

「俺の機体の名前は聞かないのか?、なら、土産は無しだ。」

「教えなさい!!、その機体を。」

「水を差さないなら、教えてやろう。この機体名は…【ジャツジ】!!。」

「【ジャツジ】?。」

この機体を教えたのに、【ジャツジ】の意味は知らないだと? まあいい、教えてやろう。「相手は罪を犯した者には審判が下す。それが【ジャツジ】だ。話はもう終わりだ。その少女以外は有罪、及び、死刑に処する。」

そう言い越しに下げている「ジャツジソード」を抜き取り、構えをとった。「っ!? あ、あんた達あんな奴を殺してしまいなさい!。」

女性のリーダーは少し驚きつつも創を指差しながら、男性と女性達に命令し、男性の内、少女1を捕え、2人は懐から銃を取り出し、一齐に創に取り掛かる。残りの女性はISを展開して構えをとったが、創はその場から消えた。早く動いたからである。

「き、消えた!?!。」

銃を持つている男性全員首を宙に舞う。(もちろん少女1の上にいる男性も殺したよ。)

一瞬の出来事であった。それを近くにいたISを付けている女性達や、少女、女性のリーダーは驚く。

さらに、首の無い身体から汚い真つ赤な血が噴水のように吹き上がり、微かに近くにいた女性や少女の顔や身体に飛び散る。

その光景は少女や女性達が、首のない男達の血の雨を浴びているようにも見え、男性達の首は地面に音も出さずに転がり落ちた。

「キヤーー!!。」

「嫌アアアアーツ!!。」

その直後だった。少女の2や女性達も悲鳴の叫び声が倉庫内に木霊する。悲鳴を上

げなかつた少女1と女性のリーダーは誰もが恐怖に包まれていた。

(フッフッフ、あつはははははは!!!!。楽しいね。)

創はそう頭に考えてまた見えないスピードで、今度はISを着ている女性達を殺した。

(内容はどう殺したって？ そりゃあもちろん、挽肉(ひきにく)にだよ。もちろんISも粉々にしたよ。)

「ウワアアアアアアアアアア!!!!」

これを見た女性のリーダーは、腰を抜かして、少女2は気絶した。

「次は貴様だ。」

今度は腰を抜かしている女性のリーダーに歩いて向かった(此処で走って、相手を殺したら余りにも酷いから、歩いたほうが相手はビビるからな。)

「こ、殺さないで!!!!」

女性のリーダーは創に泣きながら懇願する。だが、創は何も言わず、「ジャツジソード」を女性リーダーへと向け、それを見た女性リーダーは殺される恐怖のあまり、泡を吐いて気を失う。

「駄目えええアアアア!!!!」

そんな創に、後ろから少女1の叫び声が聞こえ、何者かが俺の背中に抱きついた。

少女1は創の行動に恐怖を感じただけではなく、このままでは創が女性のリーダーを殺してしまうのかも知れない危険を感じていた。

勿論、少女1が行動できたも、創を止める為の物だった。

「……放せ。」

「お願い！これ以上殺すのを止めて!!。」

「……何を言っている……この女はお前を。」

「それは解っているわ!!……でも、これ以上私達の家のせいで、貴方自身が手を汚すような事はもうしないで……!。」

少女1は顔を「ジャツジ」の機体の背中に埋めながら言った。

「お願い……お願い、……。」

そんな思いが届いたのか、創は無言で剣を地面に刺す。「ドン！」と言う音が微かに響く

「……いいだろう。」

創の間の置いた言葉が少女1の耳に届きそれを聞いて少女は「ありがとう……」と呟き、創から離れた

「だが、一つ言っておこうことがある」

「なに?……。」

「俺にそんなぬるいじゃ通じねえぞ。」

そう俺は言い地面に刺さっている【ジャツジソード】を地面から引き抜き何も起こらなかったかのようにその剣をしまった瞬間。

頭、身体、腕、足、腰、をバラバラにして殺した

創の行動に少女1は「!？」と驚くが遅かった。

そして創は男性3人女性4人……計7人全て斬殺した。

男の娘が天災を家に入れるのは良いのだろうか？

「そ、そんな……何で、何でなの？。」

「そんなぬるい話、誰が信じろと言った？。」

その一言を言った瞬間、少女1はかなり心に傷が付いたが、俺には関係のない話だ。

「そろそろ、此処から去ろう。此処にいても、何も意味が無いからな。」

そう言い俺は走って（↑マッハ20）この現場から去った。

「なんで……なんで……どうして……？」

少女1は息が荒くなり、耐えられなくなって地面に倒れて、意識を失った。目が覚めたら病院に居た。

一方俺の方では

（くうー!!、楽しかったー!!あの感覚、「ジャツジ」じゃないと考えられないねえ。）

俺は工場で楽しい考えを言っていた。

（本当に楽しかったなあ〜ロシアだけ、期間限定楽しいスポット（人殺し）を体験したか

（あつ、そう言えばそうだったなあ）「でも変な事するなよ。」

「しないしな〜い。」

「怪しいなあ、まあ、とにかく入れ、誰かにばれたら豪いことになる。」

「いいの!?!、ヤッター!!。」

と言う形で束を家（工場）に入れた。

「うわあああ!! 凄いいね!!。」

中身は中古には見えない工場の姿があった。

「ねえ!! ねえ!! あのISを出してくれる?。」

（!?!…知ってたんだ。何処から知っていたのかな?。）

「……何処から知ってるの?。」

俺は殺気を向けるように言った。（殺気レベルMAX。）

「ひ!?!、ほほほほら、君がISを粉々にした所から!。」

「……ふーん。」

（怖い怖い怖い怖い、メツチャ怖すぎる〜。）プルプル

「……何処かにカメラがあつたの?。」

「うん! うん! 監視カメラから見たよ!!。」

「……あの場所に監視カメラがあつたんだ。」

(マジでマジで怖い!!)

「……悪用にしなかつたら見せるよ。」

「大丈夫大丈夫!!この束さん。私が見たことが無いISを見せて欲しい、良いよね!!。」
「……いいだろう。ただし、俺の機体を調べて最後に盗もうとしたら【キラードロイド】で潰してやろう。」

「【キラードロイド】?。」

「この工場には束に見えていない機体がたくさんある、この地下にな。」

「そう言い俺は歩いて地下の入り口を教えて束を連れて地下にあるIS(LBX)を見せた。」

「なにこれ!!、凄いい!!。」

束は元気に子供みたくにはしゃいでいた。

(もし、俺もISが無かつたら、こんなにはしゃいでいたのかな?)

俺は昔の事と、例えの想像をしていた。

男の娘が天災に殺気を上げて家から追い出すのは楽しいのか？

俺と束は「LBX」の説明をしていた。していて俺もだんだん楽しくなってきた。

束も此処まで燥いなら、子共が楽しんでる姿に見えていた。

色々なIS（LBX）を説明し終えた後、束は爆弾発言をするとは思わなかった。

「ねえねえ!!【キラードロイド】を見せて!!。」

「!?……何故【キラードロイド】を見たいの?。」

（殺気レベルMAX。）

（何で何で!?【キラードロイド】は駄目なの!?!。）

「何で【キラードロイド】を見たいのかって、聞いてんだよ!!。」

（怖い怖い怖い!!!でも束も負けないぞ!!。）

束は勇気を振り絞って、創に言った。

「それは、興味があるのよ!!。」

「興味があつて、それを見たいのか? ISを作った天災（束）がまた天災を起こすのか?。」

「そんなことはしないよ。ISは「ISを聞くだけでイライラするなあ」どうして!？」

「どうしてだと？お前が作ったISのせいで、俺はどんな目にあつたと思う?。」

「え?。」

「知らないようだ。なら教えてやろう、俺が何故この工場に住んでいるのか。」

創はどうしてこの工場に住んでいるのかを教えた。その時、束は涙を流していた。

こんな子供がISがあつたせいで両親に捨てられて、ここに住んでいるだなんて。

「お前のせいで、俺は此処に住んで居るんだよ。お前のせいで俺は7年間此処に住んでいるんだよ。その気持ちは、お前に解るか!!。」

創は大きく束に怒鳴つた。束は「ごめんなさい」と誤って涙を流していたが創の怒りは止まらなかつた。

「もう一度言う。何の目的で此処に来た?。」

束は

「君が…見たことない……ISが……見に来ただけ……。」プルプル!!

「俺の大切にしてている仲間（LBX）をIS呼ばわりにするな!!。」

その怒鳴りで束は「ヒツ!!」っと怯えていた。

「俺の大切な機体（LBX）をIS呼ばわりだと?……俺の機体達は男でも女でも使える革命的な機体を。女子が使うイライラするザコロボットと一緒にするな!!。」

東は泣きながら急いでロケットに乗って、此処から去って行った。

「ふう、すつきりしたなあ。」

俺は良い厄介者（東）が消えた事で気持ちよく家に戻ってベットのの中に寝た。

男の娘がフランス人の家族になるのは良いのか？

東は泣いて家に帰った後、寝て朝に起きて、新型「LBX」の開発をしていた。

（一人で新型「LBX」を作って見たかったんだよね。）

創は楽しそうに新型「LBX」を作っていた。

それから1時間。

「よっしゃあ!!出来たー!。」

俺が開発していたのは「LBX レギオンアーク」。

これは少しパクリだが、ミゼルオーレギオンとオーレギオンで少し混じった存在。

セッティングは全て【オーレギオン】と同じ、だが体にミゼの我王砲の穴の周りに輪っかがあつて普通のレギに付けている、あとミゼレギの仮面も付けている。

後色はブラック

「カッコいいねえ〜【オーレギオン】は俺のランキング第1位ぐらいに大好きな【LBX】だからね。」

『ピンポーン!。』

「ん?。」

(お客さん?でも此処に来る人は余りいないし。)

俺は一回玄関に向かつて相手は誰なのかを覗いたら。

デュノア家の家族が居た。

(何で居るの!?!しかもさらに可愛くなっているし!!。)

俺は仕方なく扉を開けた。

「どちら様ですか?、「創さん!!。」／／／ うわ?!。」

デュノアはいきなり俺に抱きついた。デュノアの母はニヤニヤしていた。

「ど、どうして此処にいるの?。」

「創さんに会いに来たの!!。」

「え、それだけ?。」

「うん。」

「分かったけど、離れてくれない?。」

「え?……あつ!、ごめんなさい!。」

「いや、いいよ。上がっていいですよ。」

母とデュノアは創の家(工場に)に居れた。

「わあ!!。」

デュノアは燥いで家(工場)の家具を見ている。

「凄いなね！」

「うん。」

デュノアは楽しそうだ。

「創君。」

「はい。何でしょう。」

いきなりデュノアの母から呼ばれた。

「話がしたいのだけど……。」

「それなら大丈夫です。地下がありますので、そこで話すのはどうでしょう?。」

「ええ、分かったわ。」

創はデュノアの母を連れて地下に向かった。(「LBX」を閉まった状態で。)

「話と言えば…手紙の事ですね。」

「ええ、この手紙に書いてあったことは本当?。」

そう言つて手紙を創に見せた。

「本当です。全てその手紙に書いてあったとおりです。」

「でも、どうして?。」

「理由は。」

創は自分は何者かを説明して、その時デュノアの母はビックリしたがそれを受け入れ

てくれた。

「じゃあ転生して、ずっと此処に住んで居るの?。」

「それは少しは当たって少しは違います。」

「どうしてかしら?。」

デユノアの母はその答えだけは解らなかつた。

「答えは簡単ですよ。3歳までは家で生活していたのに、ISが発明されたから、家族のプライドはかなり固いから、俺を捨てたんですよ。家族の名声のために俺を捨てたんですよ。それだけの簡単な答えですよ。名声のためなら子供は要らない。」

その発言でデユノアの母は驚き、悲しい表情をしていた。

「なに悲しい表情しているのですか?自分のために何かを捨てるのはあり得るのですよ。」

創のその一言でデユノアの母は、無言で、無表情の俺に抱きついた。

「大丈夫。私が貴方の母になるわ。」

「もう大丈夫ですよ、俺は1人で7年間、1人で生きて行けたから、もう1人で十分ですよ。」

「大丈夫じゃ無いじゃない!。」

その一言でさらに強く抱きついた。

「もう良いのよ。もう一人じゃないよ。」

「……………分かった。母だって事を、認めるよ。」

こうして創はデュノア家の家族になった。

男の娘が天災に取引をするのは良いのだろうか？

こうして創はデュノア家の家族の一員になった。これをデュノアに説明したらかなり驚いていた。親は俺を捨てられていた事をかなり悲しんでいた。でも家族になったため…何て言うかよかったと思っっているらしい。

それから創は家族に恵まれた生活を送っていた。家族と食事は何年ぶりなんだろう。家族と一緒に居て楽しい生活を送っていたが、やっぱり創は仕方なくある人に電話をしようと思った。

今頃俺は仕方なくある人に電話をした

『ハーイ!!皆のアイドル!!、東ねさんだよー!!君は?。』

「……久しぶりだな。東。」

『あれ?この声って創君?どうしたの?。ISを作った私に恨んでいるのに電話を?。』

「単刀直入に言う、東。少し取引をしないか?。」

『どうしたの?あの時、私を恨んでいる東さんを。』

「確かに恨んでいるさ、でも、それ程じゃなかった。あの時は…お前だったから、からか

おうと思ったんだ。本当はそんなに恨んでいない、あの時、あんな言い方して、本当にごめん。」

『……もおく！あの時はからかおうとしたからあんなに殺気を上げていたんだ……。』

「あんなに酷いこと言つてごめん。」

『良いのよ。もうからかわないでね。』

「お前が悪いことをしたらな。」

『もおく素直になつてよく!!。』

「それより、取引は出来るか?。」

『取引の内容は?。』

「デュノア家の母は不治の病で死ぬのかもしれない。だから、助けてほしい。」

『どうしてそんな事をするの?。』

「家族が出来たんだよ。馬鹿みたいで笑えるだろ?。」

『家族が出来たの?。』

「……笑えるだろ?。」

『ううん、家族が出来て嬉しいね。』

「ああ、俺一人の生活と違って、楽しい生活だったよ。でも、母は不治の病で後1、2年で死ぬんだ。だから、頼む。家族を助けてほしい。」

『……良いよ。手伝ってあげるよ。この天才東さんが治してやるよ。!』

「ありがとう。本当にありがとう。」

（あれ？何で泣いているのかな？俺は一人で生きていたのかな？本当に泣けてきたよ。）

『それで、何を渡してくれるの？』

「誰にも見つからない、土地と場所はどうだ？。」

『土地と場所？。』

「つまり誰にも追ってこれずに誰にも見つからない場所に連れて行くことだって出来る。それと、……やっぱり金は要らないようだな。」

『お金？何円渡せるの？。』

「ざつと一兆円だ。」

『………冗談よね。』

「本当だ。この取引だけはふざける気は無い。」

『分かった。それでいいよ。』

「じゃあ、取引成立。明日会えるか？。」

『大丈夫よ。くーちゃんも連れて行くから。』

「くーちゃんって、あの子の事？。」

『……知ってるの？。』

「ああ、知ってる。クロエ・クロニクルだな?。」

『……何でくーちちゃんの事知ってるの?。』

「明日に会えるからその時に話す。」

『……分かった。』

電話を切つて準備を束が来る準備をした。

男の娘が天災に本当の事を話すのは良いのか？

創は東と取引をし、リビングでおとなしくソファに座っていた。

「ねえ、創、一緒に遊ぼう！」

「ん？、ああ、ごめん。今日は大事な日なんだ。今日は無理だよ。」

「ええ〜！何で〜？」

甘えてくるデュノア、だが今日は大変な日なんだ。

「ピンポン！」

「!? やつと来たか、待ちくたびれたぞ。」

創は玄関の前に向かってドアを開けた。

「はろ〜！皆のアイドル篠ノ之東だよ〜！」

（相変わらずウザ、だが、今回は取引だ。）

「待っていましたよ。東さん。」

「私も来ました。」

「君が、クロエさんだね、上がって良いですよ。」

そう言つて束とクロエを中に入れた。

「創さん!?これって!?。」

「創さん!?!これはどう言う事なの。」

束を見て、デュノアと母は凄く驚いた。創は2人に説明をした。

(後で説明するから。)

(本当に?)。

(本当だから。)

「此処で話もなんだし、地下で話しませんか?束さん、クロエさん。」

「分かったよ。それと、どうしてクーちゃんの事を知っているのかを話してもらうね?。」

「ちゃんと話しますよ。」

そして創は束とクロエを連れて家の地下に向かった。

「此処なら、話せますよ。」

「じゃあ、遠慮行くね。どうしてクーちゃんの事知ってるの?。」

「今言うことは本当の事です。」

創はクロエの事と転生の事と機体は神の特典の事とこの世界はアニメの世界の事を話した。この世界はアニメだと言うことは凄くビックリしたらしい。

「信じられない話ですが、信じてくれますか?。」

「確かに信じがたい話だけど、信じるよ。見たこと無い機体は君の世界の大切な【LB X】、なんでしょ?。」

「まさか私達が居る場所はアニメの世界そんな事があり得るなんて。」

「まあ……クロエさんの出番があまりなかった人ですが。」

「……誰が出番が無いですって!!。」

「しよすがないだろ!、アニメの数話回数を見ても!、ほんの1話だけしか出ていなかったから!・解りにくいだろ!。」

「何ですって!?。」

「まあまあ落ち着いてよ。2人とも。」

「それで、取引は成立ですか?。」

「うん。大丈夫だよ。それと1兆円って本当なの?。」

その発言で少し創はニヤけた。

「……試してみる?。」

「1回見せて!。」

「……じゃあ、……内ポケット見て見て。」

そう言ったら束は「へ?」っと不思議な顔をしていた。やってみると。」

「チョコ○モナ○ジャン○!!」

「うわあああああああ??」

「キヤアアアアアアア!!??」

大量の札が飛び散った。……この反応面白いなあ。

で一回、大量の札で埋もれてしまった。

「ぶはあ!!……ええ——!!??」

最初に起きたのは束だつた。束は今ある金を見て驚いていた。

「どうしてそんなに金有るの!!??」

「特典の話すね。」

創は特典毎日500億円もらうって事を話した。

「何だよそれ!?ありかよ!?!、つうかまだ持つてるの!?全部この束によこせ!!」

「条件は1兆円だぞ。それよりこれで良いんだな。」

「うん。大丈夫これだけの資金が有ったら治療することは出来るよ。」

「ありがとう。」

「良いのよ。私がISを作ったせいで、君は1人で生活をしていた。でも、新しい家族が出来たら、助けないといけないよ。」

「本当にありがとう。……何か2人だけの空気だな、もう1人居たと思うんだけど……」

「確かに……。」

「あっ!。」

「クロエ!。」

「くーちゃん!。」

クロエがまだ沈んでいたらしい

その後2人で持ち上げてリビングに休ませた。

男の娘がフランス人に【LBX】をあげるのは良いのか？

創は束に取引して、上手く成立した。これを、デュノアに話したら、ショックだった。母親が病気だったなんて、しかも不治の病。誰にも治せない病を束に頼んで母は今は治療している。が少し創の事をデュノアに話した（転生の事も）デュノアは受け入れてくれた。

そして今頃。

「もう少しだな。念には念を。」

俺はデュノアの為に【オリジナルLBX】を開発していた。

（後は、これと、これと、これね。）

時間を積み重ね、やっとデュノアの機体が出来た。

黄色を入れた邪悪じゃない機体、【LBX ルシフェル】

この機体は少し紫の部分がその部分は黄色にしている。悪魔の角があるがその角を外し、を、天使の輪っかにしている。ちなみにレーザーの輪っか（黄色）。

武器はヘブンズエッジの光剣は紫じゃなく白い光剣にしている。

天帝ネメシスシールドこれも紫の部分があるから、白にしている。黒の部分は黄色に

している。

「よし！完成した。これをデュノアに…あつ！そうだ！。これをブレスレット型にしよう！。」

創は金の美しいブレスレットを「ルシフェル」にインストールし、デュノアに新しい【真・LBX ルシフェル】が完成した。

「よし！渡しに行くか！。」

創はデュノアに渡しにリビングに行った。

「デュノア。」

「ん？何？創？。」

「実はプレゼントがあるんだ。ほら、これ。」

創はデュノアにブレスレット（LBX）をデュノアにあげた。

「へ!?良いの!?!。」

「良いよ。それ、少し改造したブレスレットだから。」

「…：…一体何を改造したの?。」

「ああ、実はそのブレスレットに【LBX】を入れている。」

「【LBX】って創が言っていた。前の世界にあつたロボットの事?。」

「ああ、それをデュノアにプレゼントしようと思つて作つたんだ。俺の…【オリジナル

【LBX】貰ってくれる?。」／／／

……何かバレンタインみたいに口で言ってしまったよ!!。

(か、可愛い!!。」「う…うん。良いよ。」「

「あ、ありがとう。」

(可愛い過ぎるよ!!創。)

創はデュノアにブレスレットをあげた。

「じゃ、じゃあ、部屋に…帰るね…。」

そう言っ創は自分の部屋に帰って行ったが。

「ま、待って!。」

デュノアに呼び止められた。

(ドキッと来た〜!)。「な、何?。」

「【LBX】の使い方を教えて?。」

「あつ、う、うん。良いよ。部屋に来る?。」

「ふえ!?!、あ、良いよ。」

「分かった。行こうか。」

創はデュノアを連れて、俺の部屋に行った。(研究室。)

「ふわあああ!!凄いね、こんなに【LBX】を作ったんだ。」

「どれも、自分作じゃないけどね。さて、【LBX】のおさらいをしようか。」

「はい。お願いします。」

「じゃあ、これを使うよ。」

そう言つてポケットから【Dエッグ】を出した。

「それは？。」

「これは【Dエッグ】【LBX】の被害を抑えるために作られた【バトルフィールド】だよ。」

「【バトルフィールド】!?その卵が!？」

「そもそもエッグつと付いているから卵だよ。」

「使い方は簡単【Dエッグ】には赤いボタンがある。そのボタンを押して後は投げれば【バトルフィールド】が出来る。」

それらの説明とバトルをして行き、いつの間にかデユノアは強くなっていった。

「これで、もう教えることは無いよ。」

「ありがとう!。創!。こんなに楽しいのは初めてだよ!。」

「それは良かった。……そうだこの【Dエッグ】をあげるよ。」

「え、でもそれ。」

「大丈夫。それに【Dエッグ】50種類もの【バトルフィールド】があるんだ。だから1

つ失つても平気。」

「分かった。ありがとう。」

デュノアは「Dエッグ」を手に入れた。

男の娘が亡国機業と戦う前になるのは良いのか？

あれから5年。デュノアはさらに可愛くなった僕っ子がなんか気に入るんだよなあ、私語も。

今頃の創とデュノアはテレビを見ていた。……まさか、

『先程、I S学園の合同入学試験会場にて男性がI Sを起動したとの事です！。』

ん？…何て言った？。

『I Sを動かした男性の名前は「織斑一夏」さん、15歳。』

「案外早かったな。」

「それはどう言う意味？。」

「原作だったらこうなるのは解っていたがまさか同じ歳になるとは思わなかった。」

「束がなんか変なことしなければ良いんだけど。」

「そうですねえ。」

『ピンポーン！ピンポーン！』

「何だ？こんな場所束しか知らない場所何だけど．．．」
「そうなの!？」

「うん。まあ、とにかく出て見るね。」

創は玄関に出て誰か居るのかを見たら。

「創！居るよねえ！居たら返事して！」

（な!?!、何だ!?!束何かあったの!?!）

「束!?!。何だ?、どうした?何があった!?!。色々大変だから一回家に（工場）入れ!!それからリビングで話そう!。」

「うん!。分かった!。」

創は束を家に入れてリビングまで連れて行った。

「で、何があった?。」

「創。謝りたい事があるの。」

「だから何があったんだよ!!。」

「実は……。」

束はやってはいけない事をやった。

「お前は〜!!何でいつもいつも口が外れるんだよ!!!。」

「そうよ!!。」

「ゴメンなさい!!。」

色々束に叱りをし続けて、聞かないといけない事を聞いた。

「で、…母の不治の病治った?。」

「うん。バッチリね!ブイ。」

束はそう言っ指をV字にした

「それって。」

「母はもう治ったの!?!。」

「うん。でも少し力を使ったから、今は少し寝ている。」

「そっかあ。」

「良かった。母が無事で。ありがとう。束さん。」

「いいのよ。これ位。じゃあそろそろ帰るね。バイバーイ!。」

そう言っ外に出ていつの間にかロケットに乗っ帰っ行った。

で、今頃

「えーと、こつちだったっけ?。」

創は学園目指して電車に乗っ向かっている。

「えーっと、此処だったっけ?。」

迷子になってしまった。

「一回一息つくか?。」

創は公園に座って一休みした。

「さて、行くか。」

色々あつて、本当に迷った。ここ何処?工場?何でこうなってんだよ!?畜生!!

『ピロピロピン!。』

「ん?何だ?。」

俺は知らない誰かに電話を出た。

「もしもし「何処にほつき歩いている!!!」わあああつつ?!!?。」

突然の大きい声で創は倒れた。

「へ?何で電話解つてるの?それに声が大きいよ!!。」

「東に教えてもらつた。井上!何処にほつき歩いている!!。」

「……!?!?……じゃあ、悪い事2つ言います。まず1つは道に迷つた。」

「まったく…何処に「2つは、」

「亡国企業。知っていますね。」

「……だつたらどうした?。」

「今後ろにその仲間が居るんですよ。迎えに来てくれますか？出来れば早く。場所は工場。で、もう使われていない工場で〇〇都にある工場ですよ。俺はできる限り逃げるから、迎えに来てくれ。じゃあな、千冬さん。頼みますね。「お、おい!!。」

創は電話を切った。

「さて、何の用ですか？亡国企業の人さん。」

そう言つて振り向いたら金髪女性が現れた。

「私が隠れていたことを知っていたの?。」

「電話にかけていた時に、妙に気配があつたから、多分だと思つただけですよ。当たつてよかつた。」

「当てずっぽだつたの!。」

「はい。ですが、貴方が来たならもうとつくに亡国機業だと思えるし。おっと、そう言えど忘れていたことがあります。確か貴方は、スコール・ミューゼルですね?。」

その名前を言つた時に金髪女性が驚いた。こんな子供が私の名前を知っているから。

「……どうして私の名前を知ってるの?。」

「それは自分で考えろ。」

「女性なのに男言葉を使うなんて行儀が「俺は男だ。」えっ!?!、そうなの!?!。」

「やっぱり、男に見えないよな。」

(傷付くわあ。)

「で、俺に用があるのか?。」

「本当の興味は貴方よ。織斑千冬からの電話だったら貴方は織斑千冬と何か関係をして
いる。」

「だったらどうする?。」

「もちろん。貴方を誘拐するわ。」

そう言つて、相手の I S を展開した。

「……ゴールデンドーンか、それで俺を捕まえるのか?。」

「ええ、そうよ。おとなしく捕まりなさい。」

「それは困る。だったら勝負で勝ったら、捕まつてやろう。」

「内容は?。」

「時間以内に俺を倒せばお前の勝ち。だが俺がお前を倒すか、タイムアップしたら俺の
勝ち。それでどうだ?。」

「その自身はあるの?。」

「こつちには I S (L B X) もある。これなら条件は成立する。」

「そんな I S で勝てるのかしら?。」

「さあ?、どうだろうな?…そろそろ相手になつてやろう。」

そうやってポケットから「Dエッグ」を出した。

「それは？」

「見てからのお楽しみだ。【Dエッグ】展開！」

そうやって【Dエッグ】にあるスイッチを押した。

【バトルフィールド】セットアップ！」

前に投げた投げた。卵が落ちた時緑の何かが創とスコールが飲み込まれた。

男の娘が初代ラスボス【LBX】の姿になって、会話をするのには良いのか？

【Dエッグ】の緑の何かが、創とミューゼルに飲み込まれた。

今頃。

「此処は!？」

スコールはいきなり、【Dエッグ】に包み込まれて今いる場所がいつの間にか【Dエッグ】の【火山遺跡ステージ】に居た。

「此処は…【Dエッグ】の【火山遺跡ステージ】。」

その声は目の前にあった遺跡の前に創が居た。

「これが【Dエッグ】。ISを危険な戦いは周りには被害が出る。だがこのステージなら何を暴れようが、外には被害が無い、思う存分戦って良いよ。ただし、こつちも本気で戦うから、自分の機体を壊されないようにね。」

そう言って説明したが相手は。

「ねえ!!此処は何処なの!？」

まだ此処は「Dエッグ」の中だと言うことはまだ分からなかったらしい。

「さつき言ったぞ。「Dエッグ」の「火山遺跡ステージ」…もつとわかりやすく言おうか？、つまり卵の中だって事だ。」

「何で卵がこんなに凄いの!?!」

「俺が開発した最高の「バトルステージ」が気に入らないの?。」

「いえ、こんなものが開発されているなんてね。」

「まだ1種類しか見せていないぞ。」

「それでも凄いのよ!。」

「確かに、ISを使い続けたこの世界はこんな技術は知らないだろうな。そろそろ始めようか?。」

「でも貴方、ISを着けていないわよ。」

「だったら、付けるよ。…そうだなあこの「ステージ」だからこれにしようか。でも忠告、俺が使うIS（LBX）は誰もが想像をはるかに超えている。だから、もし俺が勝ったら、今使う機体は誰も教えないでくれ。」

「あら?どうしてかしら?。」

「お前はどれだけISが強いのか俺には分かっている。お前なら、俺の、俺だけの最高のライバルになれるか?。」

「あら？告白？残念だけど受けないわよ。」

「別に告白じゃないんだけど。」

「ま、それはともかく、そろそろ始めるか。」

そう言つてスマホを操作して、1つの「LBX」を起動させた。

この場所に似合う機体を起動した。

「さあ、出番だ！「イフリート」！。」

そう言つて『はい』と言うボタンを押した。（スマホの選択ボタン。）

その時周りにある炎が俺を包み込み、誰もが見たこと無いIS(LBX)「イフリート」の姿があつた。

（ちなみにこれは、アニメでは口は開いて雄叫びを上げていたから、この「LBX」は喋れるような仕組みになつている。）

「!?何なのよ!?!、そのIS!?!。」

『こいつの名は「イフリート」。この「フィールド」の主の存在だ。』

「この【フィールド】の…主。」

眼は4つつ、マントみたいな旗も4つつ、両手には炎を持つているかのように、燃えている。さらに離れていても圧倒的な存在感に威圧感。まさにモンスターそのもの、「イフリート」の姿にスクールは、驚いていた。

『お前は亡国機業の幹部とも呼べる存在なら、この姿を怯えるも者は居ないはずだろう？。』

（その挑発に少しは怒ったけど、相手の方が上だ。考えて、戦わないと……。）

『準備は良いか？。』

「ええ、良いわよ。勝って、貴方を誘拐するわ！」

『それは、勝てたらの話だ。じゃあ、行くぞ！。』

男の娘が【LBX】で圧勝するのは良いのか？

創は一気にスコールに突っ込んで殴り掛かった。

だがスコールは鞭を使いバリアを作り「イフリート」の攻撃を守ろうとしたが。

【イフリート】は右の拳をバリアにぶつけ、バリアを簡単に壊してしまう。

「なに!?!」

【イフリート】がスコールのバリアを壊した時に驚いた。突破出来ないバリアをこのI Sがいつも簡単に、ぶっ壊したから。

【イフリート】がバリアを壊してもう一度、拳でスコールに殴り掛かり、相手のI Sに当たって、かなりのダメージをくらった。

(たった一度の攻撃で此処までの力……相手が違い過ぎる!。)

『どうした? その程度か?、幹部の実力がその程度じゃあ、俺の【イフリート】は止められない!。』

「舐めるなあー!!。」

スコールはその挑発に乗ってしまい、炎の鞭で【イフリート】に突っ込んで攻撃してきた。だが、【イフリート】はその攻撃は効かない。

『ほらよー!。』

【イフリート】は相手に尻尾で相手を相手に喰らわせた。

「ぐわああ!!?。」

スコールはあっけなく吹っ飛んだ。

『挑発に乗ったら、命取りになるぞ。』

「くつ、生意気な!これで!、どうだ!!。」

相手は何やら火の粉を凝縮していた。

(火の粉を凝縮している?……まさか!?)

「これで、どうだ!!」「ソリッド・フレア」!。」

相手が太陽なような玉を俺に向けて発射して大地にぶつかつた。

その時、大地が大きく、マグマのような大地になって、後は黒い煙が散らばっている。(フフツ、流石に超高熱火球は効いたでしょ。今までこれを受けて生きたISはいないわ!。)

そう思い勝利を確信した……だが。

『……フ、……フフ、……フハハハハハハ!!。』

【インフェルノモード!】

「え?。」

【イフリート】の笑声と電子音が聞こえてきた。

「…そんな…「ソリッド・フレア」を受けて今まで無傷で生きていた相手は居ないので!。」

煙が晴れた場所にはいた機体に赤いオーラを放つ、「イフリート」の姿があった。

「な、何なの、その姿!?それに、何でダメージは無いの!?!」

『この状態は「インフェルノモード」【イフリート】専用パワーアップの【特殊モード】だ!。』

（【イフリート】だけ使える【特殊モード】!?! ISは更にパワーアップするの!?!）

「で、でも、「ソリッド・フレア」を受けていないの?。」

『なら教えてやろう。【特殊モード】【インフェルノモード】の効果を。』

「効果?。」

『【インフェルノモード】の特殊効果は、全ての遠距離攻撃を無効にする!。』

「え?。」

『つまり、俺の機体は遠距離攻撃は一切受け付けない、どんな遠距離攻撃も、防ぐ効果がある。』

「嘘でしょ!?!、「ソリッド・フレア」が効かないなんて。」

『そろそろ、こっちからも行くか。【イフリート】だけの必殺技を！。』

(何!?!、必殺技!?!まだ力があるの!?!。)

『くらえ!、【必殺フアンクション】。』

【アタックフアンクション ヴァルゾダース。】

その電子音が鳴った時、紫色の目が光って、胸の4つの穴が赤く光った瞬間、肩の後ろから炎が出てきて、両腕を強く握り締めてさらに力をため、炎がまた大きくなつてスコールに突撃して、右腕の拳で殴ろうとした。

だが、スコールは「プロミネンス・コード」でバリアを作つて【イフリート】の攻撃を防ごうとしたが。

『そんなバリアじゃあ、俺の【イフリート】は止められない!!。』

【イフリート】はそんなバリアをいとも簡単に破壊し、スコール後ろに回り込みまた右腕でスコールを殴り飛ばした。

「ううっ!。」

スコールはその衝撃は耐えられず、壁にぶつかつて、スコール倒れて意識を失つた。

『俺の勝ちだな。』

男の娘がテロを飛行機に乗せて送り返すのは良いのか？

(終わったか、あっけなかったなあ)

そう思い、「イフリート」と「Dエッグ」を閉まった

目の前にいたのはISを着ていたままのスコールが居た

(そのままにしているのは、さすがにしらけるなあ、仕方ない、「ライディングソーサ」で運ぶか)

創は、スコールを運び、「ライディングソーサ」に乗せて、亡国機業のアジトに移動させる準備をした

(ついでに、手紙も入れて置こう。そして、こう書いて置こう(いつでも相手になつてやるよ))

そして、「ライディングソーサ」が起動し、スコールを運び亡国機業のアジトに向行けで発進して帰らせった

「よしー、これでOKだ！」

「何が『OK』だ」

『ビク!!』

(後ろに誰かいる……)

創はブリキロボットみたいに『ギギギ』振り向いたら

(お、鬼!、怖い怖い怖い!!)

「そ、それは…ほら、俺は無事」無事なら何でさつき、飛行機で飛んで行ってI Sに乗せていたは何故だ?」あつ

「詳しく聞こうか?」

「は、はい」

俺は鬼に本当のことを話したら、かなり怒られた。犯罪者を逃がしたから

「まったく、お前は…テロ組織の幹部を逃がしてどうする…」

「は、……はい」

創は今、正座をしていた。織斑千冬。恐ろるべき鬼だ

「それで、もう正座はもう終わってもいいですか?」

「ああ、もういい、が、1つ言うが逃がしてしまったテロ組織の幹部はどうするのだ?お前の命を狙っているのかも知れないんだぞ」

「その時は、また相手になりますよ。それに、あいつと戦っていたら、何か寂しい表情を
していたんですよね。」

「それはどう言う意味だ?」

「あいつは、何か、裏切られて、テロになった。俺は他の言葉は苦手だけど、これだけは言える。テロの中には仕方なく入った人も居るって事。ただそれだけしかわからない。」

(もしかしたら、あいつも俺と同じように捨てられたのかな?)

「それは置いといて、そろそろ、IS学園に行くか、丁度先生が居るから多分送ってくれらるだろう」

「私は運び屋じゃない!!」

また怒られた

で、今頃の「ライディングソーラ」でスクール運んでいた飛行機は見つからないように透明の姿になって侵入し、スクールをベットのの上に置いて布団をかけて、寝かせた(「ライディングソーサ」は手も出てくるのだ)

でそれから、寝ている。スクールに、手紙を置いて、「ライディングソーサ」は帰って行った

……………それから1時間。てか早!?

「う……ん」

スコールは目を覚めたら。自分が何をしていたのかを考えてたら、あのISの事と戦って負けた事を思い出した

「イフリート」。かなりのIS。しかも私と同じ火を使う機体、圧倒的な攻撃力と防御とスピード。さらには「特殊モード」も付いている強い機体だった。

（手も足も出なかった。あんなISがあるのか。……世界は広いと言うわけか……ん？）

スコールはベットの中に手紙が入っていた

「これは？」

私は手紙を持って読んでみたら

楽しかったぜ！また相手になってくれるか？いつでも待つてるぞ！

井上創

その内容に私は笑ってしまった。誘拐しようと思っていた男がそんな内容を書いていたからだ

（井上創か……その名前、覚えておこう）

（また会ったら、その時は、強くなって相手になろう）

スコールはそれを心に思い、ISを使ってトレーニングをしていた

男の娘が姉に再開したが姉は創の事を忘れているのはかなり良いのか？

「はあー、やっと着いた〜」

そう言っつてベンチに座った

『ゴン！』

「痛って!?!」

誰かに殴られた

「付いたら筆記試験と面接、ISによる模擬戦をして貰う」

「だからと言って、殴るなよ！」

「お前がのんびりしているからだ！」

色々ガミガミ、創と千冬は喧嘩していた

「2人ともそれぐらいにしてください！」

(!?…その声は…)

東がドジしなかつたら

俺がずっと一人で暮らしてたら

こんな事にはならなかつた

79 男の娘が姉に再開したが姉は創の事を忘れてるのはかなり良いのか？

最低

そう

最悪

最凶の

旧家族の一人の

姉が現れたから

「ああ、すまない。山田先生」

「いえ、それより、織斑先生。その女性は誰なんですか？」

「ああ、この子が、束が言っていた男だ」

「え!?!、女性ですよ!?!」

「確かに、女性に見えるが、男らしい」

「そ、そうなんですか」

(何でいるの? 何で俺の前に現れたの? 俺を捨てた家族の1人が!)

創はそう思い、右手を握った。血が出るほど

「ど、どうかしたのですか!?! 血が出ていますよ!?!」

山田はハンカチで血が出ている俺の手を触ろうとした

『バシッ!』

当然、俺は左手でその手を弾いた

「要らねえよ。手当しなくていい」

「おい！、お前「千冬先生、試験会場に案内出来ますか？」おい！」

「早く、試験をやりたいですよ。場所、案内出来ますか？」

「おい！」

「早く！」

（手加減、殺気レベルMAX）

（!?子供なのにこの殺気!?!）

（怖いです!?!）

「まだ準備出来ていないんですか？」

「あ、ああ分かった。試験の準備をする」

「それは、早くしていただいて、ありがとうございます」

そう言つて千冬に頭を下げた

「そろそろ行くぞ」

「解りました」

そう言つて、創は千冬について行つた

(こ、怖かった。一夏君よりかなり酷い男子生徒が入つて来ましたね。それにしても、どうしてあんなに殺気を出していたのだろうか?)

山田はそのことだけは全く分からなかった

そして3時間

「やっと終わったか〜」

創の殺気が無くなっていて、後は模擬戦だけになった

「なあ、井上」

「ん？…何だ？」

千冬がいきなり創の事を聞きに来た

「お前、どうして、あんなに殺気を出した？」

その一言で創の顔は怒りに変わっていた

「……千冬には関係無いだろ」

「いや、関係はある。お前のクラスの担任は、私だからだ」

「だから何？それだけで、自分が凄いつつと言うだけだろ？俺と先生だったら何も関係ない」

「先生だから「千冬には関係ないだろ」学校では織斑先生と呼べ！」

「だったら織斑先生。先生が俺に何の関係がある？」

「それは「先生だから？それだけで人の過去を聞くなよ。」だから！」

俺はスマホを確認した時間は4時30分。

「そろそろ時間だ。模擬戦の時間だ。そろそろ行きましょう。案内してくれますか？」

「お、おい！、……はあ、分かった付いて来い」

「ありがとうございます。織斑先生」

千冬はため息付いて、仕方なく模擬戦の場所に連れて行った

男の娘が5年前の相手を本気で戦う前は良いのか？

織斑先生が模擬戦のルールを教えてくれた

「解りました。それで、相手は誰なんですか？」

「ああ、相手は生徒会長が相手になる」

「生徒会長が？授業はもう、終わっているのですか？」

「お前、馬鹿か？、今何時だ？」

創はスマホを出して、時間を見た

「5時だけど。まだ学校やってるの？」

「もう終わってるよ！。学校は「あつ！相手が来ましたから行ってきます。」おい！」

そう言って走って、グラウンドに向かった

「おい！…全く、話が聞かない生徒が来たようだな」

千冬はもういい加減、飽きてきた

（凄く大きいなあ、此処で戦うのか……なんか弱い防壁だなあ、…そうだ！これを使おう！）

創が取り出したのは「Dエッグ」を取り出した

(でも、まだ投げないけど、準備位はしておこう)

そう思い「Dエッグ」をポケットの中に入れた

(あいつが生徒会長か……あ、あいつは!?)

創が見た生徒会長は、5年前の事件の少女だった

(まさかあいつがこの学園に来ていたとは、出来れば会いたくはなかったけど)

「君が、俺の相手か？」

「ええ、そうよ。私は更識楯無、IS学園に「知ってるから言わなくていいぞ」もう！でもこれは知らないでしょう？ロシア「国家代表だろ」何で知ってるのよ!?!でもこれなら知らないわ、このISは「ミステリアス・レイディ。だろ」それも知ってるの!?!」

「一応、知っておかないといけない事は頭に覚えてるから」

「でもどうして？俺の言い方なの？」

「男だよ」

「え!?!でも、織斑一夏君ならもう、「2人目だよ」もう1人いたの!?!」

「ああ、それと、本当はお前と会いたくなかったのに、何で居るんだよ」

「どうして私に会いたくなかったの?」

「……………5年前。覚えてるか？」

「……え？」

（五年前？そんなに前に彼と会った記憶は……!?……まさか……いや、そんな事は……）
「……どんな時に私と会ったの？」

「話は終わりだ。織斑先生。試合、開始してください」

『でも、お前の機体は出していないだろ!?!』

「良いから！」

『……分かった。それではこれより、井上創対更識楯無の模擬戦を始めます!』

千冬からのアナウンスが流れた

『それでは、試合開始!』

「どうしてI Sを付けずに始めたの？」

「本当は、会いたくなかったのに。この戦いだけは本気で行くぞ！」

「何をするかはわからないがかかって来い！」

「まあ、待て、今からI S（L B X）を付けよう。」

「何でこんな時に？」

更識はまだわからなかった。審判の機体が動くことに

男の娘が【LBX】で戦っても発揮できないから【Dエッグ】を使うのは良いのか？

【LBX】セレクト、【LBX ジャッジ】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX ジャッジ】でよろしいですか？

俺は、その選択に「はい」を押しした

その時空から、【ジャッジソード】が落ちてきて、その剣を右手で握ると

手から【ジャッジ】のRアームに変わった。それだけじゃない、R以外の【ジャッジ】

アーマーに変わった

「!?、その姿は!?」

楯無は【ジャッジ】の姿になったらすぐに驚いた

5年前、あの時、私のせいであの人に人殺しをしたから

「どうして……【ジャッジ】…貴方だったの!?!」

『やっぱり、覚えているじゃんか』

「貴方に言いたい事が『今は俺と戦うことだ』でも！」
『でもじゃない！。もう戦いは始まってているんだぞ』

そう言つて地面に刺さっている【ジャツジソード】を抜いて【ジャツジソード】を楯無に向けた

『逃げるのか？、生徒会長のお前が』

その一言で楯無は目を瞑つた。何か考えているから

「分かつたわ。貴方と戦う。そして、言いたい事を言う！」

『その意気だ。かかつて来い』

【ジャツジ】は楯無にそう言つたらいきなり創に突つ込んできたが

【ジャツジ】は【ジャツジソード】の風圧で楯無を吹っ飛ばした

「嘘?!」

楯無はその風を耐えきれず壁にぶつかった。その時壁にひびが入つた

(ぐっ!?!、なんて力なの!?!これじゃあ近づけられない!?!)

(これじゃあ、【ジャツジ】の力がうまく使えねえじゃねえか、仕方ない【Dエッグ】を使うか)

『おい、生徒会長』

「な、何かしら?」

『此処の場所じゃあ、うまく力が発揮できない。場所を変えるぞ』

そう言ったら

『おい！井上！移動は認めないぞ！』

『安心しろ。あくまで、これを使うだけだ』

『ジャッジ』はそう言ってポケットから【Dエッグ】を出した。

作者「どうやって出したんだ!?!」

『井上。それは何だ?』

『これは【Dエッグ】。いつでも何処でも、IS(LBX)でバトルすることが出来る【バトルフィールド】だ』

『その変な卵が?』

『ああ、なら試してみるか?。楯無。お前は どうする?』

「……分かったわ。使って良いわよ」

『なら使おう。【Dエッグ】展開。【バトルフィールド】。セットアップ』

『ジャッジ』は【Dエッグ】にスイッチを押し、前に投げた

そしたら、【Dエッグ】が緑の何かが創と楯無が飲み込まれた

「此処が【バトルフィールド】!?!リアル過ぎるわ!?!」

楯無は【Dエッグ】に飲み込まれて今いる場所は【Dエッグ】の【闘技場ステージ】に

居た

『どうだ？このステージは？』

後ろからその声は「ジャツジ」が居た

「本当ね。この広さじゃあ、学校のグラウンドの3倍位はあるね」

『さあ、第2ラウンドと行こうじゃないか？』

そう言って「ジャツジソード」を構えた

「ええ、これからが本当の勝負！」

果たして!?!勝つのは!?

男の娘が【ジャッジ】で代表者を倒すのは良いのか？

『最初は、こちらから行くぞ！』

そう言つて走つて相手に一撃をあげようとしたが楯無はそれを止めてしまおうとしたが

(俺の【LBX】はI-Sを超えるチートの中のチートの力を見せてやろう！)

【ジャッジ】の一撃はミステリアスには敵わなかった。その防御が崩れ、また吹っ飛んだ(何なのよ!?!5年前のとは比べてなんて威力なの!?)

楯無は一端距離をとつてガトリンガン撃ってきたが

『連射で当たると思つたら違いだ』

ガトリングガンの弾一発一発よく見えていて、それを全てかわした(右左に走らず真つ直ぐに)そして、楯無に近づいて居たが楯無はダメー。水で作つた自分の分身だった。だが、【ジャッジ】は

『甘い!!』

【ジャッジ】はの剣は空に投げた。

その時もう一人の楯無に当たった

『それで分身を作って、俺の隙をついて、俺に攻撃する子供騙しは、通用しない!』
「でも!、剣が手から離れているわよ!」

『それで勝ったと思ったら間違いだ!』

【ジャツジ】はジャンプして剣を右手に戻り楯無に切りかかったが。楯無はそれを槍で止めたが、ISと【LBX】力の差は【LBX】の方が上。

つばざりあいに楯無は負けて、また吹っ飛んで壁にぶつかった

「がつ!」

そして勝った【ジャツジ】は『スタ』っと着地して楯無の方を見た

『その程度か?。ロシア代表がその実力なのか?……:がつかりだ。』

その言葉に楯無は切れた

(だったから見せてやるわ!。ミスティアス・レイディの奥の手を!)

『ミスティアス・レイディの【クリア・パッション】か』

「えっ!」

楯無は驚いた。何で私が考えているのかが解るの?

『それで、俺を一撃で倒すしか道は無いだろ? だったら使ったら? 使った後、最悪の本気を使うから、覚悟を決めて、使え』

(…:最悪の本気? 一体何してくるか、解らないけど、使えって言うなら使ってやるわ

！)

「ならー、最悪の本気を見せて見なさい！」「クリア・パッション！」

ドッカーン！

この一撃を放って、周りは煙に包まれた

(これで、私が勝ったわ。……それにしても、この技を使ったら、最悪の本気を使う。……それってどう言う意味なのかな?)

『……威力もこの程度か』

【サイコスキヤニングモード】

(えっ!?嘘でしょ!?)「クリア・パッション」を受けて今まで無事だった相手は居ないのよ!?)

煙が晴れたら、目の前にいたのは緑のオーラを放っている【ジャッジ】の姿が居た

「な、何なの、その姿!?それに、どうしてダメージを受けていないの!?)」

『この姿は、【サイコスキヤニングモード】……お前の隠し武器みたいに隠し技。【ジャッジ】専用パワーアップの【特殊モード】だ』

(【ジャッジ】だけが使える【特殊モード】!?何よそれ!? I S自身はパワーアップするなんて、ありなの!?)

「た、だとしても、「クリア・パッション」を受けたのに何で無傷なのよ?」

『確かに無傷だ…さっきまではダメージはあったんだがな』

「あつたの!？」

『だが、「サイコスキャニングモード」のおかげでダメージは無くなった』

「え？」

『わかりやすく教えてやろう!。「サイコスキャニングモード」は自分の今まで受けたダメージを全て無にし!、SE完全回復になる!』

「え!？」

「つまりだ!奥の手は無意味になったと言う訳だ!」

「そ、そんな!?!…:「クリア・バツシヨン」が…効かないなんて…」

楯無は絶望していた。奥の手を使っても【ジャツジ】には歯が立たなかつたから

『さらにだ!パワー、スピード、防御、あらゆる性能を5倍にする!!』

「!?!何なのよそれ!?!いい加減にも程があり過ぎる!!」

『喋りは、此処までだ。一気に行くぞ!』

そう言つて一瞬、楯無の前にいた

「嘘!？」

『はあっ!!』

【ジャツジソード】で斬りつけて、相手を後ろに飛ばした

「きゃあ!？」

だが、【ジャッジ】はまた走って楯無の後ろに回りまた切りつけた

これを50回続けて

楯無のISはボロボロになっていた

「くっ」

楯無は何とか立っているが攻撃できる力はもうなかった

『これで終わりだ。【必殺ファンクション】』

【アタックファンクション 大真空斬!】

そのIS電子音が鳴り、【ジャッジ】は空高く飛んで【ジャッジソード】を天に上げて
巨大な光の剣が現れた。それで巨大な衝撃はを敵に繰り出した

楯無は防御出来ずにそのままくらってしまった

『み、ミステリアス・レイディ、シールド・エネルギー0、勝者、井上創!』

その瞬間俺は【Dエッグ】と【ジャッジ】をしまった

男の娘が代表に誤って千冬に殺気をあげるのは良いか？

（はあ、はあ、「サイコスキャンニングモード」此処まで疲れるのか……また調整をしないと、体に負担がかかる。このまま使い続けたらどうなっていたか……そう言えば楯無は、……やり過ぎたな。この機体が余りにもカッコいいから使いすぎたな。仕方ない。これを使おう）

そう思いポケットから「フルリペアキット」これはISや「LBX」の機体を回復する道具じゃなく、人の体力まで回復することが出来るアイテムだ

これを楯無に飲ませて、……（ドリンク式なの!?）とにかく飲ませた。もちろんもう1個出して俺も飲んだ。

楯無に「フルリペアキット」飲ませたら。直に目が覚めた

「あれ？……此処は……？」

「起きたか？」

楯無の横に立っている創が居た

【ジャツジ】!?

「まあ待て、楯無。お前は戦いに負けたんだ。」

「……何？。私を馬鹿にしているの？」

「違うな。怪我している楯無を助けて治したただけだ。それに、もう動けるだろ？」

「え？」

楯無はその事で何を言っているのかが解らなかつた。動ける？あんなにボロボロになるまで戦つたのに：

「何言ってるかわからないわ」

「さつきまで手当したんだぞ。もう動けるだろ」

「え？」

一回体を起こしてみようとしてみたら、簡単に体がゆう事を聞いた

「手当しているって言ったはずだろ」

「うん。ありがとう。」

楯無は立ち上がった

「ありがとう。手当してくれて……」

「良いよそんな事。それと、5年前は俺の方が悪かった。ごめん」

そう言つて楯無に謝つた

「!?どうして!?私のせいで、貴方が手を染めさせてしまったのよ!」

「……もうとつくに染まつてるよ。」

「それはどう言う意味!」

「俺は、4歳の頃にある機業の5人か6人のISを着けていた奴を、殺している」

その一言で楯無は悲しんだ。そんなに小さい歳で人を殺しているなんて……

「でも、後悔はしていない。おかげで機業に俺のIS(LBX)がばれていないからな」

「でも！「でもじゃない！」!?」

「俺は、これで良いと思っている。だから、余計な口は閉じておけ。…そろそろ織斑先生の所に戻る。ISの戦い。強くて楽しかったよ。また学園で出来たら、相手になるよ」

そう言つて千冬の居る場所に向かった

「はあ、井上…創…ね。どうやって生きていたのかな…?」

（はあ、これで、5年前の過去を消せたのなら良いが…）

「戻りました」

「井上。さっきのISはなんだ!？」

「どうした？先生」

「どうしたもこうしたも無い！」

そう言つて資料を出した

「あのI Sは、はるかに束から貰つてる資料をみた。資料と今日のお前の試合を見ると明らかに性能が違いすぎる」

そう言つて資料を思いっきり机の上に投げた

「説明してもらどうぞ！あのI Sの事を！」

「……………まずはそこに隠れている人一人、出て来い、そして出てきたら今すぐに此処から出ていけ」

そう言つたら直に隠れている一人の女性が現れた

「山田先生!？」

「すみません。隠れていました」

「そう言つて千冬に頭を下げた」

「今すぐに此処から出て行つてください。イラつきます」

「おい!、先生に!」「良いんです!」山田先生?」

「2人で話をしてください」

「そう言つて山田はこの部屋から出て行つた」

「おい!何で山田先生を追い出した!」

「居たらイライラするんですよ。本当に」

「イライラだと？イライラしたくないから追い出したのか!？」

「ああ、その通りだが？」

「何で山田先生を怒っているんだ？」

「……そんなの答える気は無い。そろそろ、説明してもいいか？早く答えて帰りたいんだけどいいか？」

「おい！「帰ってもいいか？」（殺気レベルスーパーMAX）!？わ、分かった。帰っていないぞ」

「ありがとうございます」

そう言つて、俺は千冬に「俺が作ったIS（LBX）だと言つた」その時に千冬はありえないと思つてた。俺は色々IS（LBX）の事を説明し、学園から帰つて行つた

「調べてみるか。井上創はどうやって生活していたか」

千冬は創の事を調べていた

原作スタート！

男の娘がI S学園に行つて、妹に【LBX】を見せるのは良いか？

（くっ！、これはキツ過ぎる！）

「「「「ジ——」」」」

（何でこんなことになつてるんだ。東が……いや、もういい。東はつい口を出したんだあいつは悪くない。が此処にいても本当に最悪だ！俺の大っ嫌いな姉が此処にいる時点で、悪評価だ！（俺の心の中で）

「全員揃つてますね、それじゃあSHRを始めますよー」

（噂をすればなんとやら、会いたくない教師にまた会つたわー）

「私が副担任の山田真那です、それでは皆さん1年間よろしくお願いしますね」

(イライラするなあ…何で大っ嫌いな姉が此処の副担任だよ)

「……のうえくん。井上創くん！」

「はっ、はいっ」

創が心の中で姉の事を恨んで考えていると、姉に名前が呼ばれるのが聞こえた

「あ、あの大声を出してしまつてごめんなさい。怒っていますか？ごめんね？でも自己紹介が「あ」から始まつて「い」の井上くんなの」

(もうここまで来たのか…)「いえ、謝らなくても大丈夫です。自己紹介しますから」

「ほ、本当ですか？」

（正直テメエを恨んでいるが、自己紹介ぐらいは言わなきゃいけないだろ？）

「はじめまして。井上創と言います。趣味は機械をいじったり、自分が作りたい機会を作るのが趣味です。まだI Sの事はまだ調べていないですから。もし、知っている人だったら教えてください。（嘘です。東から教わりました。でもまだ見ていない機体を見たいです）それと、俺は男の子です。決して女の子ではありません。これから1年よろしくお願いします」

自己紹介が終わつても教室内は静まり返っていた

（なんか、スイッチ押したかな？）

「「「「……き」」」」

（……まさか……）

「「「キャ——！！」」」」

(五月蠅!!)

「男子！男よ！」

「織斑くんに引き続き2人目の男子！」

「しかもすごく可愛くて。機械好き！」

「凄く可愛い！」

「井上く〜ん！仲良くしようね！」

(凄く騒いでいる!?!何で!?!男の娘だから!?!ほんま酷いわー)

それからも2人目の男子の自己紹介はバカらしくて千冬に叩かれたらしい。

それから文字通りセシリア・オルコットが現れ俺の事を探し、「ありがとう」っと、セシリアは言ったでも創は「当たり前前の事をしたただだよ」っと答えた

それから創は、大っ嫌いな姉から鍵を貰った。番号は1025号室だった。

「此処が。1033室か」

(凄い長かった。道のりが……この先何か危険な道が待っている……一応、入ってみるか)

そう思いドアを開けたら

「……………」(カタコトカタコト)

パソコンで何かしていた

(えっ？何？パソコンで何かしているの？)

「あのー……」

創の言葉にキーボードを叩く手をや止め、少女がこちらを見る

「……………」

「えっと……井上創です」

「……………更識簪……」

（ん？更識？楯無の妹か!?!…何か、すごく引きこもりの子やなあ）

「よ、よろしくね……」

創がそう言ったら、簪はパソコンに眼をむき、またキーボードを叩き始めた

「えつと……何が好きなの？」

「……………アニメ、ロボット……………」

（やっぱり変だ……ちよつと待つて、ロボット？ だったらこれがあるけど…興味持つか
な？）

）

そう考え、簪に言つてから、散らかさうと思つた（つまりLBXを出す！）

「なあ、更識さん」

「……………何？」

「1回散らかしても良いでしょうか？」

「……………何を？」

「……ロボットを」

創の言った発言で簪は『ビク!?』つと反応がした

「ロボット!」

そう言っつて創の前にいきなり来た

「う…うん。ロボット。小さいけど…楽しめるなら出そうかなって」

「どんなの!」

(メツチャ興奮してんな)

「色々あるけど。注意点があるよ」

そう言ったら、簪は「なにになに？」と、聞いてきた

「見せるロボットは。決して誰にも言わない事。じゃないと大変困る事なんだ」

「え？」

「本当にお願ひね。決して誰にも言っではいけないよ？」

「うん、分かった」

（なんか、簪は此処まで子供だったとは……楯無が気に入るのは当たり前か……可愛いな、子供みたいな姿が）

それから、簪に【LBX】の事を話し、楽しく【LBX】を見ていた。

（ん？外に誰かいるのか？まあいい、聞かせてやろう）

（【LBX】？。聞いたことが無いロボット……まさかISと何か関係してる？）

ドアの外にいた楯無は、俺の【LBX】の事とISの事がばれてしまった。

男の娘が【LBX】を見せて楽しんでいる。生徒は居ても良いのか？

それから簪に【LBX】を教え続けたら簪は「カッコいいいい」と喜んでゐる。…可愛いなあこの野郎！。まあそれから、合体出来るロボットを1つ全て見せた（合体させて）（パーフェクトZX3）見せたら

「かかか、カッコいいいい!!!」

超興奮していた。

「更識さん？（少しあせるなあ）」

「ねえねえ！もう1回見せて！」

「あく実は合体したら30分間戻らないんだ」

その時簪は『シユン』つと落ち込んだ

「でも大丈夫。合体ロボットはもう1体あるよ」

その発言で『ビク!』つと反応した

「見せてくれる!」

犬みたいに頼んできた

「でも、さっきの合体とは結構違うよ。別の機体になるから」

「大丈夫です!是非合体ロボットを見せてください!」

「じゃあ見せよっかな」

そう言っつて

「1〜全ての（合体シーン）Σオービスを見せた」

「カッコいいいいいい!!!別の合体ロボット来たー!」

（す…凄い興奮）

「ありがとう更識さん。此処まで楽しくロボットを見てもらって」

「良いの。それと、私の事は簪って呼んで…」

「分かった。簪、どうだった？たくさんの【LBX】を見せて貰ってありがとう」

「良いよ。どうだった？【LBX】はどうだった？楽しかった？」

「うん！。凄く楽しかった！」

「それは、どうも。あつ！、そろそろ食堂に行きたいから、言つて来るね？。後その【L B X】は使つて遊んでいてもいいから」

　　そう言つて俺は廊下に出た

「そこに隠れている人出てきて良いですよ」

　　そう言つたら後ろから、楯無が現れた

「どうして分かつたの？」

「更識の姉のお前が扉の前に居ない訳が無い」

「そう。じゃあ、【L B X】は何？」

「誰にも言わなかったらな。もし言ったら俺の最強の機体が、この学園を破壊する」

「そんな事して！ただで済むと思ってるの！」

「お前が話さなかったらの話だ。どうする？俺の機体の一体に、お前に負けているんだぞ？」

「……分かったわ。話さない。けど、お姉さんに教えてね？」

「決して誰にも言うな。良いな？じゃあ教えてやろう」

「あれは確かに俺が作ったロボットでもあり、俺のIS（LBX）でもある」

「それはどう言う意味？」

「次言う話は誰にも聞かれない場所で話そう。もし、誰かが聞いたら、俺の正体が知られてしまう。それよりも食堂で夕食を食べたいんだけど」

「分かったわ。そこで話しましょう」

それで2人は食堂に向かって。食べ終えたら誰にも見つからず、聞かれない、生徒会室で話した（創の正体も）

その時に楯無は驚いた。創の正体は転生者で、【LBX】は手のひらサイズの小型ロボットの機体だから

「まさかそんな事がねえ…」

「案外信じるんだ」

「ええ、創は此処の生徒よ」

「それで信じているのが驚きだわ…じゃあ、俺の正体がばれたから。面白い物をあげるか」

「お姉さんにプレゼント!? 嬉しい!」

「渡す物は斧と【LBX】の【必殺フランクシヨン】を教えるんだよ」

「どんなの？」

「楯無は槍と両手銃と水を使うから、それに適した【必殺フランクシヨン】を教える。斧も水と同じ【必殺フランクシヨン】が出せる」

そう言って【Dエッグ】を出した

「これ、覚えているな？」

「ええ、【バトルフィールド】の【Dエッグ】」

「そうだこれを使って【バトルフィールド】に向かってそこで【必殺フランクシヨン】を

覚えてもらう。内容は、槍の【ホエールキャノン】と両手銃の【アクエリアスレーザー】斧の【オーシャンブラスト】と銃の【サーペントドライブ】を覚えてもらう」

そう言つて【Dエッグ】にスイッチを押して投げて落ちた。

その時に【Dエッグ】は緑の光が創と楯無が飲み込まれた

それから色々教えて、楯無は凄く嬉しそうだった。こんなに楽しい【必殺ファンクシヨン】を覚えてもらったから

「もうこれで教えることはもう無い」

「ありがとう！」

「それと、楯無の馬鹿の気持ちがあつたわ」

「馬鹿ってなんの事!?!」

「簪の事」

「興味はある。俺の機体をよく見て、楽しんでいる子共を見た位だ。恋愛も入っている。」

「簪ちゃんは渡さないわよ!!」

「貰うか貰わないかは…なんだ…気に入っている」

「絶対に簪ちゃんを守るわ!!」

「それより、もういいか？そろそろ帰りたいんだけど」

「でもその前に、どうして山田先生を怒ってるの？」

その一言で創はイライラしてきた

「……アンタには関係ないだろ」

「いえ、関係あるわ。山田先生前まで怯えていた顔をしていたから」

（イライラするなあ、誰かに山田の事を話したらどんなことになるのかは、わかっているが、話してやろう）「……分かった。話そう。だがどんな関係かは当ててもらおう」

「はい。よろしい♪」

（今イラつと来た！イライラするなあ！）

「じゃあ聞くけど。お前は家族を1人忘れたことはあるか？」

「……無いわ。私には家族を忘れたことは無い」

「ISって本当にイラつかない？」

「それってどう言う意味？」

「そのままだよ。ISは宇宙に行くための機械だよな？それを兵器にしている事でイライラしているんだよ」

「だから何よ？」

「ISが兵器になったせいで！、俺は、捨てられた」

「……………え？」

（今…何て言ったの？…………）

「俺は3歳の頃、楽しく暮らしていたのに、ISが出来たせいで俺は3歳で、両親は俺を捨てたんだぞ！。3歳に！」

「それ…本当？…………」

(私は言っではいけない事を言ってしまった)

「ああ！本当だ！。俺が捨てられて！7年間一人で生活していたんだぞ！俺一人で！」

その発言で私は泣き崩れてた

(子供を捨てた？……この子が……一人で7年間？)

「捨てた原因は知ってるか？」

そう言ってきたが私には分からなかった

「名声だよ！。ISは女子しか乗れないから！。邪魔なゴミの俺は捨てられたんだよ！名声のために！」

(そんな事のために。子供を捨てた？……3歳の子供を？)

「此処まで話したら、大体何で恨んでいるかは分かるだろ？」

そう言つて生徒会室を出た

（スッキリした〜！。あのイラつく女が俺の事…まっどうでもいいけど）

「井上」

（ん？この声は…千冬）

「織斑先生。どうかしましたか？」

「井上。さっき言ったことは本当か？」

「……何の話でしょうか？」

「とぼけるな！更識に言った事、解ってるぞ！」

「……何が目的だ？」

「こちらのセリフだ。それより。さっき言ったことは本当か？」

（聞かれていたのか…）

「本当だと言ったら？」

「……すまない」

「……何誤ってるの？。昔、楽しく弟と暮らしていた織斑先生がどうして謝るんですか？。……もしかして雇われたの？山田先生に？」

「!?違う!!」

「だったら謝らないでください。それと関わらないでください。織斑先生には関係のない話ですから」

そう言つて、創は自分の部屋に帰つた

男の娘が怒って先生は仕方なく相手になるのは良いのか？

俺は簪に「LBX」を色々教えたら簪はかなり興味を持つてくれたようだ

それから楽しい1日が過ぎていき。いつの間にか2日になっていた。いつも平和だ。何1つ起こらない。それが1番良い日だ…

今頃……

「この程度か？」

「くっ！」

前

「クラス対抗戦に出場する代表を決める。これはそのままクラスの代表にもなるからそのつもりでいるように。それでは、自薦、他薦は問わない！誰かいないのか！ちなみに選ばれた者に拒否権は無い」

「はい！織斑君を推薦します！」

「お、俺〜！」

「私は井上さんがいいです！」

「俺もか…（でも…さん…）」

「私もそれがいいと思います！」

「私は織斑君で！」

結果は創と一夏だ推薦してきたか……でも、いいのかな？

「ちよ、ちよつと待つてくれよ！千冬姉！『バキッ！』織斑先生……」

「自薦、他薦は問わないと言った！拒否権は無い。それから一つ言い忘れたが……井上は代表には出来んからな」

「待つてくれよ！納得がいかねえ！」

「ほお、私の決定に納得がいかないのか？」

「ああ、いかないね！個人的な理由なら構わない！けど、それで全ての事が許されるなんて納得がいかねえ！」

（他の連中も同じみたいだな）

「……………仕方ない。言うしか無いか……」

「どうかしましたか？。織斑先生？」

「井上、まさか……【Dエッグ】を使うのか？」

「【Dエッグ】？」

千冬が言った言葉に他の生徒が「なにになに？」とざわめき始めた

「静かに！」

千冬が言った発言に生徒全員黙った。そして俺は【Dエッグ】を取り出した

「織斑先生。確かに【Dエッグ】を使いますが、何か？」

「!?。待て井上！織斑には、まだISが持っていない！」

「……ちつ、命拾いしたか」

そう言つて【Dエッグ】をしまった

「千冬姉！何だ！【Dエッグ】つて！」

一夏がそう言つてきた

「…井上。言つてもいいか？」

「どうぞ、ご自由に〜」

「【Dエッグ】は井上が作った卵のダンボールの事だ」

「あつはははそんなダンボールで卵？笑える!!」

「」「あはははは!!」「」

皆大爆笑していた。でも1人だけは何か考えていた

(ダンボールで卵は笑えますけど。11年前の突然現れたI Sは大きい岩を軽く破壊したなら…その道具は危険すぎる!!)

「…………おい」

その一言で空気は重くなった

「お前ら、俺の作った最高の道具を笑っただど？。生徒会長の時以上に酷い目に合いた
いようだな？」

また【Dエッグ】を出した

「よせ！まだ生徒全員I Sを持っていない！」

「だったらこの怒りは誰が抑えるんだ？」

「……分かった。なら私が相手になろう」

「織斑先生!？」

(あつ、居たんだ。…俺の嫌いな姉)

「生徒の怒りを抑えるのが先生の役目だ」

「ですが！」

「仕方がない。井上の暴走は、此処にいる生徒は全員病院送りだろうから、私が相手になるしかない」

「でしたら私もやりま「駄目だ！」どうしてですか!？」

「井上は、山田先生の事は色々ありますから、私一人で大丈夫です」

「話は終わりましたか？」

「ああ、終わったさ、さあ！始めてくれ！」

「分かった。【Dエッグ】展開！」

そう言って【Dエッグ】の上のボタンを押した

「【バトルフィールド】！【セットアップ】！」

そう言って創と千冬の前に放り投げた。落ちた【Dエッグ】の緑の光が皆を包み込んだ

男の娘が千冬と戦う前になっても良いのか？

「私が戦う場所は…やはり、この【ステージ】か」

創と千冬が居た場所は闘技場だった

「此処なら逃げも隠れも出来ない【ステージ】【闘技場】だ」

「生徒達はどうした？」

「安心しろ。観客席に居る」

そう言って観客席に指を向けたら生徒と嫌いな姉が居た

「何じゃこりゃあ!？」

「凄ーい！」

「東京ドーム何個立てられるのかな？」

皆驚いているようだ。このダンボールの技術は、さすがに凄すぎるか

「生徒達は大丈夫なのか？」

「なら、確かめてみるか？」

そう言つて銃を出してそれを、生徒達に向けた

「!?!。おい!、何してる!?!」

「安全かどうか、確かめるんだよ」

そう言つて生徒達に向けて、3発だけ打った。弾は生徒達に向かつていった。観客席に当たると思いきや

『ジュン！』

その弾はいつの間にか消えた

「安心しろ。織斑先生。観客席に特殊なバリアをかけている。このバリアは剣や銃や爆弾でも壊れない。不安を無くすために作ったバリアだ。少し驚いた？」

「当たり前だろ！。生徒達に当たったらどうするんだ！」

「その時は、これを飲ませたらいい話だ」

そう言つて、ジュースを出した（「フルリペアキット」だよ）

「それは？」

「これは、「フルリペアキット」。ISの装甲とシールド・エネルギーも回復することができる【回復アイテム】だ」

（そのジュースが、ISとシールド・エネルギーも回復する!?!。効果が凄すぎる!。ん?でも待てよ…）」

「それはISの話だよな?。それと生徒達に飲ませるのだ?」

「ただ」

そう言つて創は目を閉じて下を向いた

「ただ?」

「何故か、これは人間にも回復することが出来るジュースにもなったんだ。あはははは

ははは!!」

そう言つて千冬にその事を話して笑つた話した

「ああ、そうか……ええええー!!??」

千冬は驚いた。これも人間に使えるの!?

「「「ええええええええええー……っ!!!」」」

「と言う訳だ。安心しろ」

「いや、安心しろと言つても安心できないぞ!」

「ふーん。でもいいじゃんか、別に人までも回復するなら。それと食中毒にもならないから」

「それはどう言う事だ？」

「試験で生徒会長に戦って、無茶苦茶に勝ったから、ダメージが大きくて…飲ませた」

「大丈夫なのか!？」

「まあ、大丈夫だろ。痛いと言っても、下痢ぐらいだし」

生徒会長は

(痛い痛い痛い!!!)

トイレに居た

「……不安になってきた。」

「まあ、大丈夫だろ。……多分」

「本当に大丈夫なのか!？」

「あっ!？」

「今度は何だ!？」

「もうすぐで、授業が終わる!。後5分だ!。それにこの事を誰にも話していないから誘拐になった!。まずい!。早く戦って終わらせませよ!!」

「あ、ああ」

千冬はそう言っつてISを付けた

「さあ!どんなISを付けて来るんだ?」

「使うIS(LBX)はもちろん。今回最強ランキングの、ナンバー1(旧)のIS【L

【B X】を使う！」

「な、なに!？」

俺の発言でクラス皆は驚いた

「ええ!?!あのI Sよりも強いI S!？」

もちろん嫌いな姉も驚いていた

「山ちゃん。どうしたの?」

女子生徒と一夏は嫌いな姉に向いた

「実は井上君の模擬戦を行ったんです」

「へく井上君の模擬戦の相手は誰だったの?」

「生徒会長さんに織斑先生は頼みました。クラスの学園最強の相手に」

その発言で皆は驚いた

「……結果は？」

「井上君の圧勝です。生徒会長さんは手も足も出せずに、井上君に負けたんです」

「「「ええええええええええええ——!!!」」」」

皆はさらに驚いた

男の娘が千冬に妖刀を出すのは良いのか？

「さあ！ 出撃だ！ 俺の最強の I S (L B X) !!」

そう言ってスマホを操作して I S (L B X) を選んだ

【 L B X セレクト 】

作者「此処から答えが出るよ。ちゃんと考えてくれたかな？別に不正解でもいいよ」

【LBX ジライヤ】

この【LBX】でよろしいですか？

創は、その選択に「はい」を押しした

その時いきなり竜巻がやってきた

「なっ!?!何だ!?!」

千冬もその竜巻は耐えるのが難しく、刀を地面に刺して、台風を耐えた

他の生徒も椅子などにつかまっている

竜巻が俺を吸い込んだ

「井上!?!」

千冬は心配して創に言った

そして竜巻が弱くなってきた。創が乗ったから

だんだん竜巻が弱くなって竜巻が消えたら黒い【LBX】両腕に白の刃に赤色が入った籠手に少し長いマント。さらに頭にはゴーグルみたいが付いている【ジライヤ】が現

れた

「井上。それが、お前の最強のISか？」

『ああ、こいつは【ジライヤ】、頂点（旧）に立つIS（LBX）だ』

「ジライヤ」。忍者の名か」

『ああ、この機体はそう呼んでいる』

「それが…頂点に立つ機体」

『そんなに驚く事か？』

「ああ、更識との戦いでも、まだ手加減をしていたからな」

『ほおー、手加減していたのは知っていたのか？』

「あんな実力でも、何か足りないと思っていたんだ」

『なかなか見る目あるねえ。でもあの時手加減していたのを誰かにばれたら、なんかいらつくなあ』

「だったらどうする？」

『そうだな、今すぐにでもこの機体で、叩きのめしたいよ』

「出来るか？」

『さあな、うまくいくかはわからない機体だ。そろそろ話は終わりだ。覚悟は良いか？』

そうやって殺気を出した（MAX）

（凄い殺気だ!?!。7年間一人で生きてきた負の感情が、此処まで殺気が出るのか!?!）

そう考えて辛かった。とつ言う苦しみが千冬の心に響く

「ああ」

その一言を言っつて刀を出した

「来い！」

さらには構えた

『刀か……ならこつちも刀を使おう』

「なに!?!」

千冬は驚いた。その機体は刀を使うから

【ジライヤ】は黒い刀を出した

千冬はその刀を見ていきなり顔が悪くなった

「……その…刀は」

『教えてやろう。妖刀ヤタガラス。ジライヤの為に開発した。最悪の妖刀だ』

「妖刀…ヤタガラス…」

千冬はその刀を見て冷や汗を掻いた

『どうやらこの刀が怖いらしいな』

「ああ、此処まで怖い刀を見たのは初めてだ」

『この刀の効果を教えてやろう。斬られたら、シールド・エネルギーの半分無くすことが

出来る」

「なんだと!？」

『さらに、失った分のシールド・エネルギーは全部こっちに持っていく。』

「なんだ!?!。その危険な刀は!?!。本当に妖刀だな!?!」

『話はもう終わりだ。構えろ』

「分かった」

そう言って、刀を構えた

『ならば行くぞ!!』

そう言って千冬に突撃した

161 男の娘が千冬に妖刀を出すのは良いのか？

「来い!!」

男の娘がまさかになっても良いのか？

「来い！」

『はぁー！』

【ジライヤ】の一撃が千冬はその攻撃をかわして、その一撃が地面に当たって大地が半径50メートルぐらい地面にひびが入った。

千冬はそれを驚いた

「何だ、この破壊力!?。これがランキング1位のISの実力なのか!？」

(こんなのを受けたらひとたまりとも無い!?)

『ビビるのが早いですよ。まだ10%も力も入っていないのに』

「あれでもか!？」

『ええ、じゃなかったら、かわせていなかったでしょう?』

(あれでも10%。……ん? 待てよ?)

「井上」

『何ですか?。織斑先生』

「まさか、お前の本気は…」

『気づいたのですか?』

(だったら早く倒さないと負ける!)

「「「ええええええええええー！！！！」」」」

「あれでも10%ですか!?!。何それー!?!」

「ですが…1つ違和感があります」

そう言った人は箒だった

「それはどう言う意味ですか?」

「あの攻撃は確かに凄いです。あれなら織斑先生を倒せます。ですが、織斑先生はかわした」

「そ、それがどうかしました?」

「多分。彼の本気は…スピード」

「す、スピード？」

「目に見えないスピードで相手を一掃する。それが井上の戦い方！」

『正解だよ』

「井上君!？」

「このIS（LBX）はスピード。そのスピードは誰にも追えず、誰にも見えないスピード。それが最強のIS（LBX）『ジライヤ』の戦い方だ』

「よそ見するな！」

千冬は創に斬りかかったが

「はあー！」

「シュン！」

「き、消えた!!？」

『何処を見ている？』

何が起こったのか分からなかった。「ジライヤ」を切ろうと思ったのに、いきなり後ろから「ジライヤ」が現れたからだ

「っ!?!何!?!」

「遅い」

そう言って【妖刀ヤタガラス】で千冬に斬って吹っ飛ばした

「ぐあ!!？」

【ジライヤ】の一撃は見事に千冬にダメージを受けて、シールド・エネルギーも奪って【闘技場】の壁にぶつかって、地面に落ちた

「がはっ??
!!??」

千冬はかなり痛かったようだ（ちなみに、壁は壊れないようにした）

【ジライヤ】は『スタ』っと綺麗に着地した

『どうした？、もうリタイヤか？』

「!?」

「もう戦う意思が無いなら、リタイヤした方がいいのでは？」

「わ、私は……負け……ない……!」

何とか千冬は何とか、立ち上がった。だが体はボロボロだ

「行くぞ！」

そうやって千冬は俺に突撃してきた

(……馬鹿だな)

そう考え刀を構えた

『必殺ファンクション！』

【アタックファンクション カウンタースラッシュ】

その電子音が鳴ったら、左の手のひらを前に出して【妖刀ヤタガラス】を左の手のひらに10センチ位、前に出し、力をためた

(もう少しだ…来い。織斑千冬)

もう目の前だ

(今だ！)

が エネルギーの回転切りを解き放った。これを当たれば、千冬はただではすまない…だ

「その攻撃を待っていた！」

千冬は「カウンタースラッシュをかわした」

「なに!?!」

俺は千冬の攻撃を防御した。だがこの機体は「ニクぬき」つまり…吹っ飛んだ

「うわ!？」

【ジライヤ】はいとも簡単に吹っ飛んで、壁にぶつかって、煙が出た

この時を見た生徒達と先生ははビックリした。【ジライヤ】に一撃を与えたから

「はあ、はあ、井上、お前弱点は分かった。」

「お前の弱点は、そのISは防御が全く出来ないISだろ？。だから簡単に吹っ飛んだんだ」

『フ、フフフ、アツハハハハハハ!!!』

その笑い声が聞こえた

(やはり、最強のISだったらそんなに倒れてはくれないか…)

『やっぱり。織斑先生は凄いや。この機体の弱点を直に見つかる。これがブリュンヒルデの実力か』

そう言つて壁に埋もれていた【ジライヤ】が壁から自力で出てきた

「確かに。この機体は防御が無い、……だが」

霧が晴れて目の前にいた【ジライヤ】は何も無かつた姿が居た

霧が晴れた時また皆が驚いた。世界最強の一撃が【ジライヤ】には通用しなかつたから

だが此処で終わってしまう

【プロポロプーンー】

『やはり、凄いな。世界最強の機体に勝ったのは…さすがに驚いたわ』

「何言ってる!?!。お前の方が圧倒的に強かったはずだ!?!」

『タイムアップだ。そろそろ戻るぞ』

そう言って【Dエッグ】と【ジライヤ】をしまった

男の娘が理由を言って、次の授業に行くのは良いのか？

【Dエッグ】をしまった後。皆は元の場所にいた

生徒は「凄かったー」とか「また見たいなく」つと言っていたが千冬だけ違った

「何故だ井上!?!、お前が圧倒的に勝っていたはずだ!?!」

そう言つて分からない千冬。生徒もそれが分からないらしい

「タイムアップ。時間切れで負けた」

「だが「だがじゃない!?!」!?!」

「俺は面倒な事にはなりたくない。それと相手の名声まで失うと思ったから」

(!!?) 井上、まさか……)

「それと、よかったな一夏、自分の姉が勝ってくれたから嬉しいだろ？」

「え、…う、うん」

「よかったよかった。誰もが最強じゃ無い。それは確かにですネ…ああそうだった、山田先生、もう授業が終わりましたから、次の授業の準備をしませんか？次はISに関わる授業ですから、その授業はグラウンドですか？それとも教室で、ですか？」

そう言つて嫌いな姉に言つた

「え？……!!?、グラウンドです！」

「そうですか。じゃあ、用意してグラウンドに先に行きますね」

創は授業を用意してグラウンドに向かった

(前の両親に…名声が入ってしまうから、わざと負けたんだな。)

(やった〜！千冬姉が勝った！。何が世界最強の機体だよ。千冬姉の前では、ただス
ピードが早かっただけじゃんか)

つと一夏はまだ知らなかった。あれでも創の手加減とも知れずに

それから創は色々あつて授業が終わって自分の部屋にいた(簪も居るが)

「ふうー、疲れた」

「どうかしたのですか？」

「ああ、ちよつと厄介事があつてな、まあ、自分がやったことなんだが」

「ええ!?!…変な事にならないでね」

「どうかな？ 凄い目で見られる事になるかもな。…そろそろ寝るな」

「え!?!、食堂は!?!」

「行かない事にする。結構疲れたし、ベットに入って寝る」

そう言ってベットの中に入ろうとしたが

「待って!?!せめて何か食べたら!?!」

簪は言ってきた

「大丈夫。食欲ないから」

そう言ってベットの中に入った

簪は『ねえねえ』と言いながらゆさゆさしてきたが

「zzzz」

「寝るのが早い!？」

簪は仕方なく。創を置いて食堂に向かった

「ふわぁー、うまくいったか」

創は実は寝たふりして、1人になりたかったから

「ふう。やっぱり、1人の方が安心するな」

そう言ってベットに座った

「一人……か……」

創は色々悩んでいた。家族から離れて、俺にとっての家（工場）が帰れないから

「母、シャル、…俺は、……居なかった方が良かったのかな？」

そう言つて手で頭を押さえた

「俺は、普通に家（工場）で静かに生活していたら、原作と同じに、楽しい未来が、あつたのかも知れないな……」

その一言を言つてもうベットに寝た

（何で……貴方は普通の人間でしょ!?!。悪いのは創の両親じゃないの!?!。何で!?!、創は何もしていないのに、なんで?……）

井上の部屋の外には楯無が居た。全部聞こえていたらしい。

聞いていた楯無はいつの間にか泣いていた

男の娘が穏やかに、学園生活を送っているのは良いか？

今日の朝が来た。希望の朝だ。7時に窓から出ている創が居た

(太陽を浴びるのは良いねえ〜気分が上がる！)

「さて、食堂に行くか！」

そう言つて、部屋に戻つて支度して、廊下を歩いて食堂に向かった

(朝と言えば、ご飯とサバの味噌煮と味噌汁と野菜！(野菜炒め))

そう考えながら朝食を食べた

(ふう。幸せだー、この食堂、美味しいにも程があり過ぎる!!)

そう考え創は朝食を食べて

「ご馳走様」

そう言つて皿を片づけて、食堂を出て廊下に行つた

(ふう。はあーお腹いっぱいだ。)

そう考え教室に向かつた

「創君！転校生の話つて聞いた？」

(転校生……風 鈴音(ファン・リンイン)か？、俺に変な厄介事にならなかつたら良いが……)

「転校生？こんな時期に？」

「何でも専用機持ちらしいのですわ」

「何処の国の代表候補生？」

「何でも中国らしいですわ」

（やっぱり、鈴か…俺に厄介事をかけないでよ）

「中国か…」

色々あつて鈴登場、からの一夏に再会、からの千冬に叩かれ、からの帰って行って千冬が授業を始めた

で今

俺は一人で外で昼食を食べていた

(やっぱ、1人が落ち着く…)

(誰も居ない……時間は良いな)

「何が、いいな、よ」

後ろから楯無の声が聞こえた。イラつくのに何で来るんだよ

「……何のようだ、楯無」

「何のようだって、一緒に食事をしに来ただけ。ただけけど」

「だったら無理だ。俺はもう昼食を終えている。それと、何で俺の前にいる？俺の過去を聞いた楯無が、二度と俺の前に現れるなよ。邪魔」

「酷いわねえ、「じゃあな」ちよっと!？」

創は無視し、俺は授業に向かった

(謝りに来たのに……、本当に私が悪いのね)

楯無は創に、嫌いな姉の事を聞こうとして、聞いたら、かなり怒っていた

(本当に、ごめんなさい)

楯無は、本当に、後悔をしていた

(やっと授業が終わった)

創は今はベットに寝転がっている

『ドッカーン!!』

「……止めとこ、此処で寝よ」

そう考え俺は面倒事（一夏と鈴の喧嘩）には行かなかった

翌朝

「何でさらに面倒なことになってんの？」

鈴と一夏が喧嘩していた

（ま、俺には関係ない話だ。ほおっておこう）

そう考え席に座った

それから千冬の授業で授業で色々聞いた。後、色々箒が一夏を強化していたが、一夏はかなり疲れて、さらには箒の頑張りも全部、無駄になったらしい

また翌日……じゃなくて5月

作者「……何で!？」

創「作者さん」

作者「どうした？」

創「大会は5月から始まるから、そこまでスキップするんです」

作者「うっそ。マジか——!？」

創「ちなみにもう終わりです」

作者「えっ!?!、終わりなの!?!」

創「そうですよ。それではまたねー。まだ会いますけど」

男の娘がザコ2体を気絶させるのは良いのか？

5月

作者「やつと、打てた〜」

あの騒ぎと一夏の練習が続き、1か月たった。一夏と鈴の距離は深まるどころか、さらに喧嘩している。本当なんで気付かないんだよ、ザコ（一夏）

で今は

ザコ同士の戦いを見ていた（ザコとは一夏と鈴）

（ザコにしては、なかなかやるな）

それからザコ（一夏と鈴）の戦いは続き、鈴が止めを刺そうとしたその時

アリーナに衝撃が走る、そしてそのせいもあり周りに1体は煙が発生し一夏はあることに気付く

「おい鈴！あれを見ろ！」

「え!?!」

そう霧がやがて晴れ、そこに姿を現したのは、1体のISだった

（どうやら、ザコの戦いは此処でおしまいか、丁度つまらない戦いで、暇だったからな、よし、相手になってやろう）

そう考え、観客席から飛んだ。この時女性達は焦っていた

（でも俺には関係ない）

そう考えI S (L B X) を起動させた

【L B X】セレクト、【L B X ジ・エンペラー】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【L B X ジ・エンペラー】でよろしいですか？

創は、その選択に「はい」を押しした

その時。空から【ジ・エンペラー】の武器【テイターニア】と言う【ハンマー】が空から創に向かって落ちて来た

創はその【ハンマー】を右手に持った

その時、マントにもようが付いていて、裏には黄色い色のマントを付いていて、身体
の真ん中に、Mと言う文字を刻まれた皇帝。「ジ・エンペラー」の姿になった

この瞬間。皆は「何あれ!？」やら「あれが、あの男のISなの!？」

「あつ!?!、あの姿は!?!」

この言葉を言った人は創の部屋に住んで居る簪だった

(もしかして)

過去

(決して誰にも言わない事。じゃないと大変困る事なんだ)

現在

(あの言葉はこう言う意味だったの!?)

簪は今いる小さなロボット(LBX)は、なんとISだったのだ

「創!、何でやって来たんだ!？」

『ザコどもの戦いを見ている、つまらないからだ。暇つぶしにこいつを壊す』

「何だと!」

「何ですって!？」

一夏と鈴はかなり怒っていた。ザコ呼ばわりされたから

『ザコと言って何が悪い、ザコのお前らはザコ呼ばわりが似合っている。それより、さつ
さこと行け』

「嫌だね。ザコ呼ばわりされていたら、俺が倒してやる！」

「嫌よ！、私がザコ呼ばわりじゃないとこを見せてやるわ！」

ザコ（一夏と鈴は）はそう言つて、あいつと戦う準備をした

『だったら、まずはお前をぶっ壊す』

創はそう言つてザコたちに向けて攻撃した

（まずはザコだ）（一夏）

一夏に【ティーターニア】でお腹に「バーン！」とぶつけた

「ぐはっ!?!」

ザコー（二夏）はこのダメージをくらって、ザコロボ機能は壊れ、生身のザコー（二夏）になって、ザコーは倒れた

「二夏!?! 貴方!」

ザコ2が五月蠅いからまた、腹に「ハンマー」で「バーン!」とザコ2に当てた

「がはっ!?!」

鈴はこの一撃に耐えられず、ザコ2（鈴）はザコロボが消え、生身の姿に戻り、ザコ2（鈴）は倒れた

『手加減なのに、気絶するとは、本当にザコロボだ』

そう言って無人機の方に向けた

『さあ!、俺が相手になってやろう!』

そうやって「ティターニア」を無人機に向けた

男の娘が皇帝の力で無人機を灰にするのは良いのか？

(でもやっぱり、此処で本気でやったら、アリーナはぶっ壊れるしな、…仕方ない。)

そう考え「Dエッグ」を出した

『「Dエッグ」展開。バトルフィールド、セットアップ』

そうやって無人機と創の前に放り投げた。落ちた「Dエッグ」は緑の光が創と無人機を包み込んだ。場所は「城塞ステージ」だ

『此処なら、本気で戦えるぜ』

「ジ・エンペラー」はそう言ったら

「!!」

無人機は一気に突っ込んできた

『やる気のようなだな。腕前を見せてもらおう』

【ジ・エンペラー】は無人機の拳を【ティターニア】で止めてキックで無人機を吹っ飛ばした

だが、無人機はそれを華麗にバクテンをして体制を整えた

『ほおー、ライバルぐらいの強さか。面白い』

【ジ・エンペラー】はそう考え【ティターニア】を構えた

『来い!』

そう言ったら無人機は、距離を取って、レーザーを打ってきた

『接近戦じゃあ、太刀打ちできない、って事か。…だが！』

【ジ・エンペラー】は一瞬、姿が消えた。

【!?】

無人機はそのことに驚き。周りを見た。でも【ジ・エンペラー】は何処にも居なかった。

『俺は此処だ』

【!?】

【ジ・エンペラー】はなんと、無人機の後ろに【ジ・エンペラー】が居た。無人機は直さ

に攻撃しようとしたが

『遅い!!』

【テイターニア】で無人機を吹っ飛ばした

「!？」

『そろそろ、終わらせてもらおう』

【ジ・エンペラー】はまた、見えないスピードで無人機が墜落する場所まで向かって、無人機を空に吹っ飛ばした

これを10回連続で繰り返した

最後に地面にバタリと倒れて、無人機はボロボロだったけど、まだ起き上がろうと頑張っていた

『まだ動けるのか？。だったらこれで最後だ！』

【ジ・エンペラー】は【ティターニア】を左手も掴んだ。これでいつもの構えになった

その時に地震が起こった

観客席では

「なにこれ!？」

「地震!？」

観客席では言っていた

管制室では

「な!? なんなんですか!？」

「…まさか!？」

そして【城塞ステージ】

『必殺ファンクション!』

【アタックファンクション インパクトカイザー】

その電子音が鳴ったら、直さに【ティターニア】を上を構えた

『地獄の業火で灰となれ!』

その【ティターニア】を地面に振り下ろすと、地面が割れて業火の炎が無人機を飲み込んで黒い煙が出た

煙が無くなると目の前に居た無人機は

消えた

『消し飛んだか？』

圧倒的なこの姿に観客席で見っていた女性たちや管制室も見っていた機業達？も、この姿に、皆驚いた。

（なんて破壊力だ!?!。転生特典は此処まで厄介な力があるのか!?!）

千冬はそう考えていた

『楽しい戦いだっただ。またやろうぜ』

そう言つて【Dエッグ】と【ジ・エンペラー】をしまった

男の娘が姉？それとも妹に再開するのは良いのか？

あれから……まあまだわからないが、とにかくあの話つてのは確かだ

創が「LBX」の技術をISで見せてしまった

企業たちは創の「LBX」の技術を早速作ろうとしたが、圧倒的な力、防衛、スピードは、どうしても、完成できなかつた。まあ、それから、創の事を調べていたらしい、でも、創は何処で生まれて、何処に住んで居るのかも分からない、謎の少年だった。

それとおまけに【学園最強の皇帝】と呼ばれるようになった

今頃

嫌いな姉が入ってきてクラスの女性達は一斉に座った

「え、えっと今日は何と転校生を紹介します!。しかも2名です!」

他の女子達は一気にざわめく

「静かにせんかバカ者共!」

(……ラウラは来るとして、シャルロットは来ないよな?)

そう考えていたが

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れな事も多いかと思いますが、皆さんよろしくお願いします」

(………何で居るの!?)

「きや…」

(まさか!?)

「「「きやあああああああああ
!!!!!!
「「「

「うわっ!」

(うるさ!!)

「男子!。3人目の男子!」

「しかもうちのクラス!」

「美形!、守ってあげたくなる系の!」

「み、皆さんお静かに!、まだ自己紹介は終わってませんから!」

千冬と嫌いな姉の言葉に生徒たちはラウラに視線を向けたが、ラウラは微動だにせず
に黙ったままだった

「…挨拶をしろ、ラウラ」

「はっ、教官」

「…此処ではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、此処ではお前も一般生徒だ。私の
事は織斑先生と呼べ」

「了解しました」

（軍の感覚の状態か…それにしても、クロエそつくりだな。クロエの目が気になってき
た）

創はラウラの姿を見て、クロエの姿を思い出した

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

「「「……」」」

「…あ、あの、以上…ですか？」

「以上だ」

（まつ、ラウラ覚え……はっ!? あいつの機体が使いたくなってきた!）

作者「皆問題!! 創はラウラを見てどんな機体を使いたくなったのかを考えよう! ちなみにヒントは、軍隊と似ている【LBX】だよ」

「! 貴様が! ……」

「え?」

(……メンド臭。ほつとこ)

ラウラは一夏にビンタをした

それから俺は仕方なく2人を連れて何とかうまくいった(女性から逃げるのを)

(ホント、何でデュノアが此処にいるんだよ。しかも男にか、留守番はどうした?)

デュノアは女子だからな、仕方なく、後ろで服を着替えるよ

そして着替え終えたら

「では本日から格闘及び射撃を含む実践訓練を開始する」

「「「はい!」」」」

授それから業に入って、セシリアと鈴は嫌いな姉と戦うことになった。2人とも負けただけだな

まあ、それから時間がたって部屋に帰ったら

「あつ、お帰り。創」

デュノアが居た

「…何で居るんだよ、デュノア。留守番はどうした？」

「それは、博士に任せています」

「……それで良いのか？博士」

「良いんだよ。それより、あそぼ」

そう言ってブレスレットと「Dエッグ」を出した

「なるほど。再会祝いにバトルか、狂戦士に目覚めてしまったようだな?」

「本気で来てね?。【ジライヤ】以外の機体だよ?」

「どうやら【ジライヤ】の事は知っているようだな。良いぜ。真・最強【LBX】で相手になってやろう。泣くなよ?」

「昔のようには、もう泣かないよー!」

そう言ってバトルをしようとしたら

『ゴングオン!』

(まさか)

(聞かれていた!?)

創はドアを開けたら

「井上。時間、空いているか？」

千冬が居た

男の娘が姉?それとも妹と戦うのは良いのか?

「織斑先生。どうかしたのですか?」

そう言つて千冬に聞く

「ああ、聞きたい事があつた」

「何ですか?」

「お前の機体は、『ジライヤ』は本気ではないのか?」

「……最初から聞こえていたのか?」

「ああ、全部聞かせてもらった。あの機体はまだ手加減していたのか？」

「旧・最強と呼ばれていましたから、最強と言うのは少し当たっていますが？」

「だがあれでも手加減していたのだろうか？」

「……上がってくれ。生徒に聞かれましたらまずい」

「そうか、分かった」

千冬は創の部屋に入って行った

「単刀直入に言う。井上、お前の【LBX】は手加減なのか？」

その一言にデュノアは驚いた

「どうして知ってるの!？」

「盗み聞きだ」

「何ですって!」

「落ち着け」

そう言つてデュノアの怒りを治めた

「井上、シャルルと知り合いか?」

「盗み聞きしているなら、シャルルの事を知っているはずだ」

「知っていること?……はっ!」

「どうやら、気付いたようだな。それで、参加するのか?」

「何のだ？」

「バトルだよ、真の本気でシャルルと戦うんだよ」

「!?そんなことをしたら!?」「大丈夫だ」何がだ!?

「シャルルの機体は、俺が開発したオリジナルの機体だ」

「何!?!。井上が作った!?!」

千冬は驚いた。家族が【LBX】を持っているから

「そろそろいいか?。シャルル。頼む」

「うん分かったよ。【Dエッグ】展開」

デュノアはそう言って【Dエッグ】にスイッチを押して前に投げた。落ちた【Dエッ

グ」の緑の光が創、デユノア、千冬を包み込んだ

【天界ステージ】

それは、少しパクっているが「天空ステージ」は空は太陽があつてその太陽を浴びた場所以外は、少し暗い部分もある、だが「天空ステージ」その部分は黄金色にしている。まさに天国に付いたような感じがする

「な!?!これほどまでの「ステージ」があるのか!?!」

「ああ、此処は「天界ステージ」。シャルルだけの特別ステージだ」

「特別ステージだと!?!」

「ああ、シャルルに似合うステージを俺は作ったからな、それと、早く観客席に行け、このままだったら、戦いに巻き込まれるぞ」

「でもどうすれば!?!行けるんだ!?!」

「スマホを見て見ろ」

創はそう言ったら、千冬はスマホを出した

「その中に見たこと無いアプリが入っているはずだ。そのアプリに【観客席】の方を押せ」

「わ、分かった」

千冬は創に言われたことを、やったら、いつの間にか観客席に居た

「これで良いだろ？」

「ああ、ありがとう」

「どうも、それとシャルル、本当に、俺と本気で戦うのか？」

「もちろん、僕は君と戦うよ。なんだって、最強のプレイヤーが目の前に居るんだし」
「…お前は、本当に、変わってしまったな」

そう言っつてスマホを出した

「まだ僕は、変わっていないよ?」

シャルルはそう言っつてブレスレットを出した

男の娘が【キング】と【熾天使】が争うのは良いのか？

【LBX】セレクト、【LBX K・アーサー】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX K・アーサー】でよろしいですか？

創は、その選択に「はい」を押しした

そしたら、いきなり空から黄金の光が俺を包み込んだ

「ま、眩しい!?!」

「い、これは?！」

千冬はその光に眼を閉じて右腕で目を隠した

デュノアは、その光に驚いている

そして、その光が無くなったら、目の前には王冠を被って背中では黄金の翼に少し青い部分もある。さらにその翼にブラスターが4つも付いている。まさに【キング】が現れた

『これが俺の真・最強の【LBX】、【K・アーサー】だ!』

「これが、…創の…最強の【LBX】。【K・アーサー】」

千冬は【K・アーサー】の姿に大きく驚いた。此処まで綺麗でどんな敵でも圧倒的に突破してしまう機体…

「じゃあ、僕も使おうかな？」

デユノアはブレスレットに手をかけ、「LBX」を起動させた

起動させた時、また、眩しい光がデユノアに集まってきて、光がデユノアを包み込んだ。その光が消えると。目の前にいたのは「熾天使」「ルシフェル」が現れた

『じゃあ、始めようかな？』

そう言つて、「ヘブンスエッジ」と「天帝ネメシスシールド」も出して、「ヘブンスエッジ」を構えた

『先生！。ちゃんとこの戦いを見ていてくださいいね？』

「っ!?!。ああ！、分かった！」

千冬は絶対にこの戦いだけは目を離さないと思った

『じゃあ、始めよう』

そうやって【オートクレール】と言う黄金の剣を出した

『さあ、来い！』

『じゃあ、円了無く、行きます！』

そうやって【ルシフェル】から、早く動いて、【ヘブンズエッジ】で創に素早い剣さばきを仕掛けてきた。

【アーサー】はその剣さばきを同じように剣さばきで攻撃を防いだ

【ルシフェル】は剣さばきがなかなか通用しなかったため、1回離れて体制を整えた

『本当に強くなったな、シャルル』

『君の方こそ、此処まで強いプレイヤーだったとはね』

（なんて戦いだ。同じ機体どうしだったら、此処まで戦力が上がるのか、…恐ろしい機体を作ってくれたな、井上）

『次はこっちから行かせてもらおう』

【アーサー】はそう言って、【ルシフェル】に一閃を仕掛けた。

だが【ルシフェル】はその攻撃を簡単に盾で止めた。

『…俺の【アーサー】の一撃を盾で受け止めるとは』

『僕も昔より、さらに強くなったよ！。今の僕は創と互角だよ！』

『だろうな』

そう言つて創も1回離れた

(圧倒的な力を、こうも簡単に、止められるとはな。……本当に強くなった)

創はデュノアの評価を心の中で言った(自分に)

男の娘が【キング】が【熾天使】に激しい戦いを繰り広げても良いのか？

『そろそろ、本気で行くよ？』

『ああ』

そう言って【オートクレール】を構えた

『さあ来い！。シャルル！』

『じゃあ行くよ！』

シャルルはそう言って一気に突っ込んで、【ヘブンズエッジ】で創に斬りかかった

『甘い！』

そう言つて、【ルシフェル】の攻撃をバック宙でかわした

『まだまだだよ！』

【ルシフェル】はかわした創を、また斬りつけようと【ヘブンズエッジ】で襲つてきた。
だが

『普通』

その言葉を言つて【ルシフェル】の攻撃を【オートクレール】で止めた

『やっぱりか』

『まだまだだな』

【アーサー】は止めた後、【オートクレール】で【ルシフェル】に斬りつけようとするが、それをかわされ、また攻撃をしてきたら【ヘブンスエッジ】を止めての繰り返しが続くが、なかなか決着が付かなかった

(なんとという戦いだ。此処まで互角に戦ってても一步も引かないとはな)

千冬は心の中で感想を言っていた(千冬の心で)

『創！、これで終わりだよ！』

【ルシフェル】はそう言って盾をしまった

『必殺フランクシヨン！』

【アタックフランクシヨン】 神速剣

その電子音が鳴ったら、直さに【ルシフェル】はいきなり消えた

そして目にも止まらない速さで、輝く刃で創に斬りつけた

(……甘いな、その速さじゃあ、俺に傷を負わせ無い)

【アーサー】はそう考え、剣でその斬撃を素早く弾いていった。創は傷を負わずに。

【ルシフェル】は最後の一闪を【アーサー】に当てようとしたが

た
その一撃も【アーサー】は何もなかったかのように、その一撃も剣で受け止めてしまっ

た
『なに!?!』

『そんな攻撃じゃあ、この【K・アーサー】に、通用すると思ったか!。それに、その神速剣は、此処まで遅い技じゃない!』

そう言って、受け止めた【ヘブンズエッジ】を弾き飛ばした（【ルシフェル】も）

【ルシフェル】は吹っ飛ばされても、綺麗に着陸して、【アーサー】の場所よりも上に居た

『だったら、まだ僕には最後の奥の手が残ってるよ！』

『だったら、来い！。』

『じゃあ、始めるよ！。【セラフィックモード】！』

【セラフィックモード】

その電子音が鳴ったら少し少しずつ、黄金のオーラが放つ【ルシフェル】の姿になつた

『じゃあ行くよ！』

【ルシフェル】は盾も取出しまた付けて、「アーサー」に向かって落下して来た

【ルシフェル】「ヘブンズエッジ」で「アーサー」に斬りつけた

『ふっ！』

【アーサー】は【ルシフェル】の攻撃を止めた

（やっぱり、「セラフィックモード」は強化し過ぎたか！）

実は【セラフィックモード】は普通の設定ではかなり弱かったため、

スピード パワー 防御 性能は【サイコスキニングモード】の5倍

つまり、2.5倍に増やしている。これなら、確かに【ルシフェル】だと思えるからな

でも【サイコスキヤニングモード】はシールドエネルギーと機体までも全回復する効果があったが

【セラフィックモード】は、完全防御。つまりどんな攻撃でも、効かない効果になっている

『創、ありがとう。此処まで最強の機体を作ってくれて』

『確かに、今の【ルシフェル】は最強だ。だが、俺が【ルシフェル】の弱点を、無いとは思わないよな?』

『!?!』

『この戦いのために少しだけ弱点を作っておいたんだ!』

作者「ま、まさかー!。【アーサー】が【ルシフェル】のこの戦いのためにどんな弱点

を作ったのだろうか!?!。次回に続く――!

男の娘が【キング】が【熾天使】に弱点を言うのは良いのか？

『う…嘘でしょ!?この機体に、弱点なんか無いよ!?』

『確かに無い。でも、それを可能にしてくれるのは、【K・アーサー】なんだよ』

『どう言う事?』

どうやらデュノアは解っていないようだな

『この機体の特徴はかなり強い相手でも対抗するために作られた機体だ』

『だからどう言う意味なの!』

『だから、この機体の特徴は、「リプログラミング」が出来る。つとと言う事さ』

『「リプログラミング」？』

『わかりやすく言えば、例えば、「セラフィックモード」銃も剣も使ってもダメージは無しになるのを、書き換えて、効くって事になる事だよ』

『!?。それじゃあ!?、僕の【ルシフェル】の【セラフィックモード】の効果を書き換えるの!?。そ、そんなのあり!?』

『ありなんだよ』

『たかが機体の性能だけで勝利を手に入れる。それが今のISがある時代の理不尽さだ。これから、お前の【セラフィックモード】をリプログラミングを行う』

【ナイトモード】

その電子音が鳴ったら、「アーサー」の機体の体はさらにまた金色になった（もともと金だけだ）

『それえじゃあ、行くぞ！。必殺ファンクション！』

『えっ!?!』

【アタックファンクション ジェットストライカー】

その電子音が鳴った時【アーサー】は空高く飛んで飛行機形体になった

（変形するだど!?!）

千冬は【アーサー】が飛行形体に変形したのを驚いていた

そして飛行形体になって流星のように【ルシフェル】に突撃した

『くっ！』

もちろん【ルシフェル】はかわした

(まだだ！)

【アーサー】は直さにUターンして、【ルシフェル】に突撃した

『えっ!?!』

【ルシフェル】はまたかわそうとするが、スピードが間に合わないため、激突して吹っ飛ばされた

『ぐっ！』

デュノアは体制を整えようと頑張つて整えた

『これで【ルシフェル】の【セラフィックモード】を「リプログラミング」をした
『嘘でしょ!?!?』』

デュノアは今すぐに機体の【セラフィックモード】を見た。そしたら

『能力が、無くなっている!?!?』

『そうそう、本当の神速剣の技を見せてやろう』

【アタックファンクション 神速剣】

その電子音が鳴ったら、直さに【アーサー】は消えた

そして目にも止まらない速さで、輝く刃で【ルシフェル】に斬りつけた

(み、見えない!?!?)

【ルシフェル】はその技を全てくらってしまった

【アーサー】じゃ最後の一闪を【ルシフェル】に当てた

『くっ！』

【ルシフェル】はこの一撃には耐えられずボロボロの姿になって、倒れた

『どうやら、俺の勝ちのようだな』

(確かに、あのボロボロの状態じゃあ、戦えない、創の勝ちだ)

千冬はそう納得していたが

『…まだまだよ』

『なに?』

『まだ、僕は戦える!』

【ルシフェル】は立ち上がった。この状態で戦っても敗北が決まるだけだ、けど本当の目的は

『どうやら、【ルシフェル】だけの特別【必殺ファンクション】を打つつもりだな?』

『ええ、そうだよ。僕には本当の奥の手が…ある!。これで最後だ!【必殺ファンクション】』

(【ルシフェル】だけの、【必殺ファンクション】!?)

【アタックファンクション セラフィックウイング】

その電子音が鳴ったら【ルシフェル】は空高く飛んだ

『…なるほど』

それから【ルシフェル】の翼が【ルシフェル】の機体ぐらいまで大きく羽を広げた
それからその羽の真ん中の部分が光をチャージするかのようになり、光をためていた

『これでどう！。【セラフィックウイング】！』

その一言で光のレーザーを打ってきた

『…甘いな』

【アーサー】は回避せずに立ち止まっていた

(!?かわさないのか!!?)

【アーサー】に当たるレーザーが全て【ルシフェル】に跳ねかえった

『嘘でしょ!?!』

【ルシフェル】は自分の必殺技を全てもろにくらって、地面に落下した

『【ナイトモード】の効力を忘れたのか?。射撃全てを跳ね返す能力だぞ』

『う……嘘……でしょ?』

『残念本当だ。それより、もう限界じゃあ無いのか?』

『……確かに……【ライフゲージ】がもう無い。僕の……負けだよ……』

デユノアは全ての力を使い果たし、【ルシフェル】の機体は消え、元のデユノアになって気絶した

『相変わらずだ。また相手になってやるよ』

そう言つて【Dエッグ】と【アーサー】をしまった

男の娘がクラスメイトの1人に聞かれるのは良いのか？

「ルシフェル」の戦いを終えた「アーサー」は創の姿に戻して、デュノアをベットに運ばせた（お姫様抱っこで）。それから千冬に「俺の機体と、シャルルの機体は報告はしないでくれ」と言い、千冬は「分かった。だがお前の機体は最強だな」と言ったら創は「当たり前だろなんせ、俺が作った【LBX】だからな」と答えたら千冬は、頭を抱えて困っていた。創は笑っていた（声を上げずに）。そして千冬は見回りがあから創の部屋を出た。創はもちろんデュノアの機体と創の機体を「メンテナンス」行つてから、パジャマに着替えてもう寝た

それからも色々時間が流れて、今は昼休みになっている

「ねえねえ、ハジハジ。お昼食べに行かない？」

突然後ろから聞こえて、後ろに振り返ったら、同じクラスの本音さんだった。

（相変わらずなんか気が抜けているような感じがするなあ。それと確か、生徒会書記だったっけ。？名前を呼ばれたら、「何で知ってるの」つと言われるから、知らないふりをしておこう）「君は？」

「布仏本音だよ、のほほんって読んでね」

「じゃあ、のほほんさんと呼びます。

「いや、のほほんと、読んで〜それと敬語無で」

「分かった。それとハジハジって？」

「創のハジ、だからハジハジ。だよ」

「……まあいいよ。それで良いんなら」

「ありがとう」

それから誘いを受けて、のほほんさんは「やった〜」っと嬉しかったようだ。それから、のほほんさんの友達が紹介してから一緒に食事をして会話もした。……でも、聞きたくなかった話が出てきた

「ねえ、ハジハジ〜」

「ん。？ 何ですか？」

「ハジハジはたつちゃんに、何かした？」

……たつちゃん？

「……たつちゃんって人は誰なの？」

「生徒会長のあだ名だよ〜」

(マジでイライラするなあ。!!だが、此処は耐えよう。相手は俺の事を知らない相手だ。だから耐えよう)「……どうして俺が生徒会長さんに何かしたのかな?」

「たっちゃん、顔が悪かったから。いつもの性格に戻っていないんだよ」

(なるほどそう言う事か。でも、なんか違うんだよね)「でも、俺は知らないよ。生徒会長さんに何もしていないですよ?」

「だったら、どうして会長が泣いていたの?」

突然の発言に創は驚いた(大きく驚いたらばれるから小さく驚いた)

「授業が終わった後、ハジハジは直に自分の部屋に戻っていた、戻った後直にハジハジは部屋で寝てパーティーに来なかった。誘おうと私が行こうとしたら、たっちゃんが扉の前で泣いていたの。だからたっちゃんに何かしたのかと考えたの」

（イライラするなあー!! 本当にイライラする。!!【キラードロイド】のワイバーンを使ってこの学園を潰したくなってくるなあ!!）

「教えて、ハジハジ！」

のほほんが創の楯無に何をしたのかを聞かれた

男の娘がドイツ人と戦う前になっても良いのか？

「……残念ですが、俺もよく分からない。ですが、何もしていないと言うのは確かです」

そう言って食器を片づけて席を立とうとした

「ごちそうさまでした。教室に向かいますから、これで」

「ハジハジ！」

「……俺に聞いても、何もありませんから」

そう言って創は席を立てて食器を片づけて食堂を出た

（イライライライラ今日はほんまイライラするわあ!!!
!!!）

創は廊下で創の事を聞こうとした本音にイライラしていた

授業

「……1!、2!、1!、2!……」

(軽いI Sの操り方だな、おまけにそれは剣道のやり方じゃん。一夏は…あちやくこりゃ駄目だな、さらにまたおまけに、つてあの2人が全然説明になっていないし……あれは)

創が見たのはラウラがI Sに乗っていた姿だった。他の生徒もラウラを見てI Sを詳しく言っていた

「…織斑一夏」

「何だよ?」

「貴様も専用機持ちのようだな、ならば話が早い」

（相手は軍つか……だったらあの【LBX】が一番だ）

「私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「貴様になくても、私にはある」

「今でなくても良いだろ？。もうすぐクラスリーグマッチだから、その時で」

「…ならば」

そ言った瞬間。デカイ銃が一夏に向けた

(……でけえ!?あれで打つのか!。ま、俺には……あの機体が使いたくなつたから使うか)

そう考えて居たらいきなりラウラの銃が一夏に撃つた

(考えなしか、間に合えよ)

【LBX】セレクト、【LBXプロト・I】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX プロト・I】でよろしいですか?

創は、その選択に「はい」を押しした

そしたら、スカウ〇ーみたいなゴーグルが出てきてそれを左に付けた。そしたらそのゴーグルが俺を包み込むかのように【プロト・I】が出来た

【プロト・I】は、打ってきた弾を【アドバンスドラيفル】を打って打ってきた弾を弾き飛ばした

「創！」

一夏の方に向いて

『ザコのお前に守ったわけじゃあねえ』

「じゃあ、何で!？」

『ドイツの代表候補生に、この機体を見せるために使ったんだよ。それに』

そう言ったらラウラの方に見た

『ドイツ人は普通、待てないのか？』

「それが、貴様が使うI Sか？」

男の娘が戦闘中止になって、天災に頼んでも良いのか？

「その生徒、何をやっている？」

いきなり、何処からの声が聞こえる。

「ふん。今日の所は引いてやろう」

ラウラがそう言ったら、ISを解除し、アリーナから去って行った

ラウラが去って行ったら創も「LBX」をはずして、アリーナから去って行った

それから、授業が続き続きで、もう夜になった。ラウラがアリーナに出て行ったのを見たから、創も見えないように付いて行った

「教官。あなたの完全無比の強さこそ、私の目標であり、存在理由」

(そこまでして、千冬の事を尊敬しているのか)

ラウラがそう言つて左に付けている眼帯を取った。数秒後、やっと左目を開いた

(!?あれはクロエの目と同じ色!!?まさか!?)

「織斑一夏。教官に汚点を与えた張本人。排除する!、どのような手段を使つても」

(……クロエに報告するか、クロエの妹。まさかな)

そう考え創はラウラに築かれないようにアリーナから去つて、創の部屋に行つた

創はスマホを取つて、束に連絡した

『ハイ!!皆のアイドル!!、束さんだよー!!君は?』

「俺だ、束」

『はつくんどうしたの？』

「……は、はつくん？」

『うん。創のはから取って、はつくんにしたの！。良いかな？』

「なんか半分俺のセリフ言っていないか？」

『言っていない言っていない！。それと、はつくんはどうして束さんに聞くのかな？』

「調べてほしい、人物が居る。それを知らせてもらおう」

『誰なの？。もしかして、好きな人が出来たの？』

「……何馬鹿なことを言っているんだ」

『ごめんね、東さんは冗談が「お前だよ」面白いから……え?』

「だから、お前だよ」

その一言で返事が無くなっていた……

『や、やだなあ。東さんをからかわないでよ!』 // //

「確かにからかっている」

『もお、酷いなく東さん怒っちゃう「半分はな」ぞ?』 // //

「だから、半分」

『本当に怒っちゃったよ! プンプン!』 // //

「あーはいはい、ごめんなさい。それと、調べてほしい人は、ラウラ・ボーデヴィツヒを調べてほしい」

『もくからかわないでよく。ラウラボーデヴィツヒって、ドイツ代表候補性だよね？どうして調べるの？』

「ラウラの左目と……まさかだと思うが……聞いても良いか？」

『んん？なにになに？』

「ラウラを見たとき、まるでクロエと似ているんだよ。それにクロエの両目と同じ目が付いていたんだ。左眼に」

『なるほどねえ。それで、どうしてもはつくんは、ドイツの代表候補生を調べたいの？』

「いや、クロエにそっくりだったから、まさかな、つと思ったから、調べてほしい」

『うん、いいよ。もう家族だし』

……今なんて言った？

「おい、今なんて言った？」

『東さんは、なんと、デユノア家の家族に一員になったんだよー、ブイー！』

「はあ!?!。お前!!」

『うん、もう決めちゃったんだよねえ〜』

「東……」

『ごめんね、はっちゃん。「箒はどうするんじやー!」えっ!?!そっちー!?!』

「お前の妹はどうするんだ！」

『大丈夫！。箒ちゃんの姉でもあるよ！』

「さっぱり分かん！」

『つまり、箒ちゃんの姉でもあつてはつくんの姉でもある存在にするよ！』

「……やっぱり似てるな」

『んん？誰に？』

「俺にだよ」

『何処が？』

「余り言いたくないが…」

『なになに？黙っておくよ』

「もししやべったら、束の事嫌いになるよ。それでも良いのか？」

『うんうん。大丈夫大丈夫。束さんは誰にも言わないよー！』

「やっぱ止めとく。その方が一番かもな」

そう言って、電話を切った

「はあ、……あはははは」

「相変わらず、楽しい奴だな」

創は束の事を笑っていた

男の娘が逃げるって道でも良いのか？

それから一日経ってメールが送られた。どうやら、ラウラはクロエの妹らしい、そのことを聞いた創はかなり驚いた。本当にそっくりだから

それから、教室に入ったら「一夏と付き合える」と言う馬鹿な言葉ばかりでさらには創もその事に入れられたんだぞ。つと心の中で怒っていた

創はアリーナに向かったらセシリアと鈴が喧嘩をしていた。ちなみにISで何処まで馬鹿だ

2人が戦おうとしていた瞬間いきなり空振りの砲撃を打ってきた

(ラウラか……見せてもらおうぞ。その戦いを)

創は2対1の戦いを見ていた。結果的には2人は首を絞め羅げていた

(仕方ない。クロエの妹だから、白けるが、ま、やってやらないと大変な事になるからやらないとな)

そう考えてスマホを出した

【LBXセレクト、【LBXプロト・I】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX プロト・I】でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした

そしたらスカウ〇ーみたいなゴーグルが出てきてそれを右に付けた。そしたらそのゴーグルが創を包み込むかのように「プロト・I」が出きた

【コンバットソード】で首を締め上げていたロープを斬った。開放された2人は『バリ』と倒れた

『ラウラさん。相手はリーグ戦で出る相手でもあるんですよ。此処までISを壊されても良いんですか？』

「貴様に関係ないだろう」

『そうですか……じゃあ2人保健室に運びますね。邪魔したら、……なるべく邪魔しないでください。良いですね？』

そうやって2人を運んで保健室に運ぼうとしたが

「ドオオン！」

『!?』（いきなり打つてくんない!）

ラウラが放った銃弾を始めはかわした

『おい!、怪我人を運んで居るのに、打つてくんない!。危ないじゃないか!』

「知ったことか。貴様が強い機体がこの第三世代の機体に勝てない」

『最初はお前を痛い目に合わせたかったが、白けて痛い目に合わせるのが厭きてんだ。だからお前と戦う気はもう無い』

「貴様になくとも、私にはある」

『……やっぱ、言わなかった方が良かったかもな』

「それはどう言う意味だ!」

『そのままだよ！。第1誰があのだザコ馬鹿を守らなきゃいけないんだよ！』

「なに!?!。じゃああれはなんだったんだ!?!」

『演技だよ演技。俺はあのザコには大きく恨みがあるんだよ!。……それと……大きく馬鹿な事を言っていていいか?』

「何だ?」

『お前のその左目、それはなんだ?』

「……どう言うつもりだ?」

ラウラは創を睨んだ

『いや、ラウラ、少し似ている奴が1人いてな、お前とそつくりのまるで鏡みたいなやつ

に似ているんだよ』

「だから誰なんだ！」

『……お前の……姉だよ』

「何!?!」

ラウラは驚いた、自分に姉が居たのだから

『話は終わりだ。2人を連れて保健室に向かう』

創はそう言って「スモークグレネード」をラウラに投げた

ラウラは自分のISが強いと思ってバリアでグレネードを止めて地面に落としたり

【ボーン!】

なんとそれが煙幕だと分からなかったため、煙幕をくらってしまい、目が見えない状態だった

(急げ！、急いで2人を運んで、脱出!!)

創はスタコラサッサと逃げてからの「LBX」をしまった

男の娘がリーグ戦の戦いの前になるのは良いのか？

スタコラサツサと逃げ、2人を保健室に運び、創は……スタコラサツサ（全力）で逃げたから疲れて部屋に戻って寝た

それから時が流れて

作者「1000年ぐらいたってないぞ」

学年トーナメント戦の日になったら

「え？」

「ラウラ・ボーデヴィツヒと井上創」 「シャルル・デュノアと織斑一夏」

(……良いのかな？俺出ているけど、それにデユノア〜!?本当に最悪な組み合わせだな
おい！)

創は仕方なく、アリーナに向かった。ついでに謝りに行くことも

「あとう。ラウラさん」

「何だ？」

「あの時はすみませんでした。反省しています」

「じゃあ、あの時に私に姉とかが居たのは何故だ？」

「長くなるけど良い？」

「手短でな」

創がラウラに姉が居たことを話、ラウラの実験の失敗作を聞いて、驚いていた

「その話は、本当なのか？」

「ああ、あいつに聞いてみた。間違いない…はず。それと、使わないといけない物がありますから使ってもよろしいですか？」

「なんだ？」

ラウラに「Dエッグ」の説明をしたらかなり驚いていた。この卵がバトルフィールドになるからだ

ラウラはそう言つて一夏に向けた

「一戦目で当たるとはな、待つ手間が省けたと言うものだ」

「それは何よりだ。こつちも同じ気持ちだぜ」

「シャルル、今回はこれだ、解ってるな？」

「うん。大丈夫だよ。対策は練っている」

会話が終わったらカウントダウンが鳴った

最後の1になったら

「叩きのめす！」

とラウラと一夏

「一気に倒す！」

と創とデユノアが言った瞬間。スタートした

「【Dエッグ】展開！」

創はそう言い【Dエッグ】にスイッチを押し、前に投げた。落ちた【Dエッグ】の緑の光がこのアリーナに居る人たちを飲み込んだ

飲み込まれた人たちが見たら

「な!?これは!?!」とか「何だこれは!?!」とか貴族から聞こえてきた。周りの生徒も「凄い!」と驚いていたようだ

「貴様、まさか、こんなものまで作っていたとは」

「ステージは【闘技場】。正々堂々戦うためのステージだ。」

「ほおー、ステージにも名前があるのか」

「ああ、それと貴様はよくないだろ?せめてなら相棒と呼んでくれないか?今の戦いだ

けな」

「フツ、いいだろう。相棒、一夏は私がやる」

「そもそもシャルルを止めないと、絶対負けるからシャルルに狙う。頑張つてよ」

「フツ、分かった。」

「フツ、分かった。」
ラウラはその事を解り一夏の方に向かった。創もそろそろ【LBX】を起動させなくては

「頼むぞ」

【LBXセレクト、プロト・I】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX プロト・I】でよろしいですか？

創は、その選択に「はい」を押しした

そしたらスカウ○ーみたいなゴーグルが出てきてそれを右に付けた。そししたらそのゴーグルが創を包み込むかのように【プロト・I】が出来た

男の娘が【中尉】と【改造シャドー】と戦ったのは良いのか？

「それで行くの？」

『いきなり【アーサー】は強すぎるからな、今回はこれにした』

「だったら、僕も別の機体にするね？」

『シャドーか普通か？』

「残念、僕が使う機体はこれだよ」

デュノアはそう言い、同じブレスレットだが青い宝石が付いていた

『それはまさか!』

「そう。僕の使う機体はこれだよ」

そう言つてブレスレットに付けてる青い宝石に手をかけた

起動させたとき、今度は、青い光がデユノアに集まつてきて、光がデユノアを包み込んだ。その光が消えると。目の前にいたのは「ルシフェル」と違い青いジェットブーストが付いていて、頭には青い角が出ていて、金色の姿をした「シャドールシファア」の姿が現れた

『なるほど、その姿だったら、「シャドールシファア」か』

『でもそれじゃあ、闇つと言う言葉じゃないでしょ?』

『「カスタムネーム」か?』

『そう、この機体の名前は【ルキフェル】だよ』

『【ルキフェル】。古典ラテン語の【ルシファー】の別名か』

『そうだよ。じゃあ、始めるね？創』

デュノアは【ヘルズエッジ】に似ているが光剣の色は青色だった。【魔王クエイサーシールド】は緑の色が付いている部分が青になっている

『いつでもどうぞぞ』

【プロト・I】がその一言を言った瞬間。【ルキフェル】は【プロト・I】に向かって青いジェットブーストで突撃してきた

『やあ！』

【ルキフェル】の一撃を【プロト・I】に攻撃した

「ギーン！」

【プロト・I】はその一撃を止めた

『まだだよ！』

【ルキフェル】ジェットブーストで【プロト・I】に押し付け、【プロト・I】に2撃でダメージを与えて【プロト・I】を吹っ飛ばして、壁にぶつかった

『くっ！、さらに【カスタマイズ】を行ったか』

『そうだよ。この機体は【ルシフェル】と同じスピードにパワー、全ての性能を互角に戦える所までパワーアップした機体だよ。【K・アーサー】だったらこの機体に勝てたのに、何でなの？』

『それはだな』

その一言で【プロト・I】が立ち上がった

『この機体は、手加減だよ。此処で本気を出したらどうなるか、俺には分かってる。だから本気を出さない。それが俺のやり方だ』

『だったら、完璧に壊すよ？』

【ルキフェル】はジェットブーストでスピードを上げて【プロト・I】に突撃してきて【ヘルズエッジ】で斬りつけてきたが

『昔のお前は、優しかったのに、何で此処まで狂戦士なんだよ』

【プロト・I】は【ヘルズエッジ】を【コンバットナイフ】で弾き、【コンバットナイフ】で【ルキフェル】に斬りつけようとしたが【魔王クリエイサーシールド】で守ったが【魔王クリエイサーシールド】を弾き飛ばした

『!?。盾が無くても!』

【ルキフェル】は【ヘルズエッジ】で【プロト・I】に振り下ろしたが、【プロト・I】はその一撃を【コンバットナイフ】で防いだ

それから別の戦っているラウラは、【ルキフェル】に銃を向けようとしたが

【ルキフェル】はその事に気づき、押さえている【ヘルズエッジ】を戻し、【プロト・I】にバランスを崩させ【プロト・I】の背中を蹴って移動した

「ほおー、やるな」

ラウラは銃を【ルキフェル】じゃなく一夏に向けて発射した

「バン！」

「ぐっ！」

一夏はその弾を防御した

さらに【ルキフェル】はラウラに近づいた、ラウラはロープでとらえようとしたがそれをかわされ【ヘルズエッジ】の一撃を背中にくらいラウラはダメージを受けた

「シャキーン！」

「がはっ！」

【ルキフェル】はラウラにダメージを負わせて左に曲がり、ジェットブーストで【プロト・I】に向かった。【ルキフェル】は【プロト・I】に一撃を出した【プロト・I】の【コンバットナイフ】で弾いた。

『やるね、…だったら！』

【ルキフェル】はジェットブーストで【プロト・I】に突撃してきた

『ぐっ！。良く考えるな……でも！』

【プロト・I】もジェットブーストで【ルキフェル】に突撃した

『わっ!?!。まさか、その機体にもジェットブーストを付いていたの!?!』

『【プロト・I】のジェットブーストはこれだけじゃない!』

『なに!?!』

【プロト・I】はさらにジェットブーストを最大限までに上げたら、【ルキフェル】は押し戻された

『嘘!?!』

【プロト・I】は【ルキフェル】の【ヘルズエッジ】を弾き飛ばし、【ルキフェル】の武

器はもう無くなってしまった

『しまった！』

【プロト・I】は【ルキフェル】に2撃ダメージを与えて、最後の1撃で【ルキフェル】を空に吹っ飛ばして

『【必殺ファンクション】！』

【アタックファンクション ストームソード】

【プロト・I】はその場で回転し、竜巻を起こして【ルキフェル】に15連撃を斬り続き、最後の1撃で【ルキフェル】を空に吹っ飛ばした。

「フイイイーン」

その衝撃に、【ルキフェル】の身体から光が出てきて、その光が強くなって、

「バーン！」

全身が爆発した。この姿に見た生徒と企業と先生たちは驚いていた。ISが爆破したから

『ふ、何とか倒したか。やはり、「ルシファー」シリーズはかなり強いな』

男の娘が【中尉】が軍人を救う前になるのは良いのか？

「「「「キヤヤー——！！」」」」

（五月蠅！。どうした？）

「創！」

（ん？この声は一夏？）

『何だ？』

「何打じゃねえよ！。人を殺すなよ！」

『……は？何言ってるんのお前？』

「何でシャルルを殺した！」

(……何だ、そんな事か)

『あのなあ、説明していなかったのは悪いけどさあ、何人殺しになってんだ？』

「さつき、シャルルを殺したじゃないか！」

『……ちゃんと見て見ろ』

「はあ!？」

『良いから、爆破した空を見て見ろ』

「そんなことをして、なんになるんだよ！」

『馬鹿か？、あいつはそんなことで死ぬ奴じゃない』

「お前！ 『やっぱ強いなあ』…え？」

黒い煙が消えたら、【ルシフェル】の姿がをして空を飛んでいるシャルルが居た

『創凄いな、此処まで【カスタマイズ】をしたのに逆転されるなんて』

『いちよう言っておくが、シャルル、お前の機体【ルキフェル】の機体はさっきの爆破で壊れているから、別の機体は戦えないぞ』

『あ、そうだね。じゃあ、僕は負けか』

デュノアは地面に付いて【ルシフェル】ををしまった

『これで、残りは一夏！。お前だ！』

「嘘だろ!?!。いくらなんでも1対2はキツイぞ!?!」

『安心しろ。あくまでお前をボコらすのはラウラだ』

「へ?」

『俺じゃあ、病院送りだから、まだマシのラウラさんに、任せることにしたんだよ』

「ええ!?!」

『じゃあ、後は任せる。ラウラさん』

そう言つて「プロト・I」は離れた

それから、「プロト・I」は、戦いが終わるまで後ろで見ていた

(ん？。 厄介事か、……上手くいくのに何でこうなるんだよ)

ラウラがI Sを暴走して、黒いI Sになった

『井上！。この状況を何とか出来ないのか!?!』

『だったら、強制脱出装置がそこにあるから、それを押せばいい』

『ボタンって何処だ!?!』

『何かボタンばかりあって、そのボタンの大きくて、赤色のボタンを押せばいい、真ん中にあるよ』

(これか!?!)

千冬はそのボタンを直さに押し、皆を避難させた

(帰ってから、避難させないと！)

「織斑先生！、大変です！」

山田先生は大きく慌てていた

「どうかしましたか、山田先生？」

「創くんが、帰ってきてきてないです！」

「なに!?!。……まさか」

『ピロピロピン』

(こんな時にメールか?。忙しいのに……井上!?!)

千冬は創から送られたメールを読んだ

「暴走したラウラは俺が止めます。誰にも手を出さないでください」

それを読み終えて、スマホをポケットの中に隠した

「織斑先生、何をしていましたのですか？」

「……メールを…見ていました」

「こんな時に誰からで「井上だ」井上くんが!？」

「ああ、ラウラを止めてくれるらしいです」

「良いのですか!？」

「井上なら、止められるはずだ」

「本当にいいのでしょうか？」

今頃

『これで、俺とラウラ以外の人は居ないな。これなら本気で戦える！』

【プロト・I】は「コンバットソード」を取り出した

『ラウラ、直にお前を助けてやる！』

男の娘が【中尉】で軍隊を救うのは良いのか？

『まずは、「リプログラミング」プログラムをインストールしないな』

【プロト・I】はプログラムをインストールしていた。でも少しおかしい、相手が攻撃してこない、普通なら攻撃するチャンスなんだけど、仕掛けてこない

（もしかして、攻撃を仕掛けてきたら、襲ってくる感じが、……インストール完了！）

（これなら、何とかいける！）

【プロト・I】はインストールを完了したら、「コンバットナイフ」を出して構えた

その構えに反応したラウラは右手に持っている刀を構えた

(どうやら、あたりか。一気に決めるぞ！)

【プロト・I】はジェットブーストを出して、ラウラに突撃した

ラウラは、刀で【プロト・I】に斬撃をしてきた

(この一撃は「リプログラミング」が大きく入っている。この一撃を別の方に与えたら、チャージするまで大きく時間がかかる！。此処は………仕方ない！)

【プロト・I】の胴体の関節が、少し紫に光って、身体の一部が変わった

『これでどうだ』

【プロト・I】の回し蹴りで、ラウラが持っていた刀を蹴り飛ばした

【プロト・I】の必殺技、【高次元多関節機構】。【プロト・I】にしかない、【超高度駆動システム】、このシステムは【プロト・I】シリーズでは無くしては、【高次元多関節機構】

使えない

ラウラが持っていた刀を蹴り飛ばした後、もう1回【高次元多関節機構】を行い、元の【プロト・I】の姿に戻った

『これで最後だ！』

【プロト・I】はそう言い、ジェットブーストを使ってラウラに突撃して、【コンバットナイフ】を振り降ろした

ラウラのI Sが、斬れて、ラウラ自身が出てきた

『もう大丈夫だ。…ラウラ』

そうやって【プロト・I】はラウラをお姫様抱っこして、【Dエッグ】と【プロト・I】をしまった

「——ハイ、はっ。」

ラウラは目を覚ました。見知らぬ天白い天井をボーッと眺め、ラウラはその天井目掛けて手を伸ばしていた

「気づいたか」

千冬の声が聞こえてくる。外は既に夕暮れ時であれから3時間ほど経過していたのが分かる

「教官…」

「私は教官ではない、織斑先生だ。それと全身に無理な負担がかかったせいで筋肉疲労と打撲があるから無理に動くな」

ゆっくりと腕を戻したが痛覚が働いて多少の痛みがやってくる

「何が…起きたんですか？」

ラウラは、千冬に「VTS」（ヴァルキリー・トレース・システム）で操られていた
そのことを聞いてラウラは布団を握り締めていた

「ラウラ・ボーデヴィツヒ」

「は、はい」

「お前は誰だ？」

「私は？」

「誰でも無いなら丁度いい、お前はこれから、ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

そう言って千冬は椅子から立ち上がって去ろうとしたが

「?」

「それから、お前は私になれないぞ」

そう言って千冬は保健室から去った。1人になったラウラは、笑っていた

男の娘がオリジナル【LBX】を作るのは良いのか？

それから、創は、「プロト・I」と「ルキフェル」を「メンテナンス」していた。「プロト・I」は俺のんだから、やったが、デュノアの機体を壊して、デュノアは治せないらしく。仕方なく、「メンテナンス」をした

ちなみに、「LBX」本来の小さい姿で「メンテナンス」をした

「よし、これで良いか？。ほら、シャルル、治したぞ」

「プロト・I」と「ルキフェル」の「メンテナンス」を終了した。治すのが大変だったな

「ありがとう！。創！」

デュノアは、嬉しく「ルキフェル」を受け取って、「ルキフェル」を青い宝石に戻し、ブレスレットの窪みがある中に戻した

「そろそろ、寝るか。疲れたし」

「じゃあ、一緒に寝ても良い？」

「駄目に決まってるだろ」

「ええ、何で？」

「お前、だんだんと本音になってきてないか？」

「気のせいだよ？」

「とにかく寝る。ベットの中に入るなよ」

そう言っただけ創はベットのの中に入り、眠った

「入るなよつと言われても、どうしても入りたくなっちゃうんだよねー」

そう言っただけデユノアは、創のベットの中に入った

（フフツ、温かいね）

デユノアは創のベットの中で眠った

翌朝

「う……ん………？」

創は何か違和感があった、ベットの中に誰がいる

（……………まさか）

創は直さに布団の中をのぞいたら、デユノアが眠っていた

(何で寝てんだよ)

創は、そつと、ベットから降りて、ベットから脱出した

(今何時だ?)

創は時計を見たら、時刻は4時00分だった

(まだ学校に時間があるから、よし、アリーナに向かうか)

創はそう考え、着替えて、第1アリーナに向かった

(よし、此処で、【手持ちラボ】を使うか)

作者「説明しよう。手持ちラボは急いで作りたいために開発したラボである、家に帰れないため、家のラボを使えないため、手持ちバッグから出てくる道具なのだ」

創は「手持ちラボ」を出し、もちろん「プロト・I」を2体取出し、改造した

（よし！。これで良いだろ！）

創が開発していた機体は「イカロス・アルファ」と「イカロス・ベータ」を完成させた

この2機の特徴は、まずは「イカロス・アルファ」は、「イカロス・フォース」と同じ身体だが、背中の翼は、「イルミネットRF（ライフル）」の（半分）の形になっている。ちなみに、真つ二つの状態。ちなみに大きさは「フォース」の翼ぐらいの大きさ。頭は「プロト・I」の頭に右にゴーグルが付いている。

カラーは、青色。「イカロス・フォース」と同じような作品だが「イカロス・ゼロ」と同じカラーになっている

「イカロス・ベータ」は、「イカロス・ゼロ」と同じ身体だが、背中には「ガトリングショット」と同じガトリング砲が2個ある。色は「イカロス・ゼロ」と同じ、それから、尻尾は「ガトリングショット」と同じ尻尾が付いている。カラーは「イカロス・ゼロ」の色と同じになっている

(これで良いな)

創は、「オリジナルLBX」を完成した後時計を見たら

6時30分

(そろそろ食堂に向かうか、お腹が大きく減ったし、食べに行くか)

そう考え、創は食堂に向かった

男の娘が2人に【LBX】をあげるのは良いのか？

それから、創は、食堂を終え。教室に向かい、いつもの席に着いた

それから5分。嫌いな姉が顔を悪くして教室内に入ってきた

「み、皆さん、おはようございます……」

（何か、嫌な予感がする）

「今日は、ですね……みなさんに転校生を2人、紹介します」

嫌いな姉がそう言ったら、教室から女性が入ってきた。入ってきた生徒を見たら、此処のクラスがざわめき出した

（……………はっ？、良いのか？）

「シャルロット・デュノアです。皆さん。改めてよろしく申し上げます」

そう自己紹介をした後、生徒が急にぎわめき出した

「えっと、デュノアくんは、デュノアさん。と言うことでした」

「え？デュノア君って女？」

「おかしいと思った！美少年じゃなくて美少女だったわけね」

「つて、創くん。同室だから知らないってことは…」

大きくぎわめき出てきた。が、嫌いな姉が、『パチン！』っと手を叩き、まだ言わないといけない事があった

「えっと、もう一人の転校生を紹介します」

嫌いの姉がそう言ったら、教室に入ってきたのは

「クロエ!？」

そう、入ってきたのはクロエ・クロニクル。ラウラの姉だ

「お久しぶりです。創さん」

クロエはそう言って、お辞儀をして、自己紹介をした

「クロエ・クロニクルです。眼は見えないわけではありませんが、よろしくお願ひします。それから、創さんとの関係はあまり、話したくはありません」

ラウラそつくりの人がやって来て、クラスの女性達はビックリした。『創との関係がある。つまり付き合っている可能性が高い!』と言われたが千冬は『静かにしろ!』と怒鳴り、女性達を黙らせた

それから、ラウラにいきなりキスをされて、『お前はこれから私の嫁にする!』

「「「ええええええええええ!!」」」

と同然となる教室

(そりやそうだろ、男と女のキスは、誰でも驚くからな、……てかシャルロット怖!? しかも「ルシフェル」を出してるし!? しかもクロエ、ニヤニヤしているし!?)

色々シャルロットの説得が上手くいき、何とか怒りを抑えてくれた。助かった。

それから、授業が終わって、ラウラとクロエを誰にも見つからないアリーナに向かいクロエの事を話した

ラウラはこの人が自分の姉だと解り、涙が出てきた。ラウラ以外の同志は居て、そして生きていたから

「クロエ」

「はい、何でしょう？」

「これ、プレゼント。入学祝」

創はそう言つて「右に付ける眼帯を」クロエに渡した

「あの、私は両目が見せないんですが」

「これただの眼帯に見えるか？。この眼帯にIS（LBX）が入っている眼帯だよ」

その発言に2人は驚いた。この眼帯にISが入っているからだ

「なに!?! 本当なのか!?!」

「ああ、しかも、俺が今日開発していた機体だ」

「今日作ったのか!？」

「ああ、クロエなら使いこなせると思う」

そうやって創はクロエに眼帯をあげた

「あ、ありがとうございます。でもよろしいのですか？」

「構わないよ。でも、1つだけデメリットがある」

「何ですか？デメリットは」

「このIS（LBX）は1人で戦ったら、75%の本気しか出ないです」

「それは、どうしてですか？」

「このIS（LBX）は、もう1人、このISと似ているISが無ければ75%しか出てきません」

「それはどう言う事だ？」

ラウラが創の言っている訳がまだ分からないらしい

「じゃあ言うよ、このIS（LBX）は「イカロス」と同じシリーズだから。たとえばクロエは分かるよな？」

「【イカロス】……2人居なかつたら最大限の力を発揮する機体ですか？」

「ああ」

「ですがこのISを貰っても、2人ですから、1人渡しても、もう1人それと同じISが無ければ発揮できませんが？」

「答えは少し難しいですが、この事を言えば、簡単だと思いますよ」

「どんな事ですか？」

「ラウラ」

「は、はい」

「ラウラは、クリスマスプレゼントの意味を知っていますか？」

「クリスマスか……まさか」

「早いなあ、軍人だからか？。はいこれクリスマスプレゼント」

創はそう言ってラウラに左に付ける眼帯を渡した

「良いのか!？」

「かまわないよ。それに、『イカロス』つと違って、ラウラには分からないから、この事だけを言ったら、分かると思うよ。『イカロス』は実は、『プロト・I』を改造して完成した機体なんだ」

「なに?!、つまり『プロト・I』と似ているISを私にくれるのか?!」

「ああ、そもそも、ラウラがこの学園に入ってきて来て『プロト・I』をあげようと思っていたんだ。ラウラが自己紹介を言った時にな」

「そうなのか?!」

「ああ、でもこのIS(LBX)を受け取ったら、大切な物が失う。それでも良いならな」
創がそう言ったら、ラウラは迷った。これを受け取ったら私は強くなれる。だが、大切な物が失うからだ

「創！。本気ですか!？」

後ろから、クロエの声が聞こえた。言いたい事は分かる。妹に何かが失うからだ
「安心しろ。俺は、失う物はなんなのか分かる」

「それはなんだ!？」

ラウラはその事に驚いて、創に言った

「それはだな、ラウラの仲間だよ」

「仲間?」

ラウラは、その事にあまり分からなかったようだ

「ラウラには軍隊の仲間がいるだろ?それを捨て、俺たちと共に来いっと言う事だ」

その発言にラウラは大きく迷った。これを受け取った瞬間、仲間が失い創の所に来
いっと言う事だ

「創さん！」

「分かっているが、仕方がない。分かるか？、この事がばれたら、調べられるんだぞ。俺
にとつて最高の仲間を調べられるんだぞ。それで、俺の大切な機体達を兵器の為に作ら
れて、戦争のように戦う。そんなことになって欲しくは無いんだよ。だから前の仲間を
切らなくてはいけない。さあ！、どうする？失うか？失いたくないか？お前の選択は
どっちだ！。ラウラ・ボーデヴィツヒ!!」

ラウラは迷った、仲間を失うか、失いたくは無いか。の2つが心が痛かった

「創さん！」

「クロエ、どうした？」

「どうしたじゃありません！」

「気持ちには分かる。でもばれたくは、無いんだ」

「創さん」

「ばれたく無い、だけが」

だけがの言葉を言っつて創は笑った

「え？」

ラウラは考えた。「ばれたく無い、だけが」の事を考えた

(確かに、話されたら、調べられて作られる。だけが、……!? そうか!!)

「ああ、受け取ろう」

「ラウラ!？」

「はいどうぞ」

創がそう言つて左に付ける眼帯をラウラにあげた

「良いの!？。仲間が失う事になるのよ!？」

「それが、ばれたらの話だろう?」

「当たり前だ」

「え?どういう意味?」

クロエは解っていないなかつたようだ

「つまり、ばれなかったらの話だから、別に今すぐに切れ、つと言う話じゃない」

クロエはそのことに気づき、かなり怒っていた。つまりからかいだったと言うことだったからだ

それから、2人にI S (L B X)を教え、戦い方も教えて、「高次元多関節機構」も説明させた。ラウラはかなり驚いていたらしい。クロエは右目だけラウラと同じ赤に戻したらしい、つまりまあ、分らないが、兵器の部分の左目だけ、消えたんだ。「イカロス」のおかげでな。それから「Dエッグ」も渡した。2個渡した

男の娘が臨空学校に向かって、大変なことになるのは良いのか？

あれから月日が流れ、臨海学校の日になった。女子達は色んな水着を着て、楽しんでいる。だが、創は

「はあ」

創は落ち込んでいた

「ほら、元気出して、それじゃあ、楽しく無いよ？」

「いや、だからさ、いくらなんでもこれは無いだろ」

創が言っているのは来ている水着は

「創さん、似合っていますよ」

「創、どうした？」

「いや、おかしいだろ!!」

創が着ていた水着は……女子の!?

作者「創———!!!???

「仕方ないよ。創の顔や体が女子みたいだから、女子の水着で泳いでね」

「だったら、俺は反対だ。泳ぐがない」

「そう言わないで、泳ごうよ」

デユノアは創の手を繋ぎ海に向かった。……クラスの女子は

「嘘!? あれ創君!？」

「物凄く可愛い!!」

(……地獄だ)

それから、創は海に入って泳いだら、一大事が起こった

「あれ? この水着は?」

ラウラは、誰なのか分からない水着を持っていた

(何だろう? 何処かで見たことが、あるんだが、……まさか!?)

ラウラは後ろに振り向いたその光景に思わず息を飲んでしまった。何故？それは

「ふえ……？」

後ろに上半身裸の少し赤くした創が居た

「ブハアアアアア!!」

バシヤアアアン！

(ぐ……がはあ……な……何と言う事だ！。これが……男の娘の本気の力なのか？深刻なダメージを負ってしまった……)

すると

「「「創君！早く前を腕で隠しなさい！」「」」」

「え…？俺は男…」

「『早く!!』」

創は何か言おうとしたが、クラス皆に圧倒されて言えなくなったみたいだ

(わ、私はまだ…終わってない！創の姿を目に焼き付けるのだ!!)

「はあああああああ！」

ザバアアン！

ラウラは勢いよく水中から上がると、待っていたのは

「うう…俺は男なのに…」

「『『ブハアアアアアアア!!』』」

すると、創と千冬以外は、噴水の鼻血を噴水のようにして倒れた

「お前は、此処まで強いのか？」

千冬だけは大丈夫だったらしい

「うん。転生の事知っているよね。？これも、別のアニメのネタなんですよ」

「いくらなんでも、無茶苦茶だ」

「ですよ。さて、片づけますか。手伝えますか？」

「仕方がないだろう。これだけ気絶させたんだ。助けてやろう」

そう言って創と千冬は、海の片づけを行った（生徒を助けた）

それからの時間が続き、皆は元気になった。何か創を小説に書こうとしていた。さっきの出来事を

それから、旅館のご馳走を頂き、そろそろ寝ようとしていたが

「創」

千冬から、声をかけられた

「何でしょうか？」

「あの時は、すまなかつた」

その一言で創の表情が変わった

「だから、謝っても意味が無いですよ」

「だが」

「何かあんのか？」

創の殺気が千冬が大きくビクつた

「織斑先生。貴方は俺の怒りをあげてくるのですか？」

「!? 違う！」

「だったら、話しかけないでください。それじゃあ、もう寝ますので」

創はそう言って、もうすぐぐさに寝た

(私は、謝りも此処まで怖いのか：7年間1人の寂しさと怒りが見えてくるな)

千冬はそう考え、眠った

男の娘が天災に会っても良いか？

翌朝

創たちは外に出ていた。創とクロエとデユノアとラウラは、ISスーツを着ていない

「よし！、専用機持ちは全員揃ったな」

「ちよつと待ってください。箒は専用機を持ってないでしょう。それに、ラウラとクロエとはISスーツを着ていませんが？」

「そ、それは…」

「箒の説明は織斑先生に任せます。ラウラとクロエは、俺の作った最新IS（LBX）を持つているため、ラウラのISをは1回外していることにしている」

「つ、作ったって？」

「話は終わりです。先生。答えてくれますか？」

「ああ、実はだな」

「ち~~~~い~~~~ちや~~~~ん!!!」

その声を聞いたとき、創と箒と千冬とデユノアとクロエは困った顔をしてい

「創、まさかだと思うけど」

「ああ、東だ」

「相変わらずです」

そして崖から降りて来た東は千冬に抱きつこうとするが

「さあ！ちいちゃん！一緒に愛の鼓動を感じよ！」

「やかましいぞ、束！」

とがつつりアイアンクローをくらされる千冬

束が千冬から離れ一旦創と目が合うと顔を赤らめ創を見つめていた。そして束が今回何故みんなの前に現れたのか？その理由は創にも分かっている

（どうして、来ているのかは、分かっているが、空からISを落としてくるのは解つていたが、これは怖い！）

「じゃじゃん!!これが箒ちゃんの専用機！その名も、紅椿だよ！」

箒の専用機その名も紅椿。世代は第4世代と来た、箒は力を手にした事で凄く喜んでいるようだ

(確か、ここからが、最大のあれか、……よし、やるか)

「織斑先生！大変です！」

「どうした山田先生！」

嫌いな姉が来て、千冬と話している

「専用機持ちはこれより直ちに訓練を中止し、現時刻より特別任務行動に移るぞ！」

それから、作戦室に集まり、現状を聞いた

(俺が相手になってやろう。俺のプライド、そして俺の魂。その相棒で蹴散らしてやろう。最強とも呼ばれ、伝説の破壊者でな)

「織斑先生」

「何だ？創？」

「そのI Sは俺に任せてください」

「何を言っている？。お前だけじゃあ」

「何を？せっかく俺の最強のI S（L B X）で倒そうと思っているのに」

「最強。……【K・アーサー】か？」

千冬がそう言ったら、デュノア以外はなんだろう？と思っていた

「残念。今度こそは、本気でもあり。極、の機体（L B X）を使ってそのI Sを壊しまし
よ」

「なんだと!?!。【K・アーサー】でも無い最強の機体（L B X）だと!?!」

「織斑先生、何を驚いているのですか？」

「え…」

千冬は創に顔を向けた。創は「うん」と頷き言っても良いつと合図を出した

千冬はデユノアと創の戦いの事を話した。まだ信用しないから録画で取った動画を見せた

「なにこれ!?滅茶苦茶強すぎるわよ!？」

「【ジライヤ】でもかなりの性能がありましたのに!？」

「あれで本気だと思っていたが、まさか此処までの本気があったとは!？」

「綺麗なISでしたわ」

「うむ。なるほど」

「やっぱり凄いですね」

「恥ずかしい」

鈴、箒、嫌いな姉は驚き

セシリアは目が光っている

ラウラ、クロエはなるほどと言い

デユノアは、恥ずかしそうな顔をしていた

「これ程の機体を使ってもまだ手加減だったとは、…一体お前の本気は何なんだ!？」

「この戦いだけは、俺の魂でもある最強の機体を使う。この話は本当のだ」

「……分かった。創1人でやってくれ」

「織斑先生良いのですか!?!」

「ああ、あいつが言っているなら、言っている」

「ありがとうございます。織斑先生。それと、そこに隠れてないで出てこいよ」

創がそう言つて天井に向かって言ったら、束が出てきた

「やつぱりばれてたかく、さすが、はつくん。私があそこに隠れていたことを分かったね!」

束はゆさゆさ揺らして言っていた

「どうせ居ると思ったからな」

「やっぱり、創は凄いなええ！」

またゆさゆさしてきた

「ねえねえ！、私にもIS（LBX）を作って！」

その一言で此処にいる創とクロエとデユノアはビックリはしなかったがそれ以外はビックリした

「……」

創は怒ったような顔をしていた。他の皆はかなり怖がっていた

「お願いします!!」

東は頭を下げて言っているが、創の怒っていた顔は解かれなかった

「た、東さん!!、流石に誤った方「なに皆怖がつている顔をしているんだ?」が?」

『へ?』

「あれは怒っている顔じゃないの!?!」

「何言ってるんだ?。考えていたんだよ。設計図を」

その言葉を聞いた皆は「ほっ」っとしたらしい、だが、何か忘れている

「ん? 待てよ。今設計図と言ったな?」

「そうだけど? どうかしたの?」

「東のISを作るのか!?!」

「「ええええええええええ!!」」

「驚くところか？」

「当たり前だろ!。束にISを渡して、良いのか!？」

「さあな、もし暴走したら、最強の機体（LBX）でISを粉々にしてやろう」

創の狂った微笑みを見たら、皆は怖くなった

「どうする?裏切る?。裏切ったら、嫌じゃなく。むしろ良いよ。昔みたいにひき肉に出来るからね」

さらに狂った笑顔をしたら、皆「ゾ」つとした

「い、嫌だなく、裏切る気は全くないよ。それに、ひき肉にはなりたくないし」

「それは、残念」

「織斑先生、時間はいつでも良いでしょうか？」

「あ、ああ、良いぞ。いつでも良いぞ」

「それじゃあ、向かいますよ」

そう言って作戦室を出た

男の娘が最高の相棒で無人機に向かうのは良いのか？

「LBXセレクト、オーレギオン」

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この「LBX オーレギオン」でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした

そしたら、眩しい光が、創の身体を包み込んだ

眩しい光が消えたら、左右の肩にミサイルが積み込まれていて、体に穴が開いているボディー、背中に大きすぎる翼。をした、「オーレギオン」の姿が居た

作戦室では

「あれが、井上のISか!？」

「見ているだけで、此処まで凄いISは見たことがありません!？」

「はっくん、今日だけは容赦ないなあ」

「作戦室にいるのに、怯えている!？」

「創、此処まで凄い機体があっただなんて」

「見ているだけでも、圧倒的ですわ!？」

「創!、嫁でもある私に、この機体を持っていたのはどういことだ!？」

「此処まで凄いＩＳを作っていたなんて!？」

「創は凄いと思っていただけ、それ以上だなんて!？」

「そんなに凄いＩＳなのかな？」

千冬、姉、東、箒、デュノア、セシリア、ラウラ、クロエ、鈴の順番で驚いたが、
夏だけは、分からなかった

「織斑!このＩＳを見ても、分からないのか!？」

「千冬姉!。ま、まあ、凄いけど、戦って見て見ないと分からないしな」

『一夏!!』

「創!？」

【オーレギオン】はスクリーンに映っていた

『あのISをぶつ壊したら、次はお前だ！覚悟しろ!!』

そう言つて、スクリーンに映っている【オーレギオン】の姿が切れた

【オーレギオン】では

「何だよ!!。この機体のカツコ良さに、相棒の力も知らない奴に、「そんなに凄いISなのか?」ふざけんなよ!!」

「もういい、行くぞ!!、【オーレギオン】!!」

創は飛行携帯になって、無人機に向かった

(もうそろそろなんだがなあ、……お?あれか?)

【オーレギオン】は白いISがある。無人機に向かって着いた

【オーレギオン】は、目の前に無人機の後ろに居た

(これがあの無人機か、綺麗なのに壊さなきゃいけないのは、悲し過ぎる。だが、奪えばいい。だが)

(此処から、攻撃は反則だよな、よし、ハンデをくれてやろう)

【オーレギオン】はそう考え、ISの後ろから、前に追い越して、飛行携帯から、普通の【オーレギオン】の姿になった

『こんにちは。一戦、どうですか？』

創はそう言い、無人機に話しかけたが、いきなり打ってきた

『はいとか、返事は無いのですか？。だが、打ってきたなら、相手になっても良いってこ

とだな、楽しみだぜ』

【オーレギオン】はそう言い、最新レギオン装備を出した

先ず出したのは、【レギオンブレード】

【レギオンランス】の槍の部分を剣にした剣

作者「…………え、？それだけ？」

【オーレギオン】は【レギオンブレード】を出した

「さあ、何処からでもかかって来い!!」

男の娘が無人機をオーバーキルをしても良いのか？

【ナイトモード】

その電子音が鳴ったら、体が金色になった

無人機が打ってきた弾を全て跳ね返し、無人機に当たった

『次！』

【ストライクモード】

その電子音が鳴ったら、金から青に変わった

物凄い早いスピードで無人機に近づき攻撃した。海に落ちていく無人機だが、【オー

レギオン」は容赦なく、海の近くまで近づいて、無人機を空に吹っ飛ばしたこれを6回続いた

【バーニングモード】

その電子音が鳴ったら、青から赤に変わった

そして、【レギオンブレード】のもう一つの能力を発動した

【レギオン・ソード！】

その電子音が鳴ったら、【レギオンブレード】から、【レギオンソード】に変わった。ちなみに【レギオンソード】はカラーは黄色の【レイピア】です

【オーレギオン】は【レギオンソード】素早い突きで、無人機に突きまくった

無人機は、もう、ボロボロに壊れかけていた。その時に【オーレギオン】の【バーニ

ングモード」は切れた

『これで、デリートだ』

【オーレギオン】は、一旦離れた

【アタックファンクション ステインガーマイスイル】

その電子音が鳴ったら、【オーレギオン】の胴体に付いているミスイルを放ち、無人機に向けて放った

無人機は、回避する力が無かった。無人機は【オーレギオン】の【ステインガーマイスイル】を全てくらい、墜落して行った

『様子を見て見るか』

【オーレギオン】は、墜落した無人機を見て見た。無人機はもう立っていない状態だったが

無人機が起き上がり、白い翼が、出てきた

『第2ラウンドか』

無人機はさっきのスピードより速くなり、「オーレギオン」に向けて、打ってきた

『甘いよ』

【ナイトモード】

その電子音が鳴ったら、「オーレギオン」の身体が黄金なった

無人機が打ってきた弾を全て跳ね返し、無人機に当たり、バランスを崩した

【ストライクモード】

その電子音が鳴ったら、黄金から、青に変わった

そして、物凄いスピードで、無人機に攻撃をして、「レギオンソード」で突いた

当たった部分が、何やら、弱点だったらしく、落下した

『落下して、壊れるってのは、俺には、つまらない。だから』

【アタックファンクション ステインガー・ビット・W】

その電子音が鳴った後、「オーレギオン」は考えた

（ん？【ステインガー・ビット・W】？何それ？。まあ、やってみるか）

【オーレギオン】は、聞いたことが無い【必殺ファンクション】の説明を読んだ

（えっと、？まずは、「ステインガーマシール」を放つてから、「ソードビット」を打つだ

け？って【ソードビット】は何処にあるんだよ!?……なにになに？【ステインガーマイスール】のミサイル部分をパカッと開けたら、出て来るよ。か…難しい?やってみるか)

(えつと?まずは、パカ)

ミサイルの部分がパカッと開けた。開けた中に緑の剣が入っていた(【ソードビット】)

(発射!)

【ソードビット】から、出てきて、次にミサイルを元の場所にしまったら、ミサイルも放った

無人機は、何とか、そのミサイルとビットをかわそうとしたが、すべて当たってしまった、落下した

目の前に居る無人機は、ボロボロで、左腕と右足が無くなっていた

【オーレギオン】は綺麗に着地た

『これで、最後だ!!。必殺ファンクション!!』

【アタックファンクション レギオン・ストライク・キャノン】

その電子音が鳴ってまじは、

【ジェットストライカー】

オーレギオンは、飛行携帯になり、無人機に体当たりをして、空に飛ばした

そこから、飛行携帯を止めて

【ステインガーマイスイル】

その電子音が鳴ったら、ミサイルを発射し、無人機を背中に集中攻撃をして、また空に吹っ飛んだ

【ソードビット】

パカッと開けて、「ソードビット」が出てきて、「ソードビット」は、もっと高くまで行って、そこから、急降下して、無人機を串刺しにして、落下した

落下しても無人機は、まだ動けるのだが、「ソードビット」のせいで、身体が動かなかつた

【オーレギオン】は、着陸して、止めを刺した

【我王砲（ガオウキャノン）】

その電子音が鳴ったら、身体を中心部分の胴体に、エネルギーをチャージし、それを無人機に放った

大きいレーザーが無人機を飲み込んだ

「ドツカカカカカーーーーン!!!」

大きな爆発音が鳴って、黒い煙が出てきた。……その煙が無くなると

無人機がバラバラになっていた

「……………弱」

男の娘がI Sのコアを欲しがっても良いのか？

『こっちは片付けた。……皆どうした？口を大きく開けて？』

「「「「「お前が（貴方が）（貴様が）（はっくんが）（創が）（創さんが）言うか！（言いますか！）（言う訳ないだろ！）（言うのかな！）」「「「「「

た 千冬、嫌いな姉、ラウラ、東、デュノア、クロエ、一夏、鈴、セシリアは、怒っていた

『どうした？。無人機を破壊したぞ？』

「いや、やり過ぎだ!!。あれが創の本気か!？」

『そうだけど』

「無茶苦茶だな!？」

『無茶苦茶が、この機体の魅力なんだ。この【オーレギオン】に』

「その機体の名が、【オーレギオン】？」

『ああ、この機体は、3体の胴体をつににした、機体。だから【レギオン】と言う名がある』

「【レギオン】。∴ローマ軍隊と似ている名か？」

『ああそれと、このI Sどうする？。完璧に壊してしまったけど』

【オーレギオン】はそう言い無人機を見た

「壊れているなら、廃棄処分になる」

『だったら、このIS貰っても良いかな?』

「……何だと!？」

千冬は驚いた。「オーレギオン」が、ISを欲しがっていたから

「……どうしてそのISが欲しいのだ?」

『つまらない答えですが、可哀想だと思っただけですよ』

「なに?」

『このISは、もし、コアが無事なら、回収されるが、コアは暴走したから、仕方なく処置になるのかもしれない。だから俺は、このISを処置されたくはないんだよ貰って助けていんだよ』

「!?。1人じゃないのか?」

『何を言ってるの?。俺の大切な仲間が居るよ。此処に』

【オーレギオン】は全ての【LBX】を見せた

「これ、全部IS!?!」

「嘘!?!ハツタリじゃあ無かったの!?!」

「こんなに作っていたなんて」

「こんなにか!?!」

デュノア、東、千冬、クロエ、は解っていて、黙っていた

「井上……」

『だから、俺は1人じゃない』

「違う！。それは紛れもなく幻想だ！」

『家族の弟が居る先生に、俺の気持ちなんて、分からないはずだよ？。それより、答えは？。』

「答えだと？」

『コアは貰って行っても良い答え。良いのですか？良くないのですか？』

千冬は黙った。その答えを考えないといけない。だが

「……分かった。コアは何とかする」

「織斑先生！。何を言っているのですか！I Sのコアを生徒にあげる許可を出すなんて

「!？」

「…いや、井上の言う事も分かる」

『なら、良いんですね？』

「ああ、だが、交渉になるのかもしれないぞ！」

『大丈夫ですよ。コアは貰いますから』

夏休み編と 新、第1章 異世界宇宙編

男の娘がありえない事になっても良いのか?・・・これは
駄目だろ!?

それから、数日が経った。(夏休みまで)

金で何とか、買った。ざつと50兆円を支払った

作者「ん?~~~~50兆円~~~~」

!!!!????

創「普通驚くか?」

作者「本当の世界だったら、高すぎるだろ!!!」

創「しらんなあ」

作者「おい！」

創「しばらく無視で」

作者「おい！」

作者の事は無視して、創は今すぐにコアを家に持って帰って、ISを新しくしようと作っていたら、それは…

「ISはこれで完成したな。後は、しまっただけだな」

創が無人機のコアを使い、新しいISを作った

だが

此処から

大変な事になるのは

創は

分かっ
ていな
かつた

何故
なら

「初め
まして
!!お父
さん!!」

子共だ
:

子共?
?

作者「子供
——
——
——
——
!!!!???

何と言う事でしょう!!創に子供が出来ました!?

前

創達は夏休みになって、実家に帰っていた。ラウラも連れて

「此処が、創の家なのか?」

「ああ、此処が俺の家だから、上がってと。此処に住んでも良いぞ」

「良いのか!?!」

「何を言ってるの?。もう家族だろ?」

「あ、ああそうだったな…なら、改めてよろしく」

「ああ、よろしくな。ラウラ」

「ああ!」／／／

それから、時間が経ち、家族皆で食事をし、食事をし終えたら、創は「何とか取引してくれたコアでISを作るよ」と言っ、自分のラボに向かった

「ラボ」

「あと少しで、ISは完成するか」

（創はもうすぐで、新型の「銀の福音」が完成するな、…少し一休みをするか）

創は自分の個室に入って休憩をした

30分

(もうそろそろ良いだろ)

創は、休憩をやめて、ラボに入る扉を開けたら

「こんにちは！、お父さん！」

創は直さに、ラボの扉を閉めた

(なに!?!何で子供が此処にいるの!?!しかもお父さんって言ったか!?)

創は、恐る恐るまた扉を開けたら

「お父さんどうしたの?」

創は直さに、扉をまた閉めた

(待て待て待て待て待て待て待て待て!!。何で子供が居るの!?!何で!?!しかもまたお父さん!?!って言った!?)

創はまた恐る恐る。またラボの扉を開けようとしたが

「はつくん。どうしたの?」

「!?!」

創は直さに声を聞こえた方に顔を向けると

(何で最悪のあいつが居るんだよ——!!!)

東が居た

「はつくんどうしたの?。何でラボに入らないの?」

「ら、ラボのメンテあるから、入れないんだ。あつはははははは!!!」

「ふーん。じゃあ、何でさっきの子は誰なの？」

急に声が低くなった

「(怖!?) な、何の話かな？」

「見ていたよ。「こんにちは、お父さん」って」

「あ」

「説明してもらえる？」

「いや、俺にもよく分からないんだ」

373 男の娘がありえない事になっても良いのか?・・・これは駄目だろ!?

「説明してもらえん?」

「は、はい」

男の娘がコアで何をしようとしていたのかを東に話しても良いのか？

創は、東に全てを話した

「信じがたいけど。居るんだよね？」

「開けるか」

創はそう言つて、扉を開けたら

「お父さん、何かあったの？それにどうしてお母さんが居るの？」

創は、また扉を閉めた

「……………」

「お母さん——
!!!??」

なんと、子供は束の事をお母さんと言ったらしい

作者「え!?! 似合わねえ」

「どうしよう!?! 束さんに子供が出来てしまった——
!!!?」

「落ち着け束!」

「でもでも!?!」

「良いから!」

それから、創と束は一回落ち着いて、また扉を開けて、子供に説明をした

「君は、誰なの？。それと、どうして此処にいるの？」

「私は、お父さんに助けってもらって、お父さんが、私を作ってくれたんだよ。分からない？お父さん」

「うん。分からない」

「ええー!?!。お父さん言っていたよ。「もうすぐ完成する」って」

「「完成する？」……あーなるほどそう言う事か」

「え!?!はつくん、分かったの!?!」

「この子共は、俺が作っていた新型のI Sだ」

「ええええええええええー！！！！」

「五月蠅いが、説明できるかな？君の名前は？」

「私の名前は、井上命だよ！」

「うん。本当に井上だから、俺の子供か」

「ちよつとちよつと!?まだ納得が出来ないよ！」

「最初は納得がいかないさ、だからこそ、信じなきやいけないんだ」

「いや、そう簡単に信じちやあ駄目でしょ!？」

「とにかく、聞くか。君はどうして人間の姿になっているんだ？」

「ん？アマテラスさんに人間になるって言うてくれたんだよ、お父さん！」

「アマテラス!?!」

「はっくんそれって!」

「ああ、俺をこの世界に入れた神様だ。でも何で?」

「アマテラスさんが言っていたよ。お父さんは私を、ISにしてくれたり、家族のためにアンドロイドを作ろうとしたの」

「アンドロイド!?!」

東は直さに創の方に向いた

「ああ、俺が、コアを欲しかったのは、商売でもなく、家族をもう一人作ろうとしていたんだ。あと一步で完成するんだったが、少し休憩を入れてな。戻ってきたら、…子供が居たんだ」

「なるほどね。道理でコアが欲しいわけだったんだね」

「あっははははははは！」

創は自分のやっている事に大爆笑していた

「でも、どうして？」

子供の発言で笑いが止まってしまった

「……似ていたから」

「え？」

「お前が俺に、似ていたからだ」

「もしかして」

「他人の考えで、人は消えて、壊してしまう。昔の俺と同じの結果になっていたと思う。いや、それ以上な結果になっていただろう」

「お父さん……」

「話は終わりだ。…怖いが、話に行くか」

「誰に話すの？」

「もちろん。…怖いが、言わなきゃいけない…よな？」

創はそう言つて束を見た

「やっぱり言わなきゃダメだよ」

381 男の娘がコアで何をしようとしていたのかを束に話しても良いのか？

「だよなー」

創は子供を連れてリビングに向かった

男の娘が子供を紹介して、旅行の行先を言うのは良いのか？

創「なあ、デユノア」

シャルロット「此処ではシャルロットって言つて」

創「分かったシャルロット。ちよつと大事な話があるんだ」

シャルロット「大事な話？」

創「皆リビングに集まったら、話すから」

シャルロット「分かった。皆に話すよ」

創「ありがとう。シャルロット」

それから、皆がリビングに集まった所で話さないといけない話を話した

創「皆、話したい事は、2つある」

クロエ「2つですか？」

創「皆に合わせないといけない人が居るんだ」

シャルロット「合わせたい人？」

創「ああ、見せたら直にビックリすると思うが、その…ちよつと待ってて」

創は部屋から命を連れてきた

創「皆に紹介していなかったけど。…新しい家族が出来たんだ」

そう言つて創は命を家族に見せた

束と創と命以外は時を止まつた

先ずはデユノアから

シャルロット「創、…どうしたの？。誰にも言わずに束さんともしかして…」

創「違う！。それに、この子は、…まあ、ISだ」

シャルロット「IS!？」

ラウラ「それが!？」

クロエ「それがですか!？」

母「あらあら♪」

創が言った事に家族は大きく驚いた。子供の人間に、似ているが、実はISだったのだ

だが何故母はニヤニヤしている？そう言う関係じゃないからな

命「井上名です。改めてよろしくお願ひします」

シャルロットの母「よろしくね、命ちゃん」

シャルロット「よろしくね、命さん」

ラウラ「よろしくな、命」

クロエ「よろしくお願ひします。命さん」

命「はい。よろしくお願ひします！」

創と東以外の家族は命を可愛がっていた

50分

命「はあ、かなり疲れました」

創「お疲れ、命」

命は身体が疲れ、創の膝の上に頭を置いて横になっていた。そう、ひ膝枕だ

シャルロット「それと、もう一つは？」

創「実は…メンド臭いが、頼みたい事があつてな」

シャルロット「頼みたい事？」

創「実はな…」

創が家族の皆に話さないといけない事を話した

シャルロット「えつと…つまり…？」

創「つまり、旅行だ」

シャルロット「何処に行くの？」

創「…平和じゃない生活ですが、誰か行きますか？。最大7人まで行けるが？」

創と命以外の家族「「「全員行け（れる）（る）ますじゃん!!」「」」

創以外はツツコンだ

創「だが、場所はかなりメンド臭いが、我慢出来る？」

男の娘が異世界のステージを教え、束に【LBX】をあげるのは良いのか？

シャルロット「創、異世界って!？」

創「ああ、この世界と同じ、アニメの世界に向かうんだ。皆な」

ラウラ「しかし、良いのか？」

創「神様が言うなら、良いだろ」

ラウラ「本当にか？」

創「それに、異世界じゃ大変困る事があるんだ、その調整を行う」

創「アマテラスは、優しいが、本当はつまらない顔をしているから、行くしかないだろ。それに、それ以上のように機体をパワーアップするから、直さにラボに向かってくれ」

シャルロットの母「私は、ISを持っていないのですが？」

創「戦わせるわけにはいかない」

シャルロットの母「じゃあ、お留守番？」

創「いや、船で働いてほしい」

シャルロットの母「船？」

創「ああ、まだ完成していないが、宇宙船を作っている」

東「凄い！東さんの手伝い無しで作っていたの!？」

創「まだ完成していないと言ったはずだ」

シャルロット「それにしても、創」

創「なに？」

シャルロット「よく、命さんがよく驚かないのね」

創「まあ、アマテラスに作られた後、教えられたんだよ」

シャルロット「本当に？」

創「だったら、聞いてみる。命」

命「はい。何ですか？お父さん」

創「シャルロットが、命が旅行先を知っているのかが分からないって言うてるんだ
教えてくれないかな？」

命「はい、解りました。シャルロットさん」

シャルロット「な、何かな？」

命「アマテラスさんに教えられましたから」

シャルロット「そ、そうなんだ」

創「それと東、お前の【LBX】が完成した」

東「え!?!。本当!!」

創「ああ、ラボに来てほしい。そこで【LBX】のテストを行ってもらおう」

東「分かった！」

創「それと、皆持っている機体を改良するから、ラボに来てほしい。出来るか？」

「大丈夫（行けるよ）（問題ない）だよ（です）」

創「良かった。なら早速ラボに来てほしい」

創は、皆を連れて、ラボに向かった

「ラボ」

創「東、これが、お前の機体だ。…ちよつと不気味だが、我慢してくれ。

東「え？」

創「あれだ」

創が空に指を指した。指を指した場所は、黒い機体で、少し緑の線があつて、目が赤い機体が居た

束「あれは？」

束は黒い機体に指を指した

創「あれは、あく、お前の機体だ」

束「あれが？」

創「完成が出来なかつたから、代わりに【ベクター】を作つたんだ。こいつは、【ゴーストジャック】の【機関端末】の機体だ」

束「【ゴーストジャック】？」

創 「つまり、ハックが出来る機体だ」

東 「でも、普通にハックが出来るつと言えば良いのに」

創 「確かにこいつは、ハックが出来るが、ただのハックじゃない」

東 「どう言う意味？」

創 「例えで言うが、普通のハックは、ただ乗っ取ってコントロールするみたいなものだ。それでハックを止めることだって出来る。だが「ゴーストジャック」は、乗っ取って、完璧に制御を完全に奪う。そして、乗っ取られた者は、決して、ゆうことが効かない。つまり、完全に乗っ取る事が出来る」

東 「!!？」

創 「つまり、誰にも止めることが出来ないハック」

束「それは、凄い機体を作ったね」

束は創が作った機体にもう、大声をあげないくらいに、ビックリしていた

創「束は世界1の技術でISを作ったんだよね」

束「え、…うん」

創「だからさ、ハックするぐらい簡単だろ？」

束は創が聞いたその言葉に思わず笑ってしまった

束「あはははははは！、確かにね」

創「ちなみに、ハックのやり方は、ただ手でコンピューターを触るだけだ。それに、異世界の機体は、コントロールを奪って操り人形に出来るだろ？」

東 「本当に、はつくんは怖いなー」

創 「7年間の恨みで狂った脳が良いのかもな」

東 「それを言っちゃ、此処にいる家族は、意味ないじゃん」

創 「だな。よし、この機体で良いな」

東 「うん！」

創 「だったら、『カスタマイズ』を行う。やり方は、分かっているよな？」

東 「うんバッチリ！」

創 「じゃあ、『カスタマイズ』を開始する！」

束
「了解！」

男の娘が異世界に行つて、戦闘準備を行う前になるのは
良いのか？

創「皆、準備は良いな？」

創以外「……」「良い（よー）（ぞ）ですよ」「……」

創「じゃあ、急いで乗つてね」

束「はつくん！これつて！」

創「ああ、皆を乗せて、戦いの戦力にもなる船。「エクリプス」だ」

束「凄いよ！こんなに大きくて！」

創「それだけじゃない、この機体は、誰にも察知出来ない【インビジブル】機能も積んでいる」

束「それって！」

創「ああ、透明だ」

束「最高の乗り物だね！」

創「ああ、じゃあ、行くか。皆荷物は十分か？」

「「「「「良い(ぞ)(よ)(ですよ)(ええ)(よ!)(「「「「「

創「じゃあ、行くぞ！」

創たちは、【エクリップス】に乗った

創「東。乗っても仕事があるぞ」

東「何なの？」

創「実は、操縦はお前が操縦者なんだよ」

東「えっ!？」

創「操縦者はお前だ。だから操作してね。じゃないと」

東「じ、じゃないと…」

創「お留守番」

東「えっ!?!。分かったよ！、東さんにお任せあれ！」

東はテキパキ「エクリップス」を動かしていた

創「じゃ俺は、操縦者の人に教えておかないといけない。皆は部屋に向かってくれ」

シャルロット「部屋ですか？」

創「ああ、コックピットの外に地図があるから、それを見て覚えてから、部屋に戻ってくれ」

それから、時間が流た

東「そろそろ着くよ！」

もうすぐ、異世界のゲートが見えた。「エクリップス」はそのゲートを突破して、異世界にやってきた

創「よし！、付いたな。これから、説明をしないといけない部分があるから、それを説明する」

創以外「「「はい！（は〜い！）（はーい！）（分かりました！）「「「」

創はこの異世界の事を説明した

シャルロット「なるほど。つまり、死ぬ人を助け、敵を一掃する」

創「やっぱりわかっているなあ、確かに、俺が言っている説明は当たっている。でもやっぱり、異世界の物語に入ったんだ。物語をぶっ壊して、本当のエンディングを楽しむまないとな」

シャルロット「そうですね」

創「話は終わりだ。実はこの異世界にやって来て、敵の反応がキャッチした。お母さ

んと、命は、お留守番だな」

命「え〜」

シャルロットの母「仕方ないわよ。おばさんと一緒にお留守番ね」

創「お母さん、そんな事を言っではいけません」

シャルロットの母「良いじゃない。だって、創の子供なのよ。おばさんと言って悪いの？」

創「別にいいけど。∴お母さんはまだまだ若いのに」

シャルロットの母「フフフっ、ありがとう」

創「話は遅れたが、迎撃を開始する。準備をお願いしますね」

母と命以外 「」了解！「」

男の娘が【キング】の姿になって、軍隊みたいに指令をするのは良いのか？

「LBXセレクト、【LBX K・アーサー】

そうやってスマホのコマンドを押して

最後に

この【LBX K・アーサー】でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押した

そしたら、いきなりスマホから黄金の光が出て、創を包み込んだ

そして、その光が無くなったら、目の前には王冠を被って、背中は黄金の翼に少し青い部分もある。さらに翼にブースターが4つも付いている。【キング】が現れた

【アーサー】『皆、指令は俺で良いか？。それと、少し怖い所か、調子に乗ったような言葉を言っても良いか？』

【ルシフェル】『良いよ。むしろなつてほしかったし』

【アルファ】『大丈夫ですよ』

【ベータ】『【アーサー】なら上手く出来ると信じているぞ』

【ベクター】『私も！、【アーサー】が1番だと思うよ！』

【アーサー】『皆。……よし！。相手は、ただのザコだ！。全員。手を抜くなよ！』

【ルシフェル】『了解！』

【アルファ】『了解しました！』

【ベータ】『了解した！』

【ベクター】『オツケー！』

【アーサー】『発信準備は良いか！』

【ルシフェル】『良いよ！』

【アルファ】『いつでも行けますよ！』

【ベータ】『準備完了！』

【ベクター】『大丈夫だよ！』

【アーサー】『では、良いな！』

【ルシフェル】『はい！』

【アルファ】『良いですよ！』

【ベータ】『いつでも発信可能！』

【ベクター】『いつでも良いよー！』

【アーサー】『K・アーサー！』

【ルシフェル】『ルシフェル！』

【アルファ】『アルファ！』

【ベータ】『ベータ！』

【ベクター】【ベクター】！』

【アーサー】達『『『『発進！』』』』

【アーサー】達は、弾のように発射された

【アーサー】達は、武器を出した

【ベクター】『ねえねえ！【アーサー】！。敵は数億体だよ！。しかもカラーはグリーン
！』

【アーサー】『グリーン？…生かすな、そいつは、自分の仲間まで裏切るリーダーが居た
はずだ！全て撃退しろ！』

『『『了解！』』』

【アーサー】『【アルファ】！、【ベータ】！。2人で組んで、右側の敵を撃破せよ！』

【アルファ】【ベータ】『『了解！』』

【アーサー】『【ベクター】ザコの機体を【ゴーストジャック】して！機体を奪って、仲間を増やせ！。壊れている機体があつたら、撃破しても構わない。【ルシフェル】！。【ベクター】の護衛だ！。2人で組んで、左側をの敵を撃破せよ！』

【ルシフェル】【ベクター】『『了解！』』

【ルシフェル】『【アーサー】は？』

【アーサー】『1人で、正面を撃破する！』

【ルシフェル】『何ですって!?!』

【アーサー】『目の前の相手はこっちがする！。皆は、左右攻撃だ！』

【ルシフェル】『くっ!!……了解!!』

【アーサー】『それと、【アルファ】、【ベータ】。【必殺チャージ】が溜まったら、直に【ウエポンフォーム】の【必殺ファンクション】だ!』

【アルファ】【ベータ】『了解!』

【アーサー】『作戦開始だ!。実力の違いを、教えてやるぞ!!』

【アーサー】以外『“了解!”』

こうして、【アーサー】達は作戦を開始した

男の娘が【キング】で、異世界で暴れるのは良いのか？

バトルルート変更

【アルファ】は、「ビームアサルト」の「ビームパルサガン」で「ビュビュビュビュビュ」っと打ち打ち続け、「バーン！」「バーン！」っと数千万体の敵の機体を撃破した

【ベータ】は、「レーザー」の「インシオンキャノン」の「レーザーキャノン」で「ビューン・ビューン！」っと打ち、カッターのようにして、「バーン！」「バーン！」と同じように、数千万体の敵の機体を撃破した

【アルファ】『楽勝ですね。さすが【アースー】が作ってくれた機体なだけはあるな』

【ベータ】『姉さん、キリが無いですね』

【アルファ】『ええ、確かに、数の方が相手の方が上。ですが』

【アルファ】と【ベータ】はキレつと決まって、言った

【アルファ】【ベータ】『『全て破壊すればいい話です！（だ！）』』

そう言って打ち続けた

バトルルート変更

【ベクター】『えい！』

【ベクター】は、【ゴーストジャック】で数千万体の敵の機体に乗っ取った

【ベクター】『この【ベクター】さんのために、頑張つてねー！』

【ベクター】は仲間同士の戦いが好きなようだ。【ベクター】の後ろに機体が居る。が

【ベクター】『甘いよー!』

【ベクター】は【ベクターアックス】を取出して、接近してくる敵の機体の胴体を切断した

【バーン!】

【ベクター】『あっははははは!!。戦って戦って、私のために戦って壊れるだよー!』

【ルシフェル】（【ベクター】。何か壊れてない?。大丈夫なら良いのだけど。…ですが）

【ルシフェル】の後ろに敵の機体が5体、接近してきたが

【ルシフェル】『遅いですよ。本当に』

【ルシフェル】は、その5体を「ヘブンズエッジ」で横一線で敵の機体の胴体を斬りつけた

敵の機体全て、撃破した

「バーン！」

【ルシフェル】『本当に、太刀筋が、乱れていますね。僕的には、つまらないです』

【ルシフェル】も数百万体の敵の機体を撃破していた

【ルシフェル】『アーサー』。大丈夫かな？』

バトルルート変更

【アーサー】『はあああああ!!』

【アーサー】は、【オートクレール】で敵の機体を撃破した

「バーン！」

【アーサー】『これだけか？。つまらないな！』

【アーサー】は、数千万体の敵の機体を撃破していた

【アーサー】『……全員！、【必殺ゲージ】はどのくらいだ？』

【アーサー】は皆に連絡をした

【ルシフェル】『こちら、【ルシフェル】。【ゲージ】は埋まりました！』

【アルファ】『こちら、【アルファ】。【必殺ゲージ】はこちらも埋まりました！』

【ベータ】『こちら、【ベータ】。いつでも打てます！』

【ベクター】『はぁーい！。こちら、【ベクター】。【ゲージ】満タンだよ！』

【アーサー】『よし！。【ベータ】は【ウエポンフォーム】で、残りは【必殺フアンクション】だ！』

『『『はい！（了解！（分かりました！）（オッケー！）』』』』

【ベータ】【イカロス・ベータ】リミッター解除。【ウエポンフォーム】！

【ベータ】は、身体が黄金のように光、身体が変形して、翼が1つになった。だが、まだ、翼が1つになったら、その後から身体から分離して、2本のガトリングガンが出来た。そのガトリングガンは【アルファ】の前まで移動して、【アルファ】が、そのガトリングガンを手を持った。二刀拳銃：いや、二刀両手拳銃になった

全員『『『【必殺フアンクション】！』』』

【アーサー】「アタックファンクション 神速剣」

【ルシフェル】「アタックファンクション セラフィックウイング」

【アルファ】「アタックファンクション α α ガトリング（ダブルアルファガトリング）」

【ベクター】「アタックファンクション ヘルファイア」

その電子音が鳴ったら、直さに「アーサー」は消えた

そして目にも止まらない速さで、輝く刃で敵の機体達に斬りつけて、最後の一闪を機体達に当てて、敵の機体達を撃破した

【アーサー】『この一撃でも耐えられないなんてな。やっぱザコだな』

バトルルート変更

その電子音が鳴ったら、「ルシフェル」は空高く飛んだ

それから、「ルシフェル」の翼が「ルシフェル」の機体ぐらゐまで大きく羽を広げた

それから、その羽の真ん中の部分が光をチャージするかのようになり、光を溜めて、光のレーザーを打った。敵の機体達を撃破した

【ルシフェル】『本当に綺麗な機体を作ってくれて、ありがとう。【アーサー】』

バトルルート変更

その電子音が鳴ったら、「アルファ」は、横に回転し、打ちまくった。そして、最後に「バアン！」と決まったキレを見せたら、無数のレーザー弾が、敵の機体達に当たりまくって、機体達が撃破した

【アルファ】『これが、【高次元多関節機構】の性能。本当に凄い機体を作りましたね。さて、【ベータ】に戻しますか』

【アルファ】は、両手二丁拳銃を空に投げたら、拳銃から、【ベータ】に戻った

【ベータ】『姉さん。やりましたね!』

【アルファ】『ええ、此処の始末は終わりました』

バトルルート変更

【ベクター】は、【大型ウエポンベース】が出てきて、その前に【ベクター】は移動して、【ウエポンベース】が【ベクター】に向けて電気を送り、【ベクター】は、【ウエポンベース】に吸い込まれるかのように乗った。乗った後、【ウエポンベース】が起動して、3対3のレーザー砲が出来て、エネルギーをチャージして、敵の機体に向けて、発射した。その一撃が敵の機体達に命中し「バーン!」と爆発して、撃破した

【ベクター】『うんうん。この機体は、凄すぎるよ! 【アーサー】。色々【カスタマイズ】にしてみるか!』

バトルルート変更

【アーサー】『ベクター。敵の数は？』

【ベクター】『んん？。ああ、敵ね。待ってねえー』

【アーサー】『皆。よくやってくれたな』

【アーサー】以外『はい！（ありがとうございます！）（うん！）（ありがとう）』

【アーサー】『ベクター』。状況は？』

【ベクター】『うん！。もう敵は居ないよ！』

【アーサー】『そうか。だったら、皆、終わりだ。船に帰って、お母さんが作った食事をしに行くぞ』

【アーサー】 以外『『『はい！（分かりました！）（分かったー！）（了解した『『『

そして、【アーサー】 達は、自分の船に帰って行った

男の娘が作戦を練って、娘を使わないといけないのは良いのか？

それから、この異世界に来て、1か月が経った。テレビで創達の活躍が映っていた

創「マジかー」

シャルロット「これ、どうするの？」

創「まっ、俺たちだと言う事は分からないだろうからさ、ピンチになったら、助けてやろう。主人公をサポートするのが俺たちの役割だしな」

シャルロット「でも」

創「まあ、確かに、分からないわけではない。だが、…いい結果を出すぞ」

束「はつくん！」

創「うわっ!? な、何だ!？」

いきなり後ろから、束の声が聞こえた

束「そんなに辛く考えなくても良いのだよ！」

創「……それもそうだな。この話には、実は主人公のサポートする重要な人が、居たんだ」

ラウラ「それと何の関係になるんだ？」

創は家族に説明をした

シャルロット「恋人がいるのに…死ぬだなんて…」

ラウラ「……………」

クロエ「そんな……………」

東「酷いよ……………」

皆、目を瞑って悲しい顔をしていた

創「そうなる事を、止めるのが、俺たちだ。皆手伝えるか？」

シャルロット「人の命も救えるなら！」

ラウラ「ああ、絶対に良い物語に変えよう」

クロエ「大丈夫ですよ！。私たちがいますから！」

東「はつくんの頼みなら何でも聞くよ！」

創「ありがとう。じゃあ、今回の作戦を言うよ」

創以外の戦いに出た家族「二」良いよ（ぞ）（―）（ですよ）三」

創たちは作戦ルームでに向かった

「作戦ルーム」

創「皆集まったな」

創は皆集まったら、1回深呼吸をして、作戦を言った

創「今回の作戦は、…まあ……ただの挨拶だ。それを行ってもらおう」

シャルロット「挨拶？」

創「ああ、この作戦は、敵の基地に侵入し、ただ挨拶をすればいい話」

ラウラ「何故、そんな事をする？」

創「決まっている。狩りのターゲットを変えるんだよ」

シャルロット「変える？」

創「あいつの一人は、誰かに狩りのターゲットにされているなら、こっちに変える作戦だ」

束「つまり、相手を変える？」

創「主人公にターゲットされている相手は駄目だが、それ以外は、5人も居るから、その5人に相手になるんだ…まあ、前の戦いで撃破した奴は、1人居るから、相手は4人

になるな。質問はあるか？」

シャルロット「じゃあ、僕から」

創「良いよ。内容は？」

シャルロット「どうやって侵入するの？」

創「命に任せればいい」

創以外「「命!?(さん!?) (メーちゃん!?)」」

シャルロット「嘘!?, 自分の子供を使うの!？」

創「命は、「皆ばかりズルい!、私も戦う!」って行っていたから、仕方なくやらせるんだ」

その発言に皆はさらに驚いた。アマテラスから、能力を貰ったからだ

創「だから、仕方なく出させる。まあいちよう、ナビしてくれるから、危険な事にはならないだろう。それに、もし分からなかつたら、地図とどんな警備があるかの場所、それをあげるから、何とかなると…思う」

シャルロット「地図は？」

創「コックピットにある」

創「質問は、何かある？」

創以外の皆「」「良いよ(ぞ)(ー)(ですよ)」「」

創「だったら、作戦の前に」

シャルロットの母「食事でしょう」

見えないところから、母が現れた

シャルロット「お母さん!？」

シャルロットの母が現れてビックリした。いきなり母が現れたからだ

創「それで、料理と言ったら、何があるんですか？」

母「もちろん。最高の料理を作ったの」

創「それって、もしかして！」

母「ええ、皆の大好物の料理よ」

母以外「」「」「ありがとう！（がたい！）（ごぞいますー！）」「」

創達は食事をとって、作戦を開始した

男の娘がド派手なのか分からないが、侵入するのは良いのか？

創達は、準備をして、作戦を行った。何とか見つからずに侵入出来た。そもそもゲートに入ったから見つかるのかも知れないのに、何とか入れた。ギリセーフなのか？

今頃

創「此処だな」声小さく

ラウラ「しかし、本当に良いのか？」声小さく

創「始まってしまったのは仕方がない。皆、あれのイヤホンとマイクを付けてよ」

創以外「」「了解」「」

皆はイヤホンとマイクを付けた

「…ん？始まるぞ。良いな？」声小さく

創以外 「了解！」声小さく

創 「じゃあ、開始！」声小さく

ルート変更

ドルガナ 「奴らは自分たちの事を、地球人と呼んでいるようでございます」

ルティエル 「自分の存在を意に付け出来る位の知恵はあるのねえ」

ジアート 「面白い！。ならば我々も地球人と呼んでやろうではないか？」

ドルガナ 「しかしそのような事は過去に前例がありません！」

ジアート「つまらぬ事を言うな！。久々に巡り合った良きラマタ（獲物）だ。それなりの敬意を持って、もてなしてやる事にしよう」

ジアート「さあ、次は何をして楽しませてくれる？。地球人」

??? 『だったら、これならどうだ？』

ウルガル人「！！！！」

「バーン！」

ウルガル人全員驚いて、後ろを見た。いきなり何者かが爆破されたのだ。扉の前に黒い霧が出てきた

黒いきりが晴れたら、…そこには、人が居なかった。

??? 「侵入。なかなか楽しませるやり方だと思っけど？」

全員のウルガル人は聞こえた方向に顔を向けたらそこには

創 「ジアートさん」

創たちは、そこに居た豪華な机の右側に居た

ルート変更

ドルガナ 「貴様！何処に立っている！」

創 「貴様？。初対面なのに言う言葉か？。もう少し礼儀が欲しいな」

ドルガナ 「なんだ「待て」ジアート様！」

ジラート「待てと言ったはずだ」

ドルガナ「ぐっ！」

ドルガナはジラートの言葉に口が止まった

ジラート「貴様、どうやってこの場所に入って来れたのだ？」

創「簡単だ。つと言いたいが、かなり厳しかったよ。防衛、それを潜り抜けて入って来れた。流石に苦労したよ。こんなに厳しい防衛は、この場所が、此処が初めてだよ。誰が作ったの？」

ルメス「……私です」

名乗り上げたのは、机の前に立っている一人の男だった

創「成る程。ルメスさんですか。道理で強いわけだ」

ルメス「……何故私の事を知っているのですか？地球人の貴方が？」

創「決まっていますよ。ある人に聞きました」

ルメス「ある人？……」

創「はい。確か、オーレリアさんに聞きました」

ウルガル人「！！！！」

ウルガル人全員驚いていた。この地球人がオーレリアの事を知っていたから

ジラート「何故母上の事を知っている!?!」

創「どうして、オーテリアさんの事を知っているのか、聞きたいのですか？。良いよ、教えるよ」

ジラート「なに!？」

創「ただし、ジラートさん。俺の勝負に勝てたららの話ですが」

男の娘がある人に認めさせるために2人と戦うのは良いのか？

ジアート「勝負？」

創「はい。お互いの機体同志で戦って、勝てたら話にしましょう」

ジアート「ならばその自身はあるのか？」

創「自身なら、かなり十分にありますよ。さらに、今のジアートさんじゃあ、俺には勝てない」

「！何だと！」

創「その証拠に、そうだねえ、じゃあ、そこに居るルメスさんじゃない2人と、俺1人の戦いで、実力を解ってもらうのはどうでしょうか？」

創はそう言って、ルメス以外のそこに立っている人に言った

クレイン「俺が？」

ルティエル「私も？」

創「少しは、乗らないか。……だったら、俺と戦って、勝てたら、1つ景品をあげましょう。俺が作った、最高の機体をそちら側にあげるのは、良いでしょうか？」

クレイン「へー、俺らにそんな事をして良いのか？」

創「なあに、景品があつたら、相手は少し自信が、湧いてくると思うからね」

クレイン「へっ！、上等だ！相手になってやる！」

ルティエル「良いわね。私にあう機体はいくらほどあるかなあ？」

創「大丈夫ですよ。400種類もの機体もありますから、好きな機体が合ったら、出してあげましょう」

ルティエル「400!？」

クレイン「そんなにかよ!？」

ウルガル人達も驚いた。この子供がそんなに機体を持っているからだ

創「ええ、ですから、好きな機体を1体だけ差し上げます。準備は良いですか？」

ルティエル「いえ、まだ機体は外にあるのですよ」

創「そうですか。じゃあ、外に出て、その機体を出して、準備をお願いしますか？」

それと、先に外に行ってますね。何か罫を仕掛けたら、タダじや済まないですよ」

創はそう言つて、いきなり創たちは消えた

ドルガナ「いかがいたしましたよう」

ガルキエ「……奴の言う事を聞け」

ドルガナ「ガルケエ様！」

ガルキエ「言う事を聞け」

ドルガナ「はっ！」

シャルロット「創、良かったの？」

創「まっ、大丈夫だろ。相手のレベルは、主人公のライバルの下だからな。でも…」

シャルロット「でも？」

創「ルティエル。そいつは、恋人になろうとしていた男を殺した張本人だ。かなり厄介な実力は、あると思う」

シャルロット「それ大丈夫なの!？」

創「いちおう、不安はある。だが、相手にならなきや、ラマタ（獲物）のターゲットにさ

れない！発勝負。やってやるんだよ」

シャルロット「創…分かった。頑張つて創！」

創「ああ！。…!?来たか」

クレイン「やられる準備は良いか？」

ルティエル「来てやったわよ。ボウヤ」

創達「「「!?」」」

創「私たちは驚いた。創の事を男だと分かっていたから

創「俺が男だと知っていたのですか？」

ルティエル「貴方は、そこに居る女子達に付いていたから、分かったのよ」

創「案外そこで気づくのは凄いですねえ。じゃあ、準備は良いですか？」

ルティエル「もちろん」

クレイン「ああ、いつでも良いぜ！」

創「じゃあ」

創は「Dエッグ」を取出し、直さにスイッチを押して、2人の前に投げた。落ちた「Dエッグ」が立って、緑の光が創たちとルティエル達を飲み込んだ。

男の娘が、雷の神を召喚するのは、大きく良いのかな？

【ステージ天空】

クレイン 『何だ此処!?!』

ルティエル 『これは!?!』

2人はいきなり飲み込まれて、驚いていた。それに不思議な場所を見ていた

創 「ようこそ。此処は、【天空ステージ】」

後ろから声を聞こえ、後ろに振り向いたら、挑戦を出した子が、上から、ルティエル達を眺めていた

クレイン 『「天空ステージ」？』

創 「ああ、今スイッチを押して投げたのは「Dエッグ」と言う卵だ」

ルティエル 『「Dエッグ」？』

創 「ああ、それは」

創はルティエルとクレインに「Dエッグ」の事を説明をした

ルティエル 『なるほどね。機体同志の戦いのために作られ、パイロットにも、楽しむために作られたって訳ね』

クレイン 『だったら！』

その時だけクレインの顔が良い顔になっていた

創「そう。此処で暴れても、外には何も影響もない。つまり、いくらでも暴れていい、【ステージ】です。手加減せずに、戦うのは面白いとは思いませんか？」

クレイン『ああ！、地球人は此処まで面白くしてるのか！』

創「残念。少し違うんですよ。俺たちは」

クレインとルティエル『？』

創「俺たちは、確かに地球人だ。だが、本当にこの世界の地球人では無い」

シャルロット『創！』

いきなりウインドから、シャルロットが出てきた

シャルロット『創本気なの!?ウルガル人に教えても!?!』

創「良いだろう？どうせ、あの2人は消える…のかも知れない運命があるんだ。教えなくてもなかなか面白いと思えるんだけどな」

ルティエル『それは、どう意味なの？』

創「俺たちもウルガル人と同じのようにワープから、使ってやって来た異世界からやってきた、地球人ですよ」

ルティエル『異世界からやって来た地球人？』

創「ああ、異世界の事を教えますね」

創は、自分たちは何者かを説明した。当然2人はビックリしていた

ルティエル『そんな事。…ありえない！』

創「じゃあ何で、ウルガル人はどうして居るのかな？」

ルティエル『それは、どう言う意味!?!』

創「確かに、この世界は地球人とウルガル人生きている。だが俺が住んで居る異世界の地球人は、そんな話は空想。つまり、地球人が作った世界だって事だ!!」

ルティエル『!?!、違う!』

創「なら、教えてやろう。俺が最強だって事をな!」

創はそう言つて、スマホを取り出した

【LBX】セレクト、【LBX】ゼウス

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX ゼウス】でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした

そしたら、いきなり空から、大きな青い雷が降ってきて創に当たった

雷の一撃に2人はビックリした。何故なら、2人は雷を見たことが無かったからだ

その雷が創を包み込み、大きな雷の球体になった。その雷が空に向かってゆっくりと上がって行って、破裂した

「バーン！」

2人はこの音にビックリして、1歩下がった

破裂して、青い雷が無くなればそこに居たのは

両肩と足にと背中に、大きな角があつて、「ビリビリ」来るほどの威圧感を放っている
【ゼウス】姿が居た

『この機体に、勝てるかな？』

男の娘が、雷の神で速攻に片づけても良いのか？

クレイン 『そ、それがお前の機体か…!?!』

ルティエル 『何と言う威圧!』

クレインとルティエルは【ゼウス】の姿に威圧に驚いていた

【ゼウス】『話はおしまいですよ』

【ゼウス】はそう言って【雷神槍ケラブノス】を2本、取り出して、装備した。

そう。二槍流だ

【ゼウス】『何処からでも、かかってきてください。ルティエルさんとクレインさん』

【クレイン】（…ルティエル）

【ルティエル】（何かしら？）

（連携で行くぞ）

（あら、私の手は借りずに戦うって言って無かった？）

（相手は、異世界からやって来た地球人だ。相手が悪い。だから協力して戦うんだよ！）

（……分かったわ。この戦いだけは乗ってやるわ）

【ゼウス】『どうやら、作戦を考えていたようですね。でも、その作戦でこの【ゼウス】に打ち勝つ事が出来るのですか？』

クレイン 『じゃあやってやるよ!』

最初はクレインから攻撃してきた

【ゼウス】 『甘いですよ』

【ゼウス】はその攻撃をかわし、右に持っている【雷神槍ケラブノス】でクレインの機体を吹っ飛ばした

クレイン 『ぐわっ!』

クレインは吹き飛ばされて、壁にぶつかった

ルティエル 『私が居るわよ!』

後ろから、ルティエルが光剣持っていて、それを【ゼウス】に振り下ろしたが

【ゼウス】『だから、甘いですよ！』

【ゼウス】は両方の【雷神槍ケラブノス】を剣の【雷神剣ケラブノス】に変えた

ルティエル『槍から、剣に!?!』

【ゼウス】は剣に変えた【雷神剣ケラブノス】の1本の剣で光剣を破壊し、もう1つの【雷神剣ケラブノス】でルティエルの機体にダメージを負わせ、クレインと同じ場所の所まで吹き飛ばした

ルティエル『きやあ!?!』

勿論ルティエルも吹き飛んで

クレイン『ぐあつ!?!』

クレインと衝突した

【ゼウス】『俺は、長い戦いは嫌いだから、止めですよ。【必殺ファンクション】！』

【ゼウス】はそう言って空に向かって、浮いた

【アタックファンクション GODネメシス】

その電子音が鳴ったら、【ゼウス】の目が光、力を溜めた。その瞬間に雷雲が出てきて、黄金の雷が、【ゼウス】に当たった。黄金の雷が消えたら、背中の角部分が、大きな青い雷が出てきた。その雷をバリアにした

【ゼウス】『神の一撃を、喰らうがいい!!』

そう言って、雷を放って。バリアの雷が消えた

その時

【ゼウス】の身体は、更に青いオーラが纏っていて、その纏っている青いオーラを爆破させて、ビックバンみたいな青い雷の衝撃がクレインとルティエルを包みこんで

クレイン 『馬鹿な！…ぐっ！、ぐあああああああああ！！！！』

ルティエル 『まさか、異世界人の機体は、此処までとはね。…きやあああああ！！！！』

「ドッカーーン！！！！」

爆発した。爆破した場所は、黒い煙が出ている。……………煙が消えたら粉々になっているウルガル人の機体の姿が居た

「ルート変更」

ドルガナ 「なんて威力だ！」

ジアート 「ほー。これが異世界人の機体か…面白い！」

ルメス「!？」

ドルガナとルメスは驚き、ジアートは笑っていた

ルート変更

【ゼウス】『この程度か。俺を楽しめないな』

【ゼウス】はそう言って、【ゼウス】と【Dエッグ】をしまった

男の娘が手紙を渡しさらに、「エクリプス」の性能を言ってもは良いのか？

創は「Dエッグ」をしまった後。2人は倒れていて、気絶していた

ジアート「異世界人は此処まで強くなっているのか…」

後ろから、ジアートの声が聞こえ、振り向いてこう言った

創「どうだ。これでも、弱そうに見えるか？」

ジアート「いや、もうどう見ても強敵だ」

創「どうします？。戦いますか？」

創の発言にジアートは少し黙った。それが数秒かかった

ジアート「……いや、止めとく。今の私では、簡単に狩られてしまうからな」

創「それは残念ですね。それと、そこに倒れているウルガル人はまだ生きていますから、休ませたら目が覚めますよ」

創はそう言って、スマホを出して、電話をした。相手は

創「脱出だ」

命『はい』

命でした。創が「脱出」と言って2秒ほどで、後ろから、ワープゲートが出てきた創の周りに、家族たちが居て、綺麗に横に並んだ。もちろん真ん中は創だ

創「ジアートさん。俺たちはこの世界の、地球に向かいます。それと、これを渡して置きますね」

創はそう言って、手紙？。みたいな封筒をジアートに投げるように渡して、創たちはゲートの中に入って行った

ジアートは、その手紙を受け取り、今すぐに読んでみたら

ジアート「っ!?!。……面白い!!」

書かれた内容は

「7日経ちましたら、最後の戦いを行います。場所は此処のゲートの外です。ジアートさん、体制を行ってくださいね」

その内容が書かれていた

使用人「ジアート様！取り逃がしても宜しかったのですか!？」

ジアート「構わぬ。そこに倒れている2人を片づけろ」

使用人「しかし！」

ジアート「何度言わせる？片づけろ」

使用人「!?、か、かしこまりました」

使用人は6、7人ほど出てきて、2人を片づけた。(部屋に)

ジアート「ルメス」

ルメス「何でしょうか？」

ジアート「これを」

ジアートは、ルメスに手紙を渡し、ルメスは直に読んだ。もちろん。ルメスは驚いていた。だが、ジアートは、笑っていた

ジアート「本当に面白いことをしてくれな！。異世界人！」

ルート変更

シャルロット「本当によかったの？」

創「良いだろ？。楽しいド派手を繰り出さないと。連鎖的にな」

ラウラ「しかし、良かったのか？こんな事をして、相手は時間道理にゲートを守りに来るぞ」

創「逆に、俺が作っている400体の機体じゃあ、完璧に負ける」

束「なるほどお。はつくんも少し、悪い部分もあるねえ」

創「それでも、普通なのだな。……さて、さらに、物語をカオスにして行くか。皆、
良いね」

創以外「「「「おー！」「」」」

男の娘がチーム名を考え、会議に出ても良いのか？

それから、時間が経ち、恋人の1人と婚約者の1人を助けた…ついに変態1人もな

チームは「ルシフェル」と「K・アーサー」で、何とか上手くいった

それから、3人を基地に運んで、「エクリプス」に帰った。今頃

創「なあ、チーム名を考えないか？」

シャルロット「チーム名？」

創「ああ、流石にチーム名が無かったら、何者かが分からないしさ」

ラウラ「確かに、一理はある」

東「でも、どんな名前にするの？」

皆はチーム名を考え答えを決めた。これだ

創「これで良いだろ？」

シャルロット「まあ、確かにね」

ラウラ「問題なし」

クロエ「良いと思います」

東「私も良いよー」

命「私も良いと思うよ！。お父さん！」

俺たちに付いたチーム名は

【パーフェクトワールド】

最悪な世界を修正し、最高の世界に変えるチームだ

創「じゃあ、そろそろ、面白いことをしないとな」

シャルロット「面白い事？」

創「もちろんあの時と同じのんでな」

今頃

俺たちは隠れて、会議の話を見ていた

代表？「その作戦の成功確率は？」

代表？「全精力を結集したその作戦が失敗すれば。むしろ一気に全滅するのでは無いかね？」

それから話を続き、テオーリアが現れて、話を言っていた

???
(酷い話だ)

???
(確かにね)

代表？「あれが本当にウルガルの皇女なのか？」

代表？「敵なのに何故我々に協力するんだ！」

代表？「彼女の言う事は本当に信用出来るのかね？」

その一言でテオーリアは黙って、悲しい顔をしていた。その時だった

??? 「……だったら、その人は無視すればいいだろ？」

周りの代表達とテオーリアも聞こえた方に顔を向いた。そしたら4人の子供と1の大人が居た。そう

創「誰もその皇女の事を、無視して国の事を守っていればいい話だろ？」

チーム【パーフェクトワールド】の仲間たちが居た

企業？「誰なのかね！君は！」

創「俺たちか？。俺たちは、チーム【パーフェクトワールド】のリーダー。ですが、名

前は教えませんので、ミゼルと呼んでください」

企業達は「チームパーフェクト」の事を馬鹿にした。だが、テオリアは真面目な目で見ていた。

創（テオリア皇女は、俺たちの実力は解っているようだな）

創「だったら、これを見ても、馬鹿に出来ますか？。行け、「キラードロイド」全機発信！」

そう言ったら

セキュリティー「急接近する巨大熱源体を確認！。数は……6機！」

その警報で代表たちは大きく慌てていた

そして、着陸した「キラードロイド」達は、雄叫びを上げ、威圧を見せた

創「これでも、馬鹿に出来ますか？。俺が作った、最高の機体を見ても、馬鹿に出来ますか？」

創の声を聞いた代表者たちは全員、創を見た

創「この作戦は、誰も無視したら、良いだろ？。皆、死にたくは無いし」

アマネ「ですが！、この作戦を成功させなければ！」

創「分かっていますよ。此処に居る人達は、戦う気が無いなら、代わりに俺たち【パークトワールド】の皆が、力になりますよ。話は終わりです。では、ゲートの前で、また会いましょう」

創がそう言ったら、後ろにゲートが出て来て、創たちは中に入って消えた

今頃

創 「なかなか楽しかったな」

東 「だけど、良いのはつくくん？」

創 「忘れた？。旅行だよ」

東 「そう言えばそうだったね」

創 「さて、皆、明日は、最高の日だ。皆、良いな！」

チームの仲間 「「「はい！（分かりました！）（良いよー！）（おー！）（了解！）」「」」」

男の娘が作戦会議を行い、戦いの準備になるのは良いのか？

それから、時間が経ち1日で謎の組織「パーフェクトワールド」が公開された

た
「パーフェクトワールド」が作った機体「キラードロイド」の恐ろしさに、皆は怯えてい

今頃

創「皆。いちよう、チーム分けをするぞ」

シャルロット「チーム分け？」

創「ああ、誰が【LBX】達を命令させて動かすかだ」

束「それは、私で良いんじゃない？」

創「確かに。その方が良いが、相手の機体に乗っ取らないとな。だから、【ベクター】を10兆体ほどで、敵の機体を奪って欲しい」

束「分かったよー」

創「そうだな、命は、情報を探し、どう来るかを見て、襲えて欲しい」

命「了解ー」

創「シャルロットは、【ルシフェル】と4000兆体の機体で船を守ってほしい。」

シャルロット「分かった」

創「クロエとラウラは俺と残りの機体達と【キラードロイド】と一緒にコアを破壊する」

ラウラとクロエ「了解（分かりました）」

創「以上。この作戦でコアを破壊する。それと、ちよつと卑怯な事も、作戦の内か」

シャルロット「どうかしたの？」

創「皆。【チャンスリチャージ】を使う」

東「それって、【必殺ゲージ】が1つ上がる効果じゃなかった？」

創「そう。それを使って、【必殺ゲージ】を満タンにし、【 α α ガトリング（ダブルアルファガトリング）】で一気に片づける。俺の本当な目的は、あいつと戦う事だ」

シャルロット「それって」

創「そうだ。主人公とその仲間達と戦う。もちろん皆も一緒にな。そのために早く片付けるぞ」

創以外のチーム「「了解！」「」」

それから、時間が経ち

【ゼウス】『皆、作戦準備は良いか？』

【ルシフェル】『はい！』

【アルファ】『良いですよ！』

【ベータ】『いつでも発信可能！』

【ベクター】『いつでも良いよー！』

【ゼウス】『ゼウス』！』

【ルシフェル】『ルシフェル』！』

【アルファ】『アルファ』！』

【ベータ】『ベータ』！』

【ベクター】『ベクター』！』

【ゼウス】達『『『『発信！』』』』』

【ゼウス】達は、弾のように発射された

【ベクター】『ねえねえ【ゼウス】！敵の数が分かったよ！』

【ゼウス】『何体だ？』

【ベクター】『んーつと。100兆ぐらい居るよ』

【ゼウス】『少ないな。それに強いウルガルと合わせて、4体だけだからな。だが、ザコは容赦なしだ。やってやれよ』

【ゼウス】以外『『『『『了解！』』』』』

【ルシフェル】は守り、【ベクター】は制御、【ゼウス】と【アルファ】と【ベータ】は攻撃になった

男の娘が派手に、敵をぶつ放しても良いのか？ 【前編】

バトルルート変更

【ルシフェル】『はあっ！』

【ルシフェル】は、1機1機ずつ、敵の機体を撃破していった

【ルシフェル】（少し多すぎる。仕方ない。）『全機！、【必殺ファンクション】だ！』

【ルシフェル】がそう言って、剣を前に出した

そしたら、全【LBX】の1000体は「ビューーン！」っと【レーザーカッター】

で撃破し

2000体は【サンダーバースト】で「ビューーン!」と【レーザーカッター】みたいに撃破し

最後の1000体は仕上げの【ビームショット】で、「ビューイン!」っと残っている敵、攻めてくる機体達を撃退した

【ルシフェル】『これで、攻めて来る機体は撃破した。皆は大丈夫なのかな?』

バートルルート変更

【ベクター】『えーい!』

【ベクター】は【ゴーストジャック】で次々と機体と船を乗っ取り、コントロールしていった

【ベクター】『この【ベクター】さんのために、頑張つてねー!』

【ベクター】はそう言つて手をバイバイのようにして手を振っていた。まさに、悪魔だ

バトルルート変更

【アルファ】と【ベータ】『はっ!』

【アルファ】と【ベータ】は見事なコンビネーションで敵の機体を撃破していた

【アルファ】『【ベータ】。【ゼウス】は?』

【ベータ】『【ゼウス】?』

【ベータ】は、周りを見たら、【ゼウス】は何処にも居なかった。

【ベータ】『居ませんよ。姉さん』

【アルファ】『じゃあ、何処に………まさか』

【アルファ】はその事に気付き、GPSを開き、【ゼウス】の居場所を見て見たら

【ベータ】『ね、姉さん?』

【ベータ】は、【アルファ】の顔を画像で見た。そしたら、姉の【アルファ】は、怖い顔をしていた

【ベータ】『ね、姉さん?大丈夫?怒って…無い?』

【アルファ】『大丈夫よ【ベータ】。私は怒ってないから』

【ベータ】『で、でも』

【アルファ】『大丈夫、大丈夫。それより、【ウエポンフォーム】になってくれない?』

【ベータ】『わ、分かりました』

【ベータ】は、【アルファ】の言われ、【ウエポンフォーム】で二刀両手拳銃になった。【アルファ】はその二刀両手拳銃を手に持ち、構えた

【アルファ】『【必殺ファンクション】！』

【アタックファンクション $\alpha\alpha$ ガトリング（ダブルアルファガトリング）】

その電子音が鳴ったら、【アルファ】は、横に回転し、打ちまくった。そして、最後に【バアン！】と決まったらキレを見せたら、無数のレーザー弾が、敵の機体達に当たりまくり、機体達が撃破した

【アルファ】『弱いですわ弱いですわ。この機体を追い込む事は出来ないのですか？。ザコの宇宙人の分際で!!』

【ベータ】(今日の姉さん、怖い。…まさか、【ゼウス】が居なくなつたから!?。だったら早く見つけないと!!)

【ベータ】『ね、姉さん。そろそろ…』

【アルファ】『戻すわけないでしょ。完璧に撃破するため、もちろん。妹を利用して、戦わないと面白くないし』

【ベータ】(ね、姉さんが怖い!早く戻ってきてくれ!!【ゼウス】!!!)

【ベータ】は、【アルファ】の鬼の姿に怯えていた

バトルルート変更

男の娘が今度は地味に破壊しても良いのか？後編

【ゼウス】『はあっ！』

【ゼウス】は、2本の「雷神槍ケラブノス」で敵を撃破していった。もちろん1人で

【ゼウス】『いい加減もう、飽きてきた。これで敵や船を撃破だ』

【ゼウス】はそう言って、武器をしまった

【ゼウス】『敵はこれで終わりだ！「必殺ファンクション」！』

【アタックファンクション GODネメシス】

その電子音が鳴ったら、「ゼウス」の目が光、力を溜めた。その瞬間に雷雲が出てきて、黄金の雷が、「ゼウス」に当たった。黄金の雷が消えたら、背中に部分が、大きな青い雷が出てきた。その雷をバリアにして

【ゼウス】『神の天罰を、喰らうがいい!!』

そう言つて、雷を放つて。バリアの雷が消えた

【ゼウス】の体は、更に青いオーラが纏つていて、その纏っているオーラを爆発させて、ビックバンみたいな青い雷の衝撃が周りの敵の機体と周りの敵の船を包み込んで

「ドッカーーン!!!」

爆破した。爆発した場所は、煙が出ている。……………煙が消えたら、そこには何も無かった

【ゼウス】『此処まで本気を出してないのになあー。白けるな。でもまあ、最後にあれを

壊すか。』

【ゼウス】はそう言って、向かったゲートに向かい。そこに止まって

【ゼウス】『俺は速く、主人公と戦いたいんだ。だから、破壊させてもらう』

【ゼウス】はそう言って【雷神剣ケラブノス】を2つ取出した

【ゼウス】『もう終わりだ。【必殺ファンクション】！』

【アタックファンクション ビックバンスラッシュ】

その電子音が鳴ったら右手に持っている剣を前に出し、左に持っている剣は後ろに向けた。そこから、反時計回りに1周し両手に持っている剣を合わせたら、小さな光が剣先にあつて、合わせた剣を下に向けた。そしたら、剣先に付いていた光が、どんどん大きくなって、【ゼウス】は、その剣を頭まで上げた。その瞬間に星ぐらいな、超大きい光剣が現れた。

男の娘が俺たちの正体を明かし、宣戦布告を言うのは良いのか？

それから、MJPに来たら、お礼を言われた。これから、主人公と戦うためにやって来たのに

それに、ニュースではチーム「パーフェクトワールド」の事を話していた。何が目的で、何で協力したか、それに俺たちは何処で生まれ、育てられたのかも不明。つまり、正体不明の人間だと言った。まあ、そりゃあ俺たちは異世界からやって来た人間たちだから分からないよな。

今頃

創「俺たちはいつまでも此処にいたら良いんだ？」

シャルロット「あの人が来てからだよ」

創「長いな」

東「確かにねー。私たち、あの戦いで大きな戦力を見たんだし」

創たちは今はMJPの基地の中の会議室にいた

創「だよねー」

シャルロット「そもそも、創が此処に行かなかつたら、こんな事にならなかつたんだし」

創「うぐっ！……とにかく！、俺はあいつに勝って、楽しみを味わうんだよ」

シャルロット「味わう？」

創「ああ、主役を倒した勝利を、味わうんだよ」

東「はつくん、こわいねえー」

創「こう言う言い方は、まだ手加減しているんだよ」

東「していないように見えるけど」

創「他の人はそう見えるだけだよ」

それから時間が流れ、やっとシモンとアマネとスズカゼの3人が来た。さらに時間が流れ、俺たちは何者かを話した。その話には3人は驚き、まあ何とか信じてくれた。それと俺たちの目的を話そうとしていた

スズカゼ「貴方達の目的はなに？」

創「目的か……そうだな……チームラビッツを呼んで来てくれたら、目的を話します

よ」

スズカゼ「チームラビッツを？」

創「はい。その人たちを呼んでくれたら、目的を話しましょう」

スズカゼ「……分かったわ。直に、チームラビッツを呼ぶわ」

創「それは、ありがとうございます」

スズカゼは、チームラビッツ達を呼び、やってきた。1人の馬鹿が俺を女呼ばわりされたし、ナンパされたし、された時、俺以外のチーム【パーフェクトワールド】の皆は大きく怒っていて、チームラビッツは呆れていた

スズカゼ「それで、チームラビッツを呼びました。貴方達の目的は、一体何なのか？」

創「呼んできてくれましたから、教えましょう。目的は……チームラビッツに居る全員」

創はそう言って椅子から立ち、チームラビッツのイズルの方に顔を向いた

創「俺たちは」

創はそう言ってイズルに指を指した

創「お前達と戦うためにやってきたのだ!!」

その発言で「パーフェクトワールド」以外の人達は驚いた。謎の組織の目的はチームラビッツと戦うためにやって来たのだからだ

男の娘が「パーフェクトワールド」からビッツと争う前になるのは良いのか？

イズル「ぼ…僕達と…戦うために…」

創「ああ、俺達は。チームラビッツと戦うために、このにやって来たのだ。そう言う事だ、皆、【Dエッグ】を」

創はその事を言い、皆は【Dエッグ】を直に取出した

イズル「ま、待ってよ！僕達は、君達と戦う気なんか無い！」

創「お前には無くても、俺達には、戦う理由がある」

イズル「な、何で…その理由は？」

創「理由は…」

創が言ったその言葉に殺気を入れた。皆は無事だ。でも、他の皆は恐怖に怯えているが、シモンは平気な顔をしていた

創（俺の殺気を喰らっても、平気な人が居たと。なかなか強いと思うが、機体が無いから残念だ）

創「理由は………無い！」

シモンとチーム以外「「「「「「へ？」「」「」「」」」」」」

創「だから、理由は何もない。ただ俺が戦いたいただけ。それだけで良いだろ」

創はそう言って、皆は【Dエッグ】のスイッチを押して、前に投げて落ちた。【Dエッグ】の緑の光が此処に居る人を包み込んだ

ルート変更

【天空ステージ】

イズル「此処は!？」

イズルはあの緑の光に包み込まれて、イズルが立っていた場所は見たこと無い場所だった

??? 「【天空ステージ】だ」

イズルは後ろから声が聞こえ、振り向いたら、創が居た

イズル「皆はどうした？」

創「無事だ。お前の他の皆は、今頃」

ルート変更

【天界ステージ】

アサギ「此処は何処だ？」

アサギは周りは黄金、空も黄金、太陽も黄金である。まるで天国に居るかのような場所だった

???「こんにちは。迷える哀れな子羊さん」

アサギは後ろを見て、上を見たら、金髪の女性が居た

アサギ「君は？」

???「僕？。僕は、シャルロット・デユノア。【パーフェクトワールド】の副リーダーで

すよ」

アサギ「副リーダー!?!」

アサギは驚いた。「パーフェクトワールド」には、副リーダーが居たからだ

シャルロット「アサギの相手は、この僕ですよ」

アサギ「嫌だ。君と戦っている場合じゃ無い」

シャルロット「でも、戦わないといけませんよ。私と戦わないと、この場所から、脱出、出来ませんよ?」

アサギ「なに?」

シャルロット「イズルを助けに向かいたいなら、僕と戦わないといけませんよ!!」

アサギ「どうやら、君と戦わなくてはいけないようだな…（胃が痛い…）」

シャルロット「それは、どうも」

シャルロットがそう言つてプレスレットに手を付け、「ルシフェル」になった

【ルシフェル】『さあ、どうぞかかってきてください』

ルート変更

【王宮城内】

ケイ「此処は…?」

ケイは目を開けたら、自分が立って居る場所は、コンピューターだらけで、プログラム場所だった

??? 「ヤッホー!、どうこの場所は？」

突然後ろから大人の女性が居て、ケイは少し後ろに下がった

??? 「ほうほう。この東さんに警戒して、下がるとはねえー」

ケイ「東さん?。じゃあ、貴方の名前は東なのですか?」

東「そうだよー!。皆のアイドル!!東さんだよ!!ブイブイ!!」

この残念な大人にケイは呆れていて声も出なかった

東「あっははははは!!。あー、それと、東さんと戦わないと、此処から出られないよー!」

ケイ「何ですって!?!」

束「私に戦ったら、此処から出してあげるよ！」

ケイ「……分かったわ。戦う、って？」

束「それはねえ、これだよ！」

束はそう言つて、頭に付けてるロボットのウサ耳に手を付けて、目を瞑った

そしたら、いきなり、眩しい緑の光が束を包み込んで眩しくなった。ケイは眩しい光が目に入り、目を瞑ってしまった

緑の光が無くなると、目の前に居たのは

黒い装甲に、目が赤い、少し緑の色が付いた。機体が居た

【ベクター】『さあ！、準備は良いかなあー？』

ルート変更

【闘技場】

アタル「凄く広いなあ…【闘技場】？」

アンジュ「あの卵みたいなあれが、こういう仕組みに、なっているんですね」

アタルとアンジュは、包み込まれた【Dエッグ】の効果を味わって凄いと感じていた。
今いる場所は【闘技場】だ

???「どうだ、この場所は」

???「貴方達に似合いましたか？」

後ろから、声が聞こえてアタルとアンジュは振り向いたら、左右眼帯が違う、そつくりの2人が居た

アンジュ「貴方達は…あの時の！」

??? 「ああ、私は【パーフェクトワールド】の一員のラウラ・ボーデビッツヒだ」

??? 「同じく私は、【クロエ・クロニクル】。ラウラの姉でございます」

アタル「俺たちを此処に呼び出して、どうするんだ？」

クロエ「簡単です。私たちと戦ってもらいます。勝っても負けても何もありませんのでご安心ください」

アンジュ「それより、イズル達はどうした！」

クロエ「ご安心を、私たちと同じに、卵の中に入って全員、戦っているのです」

アタル「俺たちは戦う気は無いって言ったはずだぞ！」

ラウラ「だが、この空間は、戦わないと出られない仕組みになっているぞ」

アタル「マジかよ…」

クロエ「ですが、ご安心ください。この空間でも、負けて死ぬつと言う事はありませ
んで、存分に戦ってください。それでは、ラウラ行きますよ」

ラウラ「分かりました。姉さん」

ラウラは左の眼帯に、クロエは右の眼帯に触って、「イカロス」が現れた

『さあ！。何処からでも、かかってきてください!!』

ルート変更

タマキ「ここ何処〜！」

タマキは、何処もぶつ壊れている町。【滅びの街】だ。タマキは1回人が居るのかを探した。そしたら

命「こんにちは！お姉ちゃん！」

タマキ「こんにちはわ〜。君は？」

命「私？。私は井上命！。お姉ちゃんと遊ぶためにやって来たよー！」

タマキ「へー、何で遊ぶの？」

命「楽しい遊びだよ。そのためにお姉ちゃんを閉じ込めたんだよ！」

タマキ「え？」

命「だから、遊んでくれる？。遊んでくれたら、此処から出してあげるよ！」

タマキ「うん分かった！。それで、何で遊ぶの？」

命「戦い！！。じゃあ、始めるよ！！」

命はそう言ったら、空から【キラードロイド】【ワイバーン】が現れた

タマキ「【キラードロイド】!？」

タマキは驚いた。いきなり空から【キラードロイド】が降ってきたからだ

タマキ「どうして【キラードロイド】が降ってきたの!？」

命「それは、私は【パーフェクトワールド】のナビ係、井上命だからだよ！。お姉ちゃん！」

その事を聞いたタマキは、3歩ほど後ろに下がった。この子も【パーフェクトワールド】の仲間だったからだ

命「じゃあ、始めるよ！」

命はそう言つて、【キラードロイド】の中に入った

【ワイバーン】『さあ！、遊ぼう!!』

ルート変更

創「お前の仲間は、今は戦っている。必死にな」

イズル「皆には関係無いだろ！」

創「いえ、関係あります。何故なら、主役のサポートをしている係が居るから、戦わ

なくってはいけない」

イズル「でも！」

創「これは、遊びだと思え。此処で死んでも、現実には生きているから、大丈夫なんだよ」

創はその事を言い、スマホを出した

創「今回は、お前に似ている特別な機体で勝負してやろう！。しかも俺の【カスタム式】だ！」

そして入力した

男の娘が、ダークヒーロー（機体?）で主役と戦うのは良いのか？

【LBX】セレクト、【LBX DBサイファー】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX DBサイファー】でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした

そしたら、いきなり空から、黒い煙が出てきて、創を包み込んだ

そして、あの機体の【ドットブラスライザー】のダークバージョンの【DBサイファア】
が居た

イズル（っ!?あの青くて白い機体じゃない!?)

イズルは驚いた。創は、【ゼウス】だけじゃなかったのだから

【DBサイファア】『イズル。早くレッド5にならないのか?』

イズル「知らないよ!。どうやって呼び出すんだよ!」

【DBサイファア】『だったら、目を瞑り、頭の中でレッド5の姿を思い出せ。そしたら、
レッド5になれる』

イズル「そ、そうか。やってみる」

イズルは目を瞑り、レッド5の姿を思い出し、目を開けたら、いつの間にかレッド5になっていた

【DBサイファー】『これで良いだろ。さあ、始めよう』

【DBサイファー】は直に【マルチギミックサック】を使った

【セットアップ ブラストソード】

レッド5『な、なに？』

いきなり電子音が鳴ったら【DBサイファー】のバックパックの1部が2つ外れてそれが変形した。そのまま【DBサイファー】がそれを掴むとエネルギーの刀身を持つ2本の片手剣になって、【DBサイファー】の手に掴み二刀流になったら

レッド5『そ、…それは？』

【DBサイファー】『マルチギミックサクサク』。【DBサイファー】の種類だけにしか使える、【武器変形切り替えシステム】』

レッド5 『武器変形システム！』

レッド5は【DBサイファー】の【マルチギミックサクサク】つとと言うシステムを見て
凄いと思った

【DBサイファー】『準備は良いな？』

レッド5 『ああ！』

【DBサイファー】『ならば行くぞ！』

【DBサイファー】は、イズルに突撃した

もちろん、レッド5は「DBサイファア」から離れて、爪みたいな銃を持ちマシンガンみたいに打ちまくった。だが

【DBサイファア】『甘いぞ!』

【セットアップ ブラストブレード ブラストガーター】

その電子音が鳴ったら、二刀流から双剣に変わり、双剣を回転させ、イズルが打っていたレーザー弾を防いで、レッド5にまた突っ込んだ

レッド5 『剣から双剣に変わった!?!』

【DBサイファア】『何処までも、甘いな』

【DBサイファア】は弾を防ぎ

【セットアップ ブラストマグナム】

その電子音が鳴ったら、今度は双剣から、二丁拳銃に変わり、レッド5に撃ちまくった

レッド5はその攻撃を何とか回避したが、1発だけ当たってしまった

レッド5『1発だけでこれだけの威力!?!』

イズルは驚いていた。レッド5に大きな傷が入っていたからだ

【DBサイファー】『どうした?。来ないならこっちから行くぞ』

【セットアップ プラストソード】

その電子音が鳴ったら、今度は二丁拳銃から、二刀流に変わって、一気に突っ込んだ
が

レッド5 『はあああああああ!!!』

レッド5の姿が、変わり第2形態になって攻撃をしてきた

男の娘が、ダークヒーロー（機体？）で決着するのは良いのか？

【DBサイファー】（意識が戦う事になってるな。これじゃあ、戦いの本当の事にはなっていないな）

【DBサイファー】は呆れて、レッド5の攻撃を止めて、押し飛ばした

レッド5は完璧に壁にぶつかった。

【DBサイファー】『イズル、聞くけど。お前はヒーローは何なのか、知っているか？』

【DBサイファー】がそう言ったら、レッド5は【DBサイファー】を見た

【DBサイファー】『ヒーローは何か、ヒーローは戦う事か?。ヒーローは悪と戦うのがヒーローか?。…違うだろ、ヒーローは人々を救い、皆を守るのが、ヒーローの役割だ。それが、ヒーローの使命だ!!』

レッド5 『っ?!?』

【DBサイファー】の言葉を聞きレッド5は衝撃を受けた。それが、ヒーローの使命だと言うことを。

レッド5 『ヒーローの使命……（そうか…それが、ヒーローの使命…か…）』

レッド5は、その言葉で目を覚まし、自分自身の暴像が止まった

レッド5（確かに。皆は仲間は、僕は戦うのは、戦うためじゃない。そして、）

レッド5 『ヒーローになるため!!』

レッド5は、その言葉を言ったら、背中に青い翼が生えた

【DBサイファア】『ふっ、どうやら、操られていたお前は、もう、大丈夫になったな。それがジュリアシステム。だったらこつちも本気で行くぞ!』

【DBサイファア】はそう言い。右手を空に手を指した

【DBサイファア】『来い!。【ドットフェニックス】!!』

【DBサイファア】はそう叫ぶと、空から紫の戦闘機が現れた

レッド5 『あれは…戦闘機?!』

【DBサイファア】『ああ、あれは【ドットフェニックス】【DBサイファア】種類だけにしか使える。支援機だ。行くぞイズル!、【ドットフェニックス】!』

【DBサイファア】ドッキング・シークエンス

【DBサイファア】の呼びかけに答える様に【ドットフェニックス】から電子音が鳴った。次の瞬間【ドットフェニックス】は分離した。それと同時に【DBサイファア】も機体の色は…変わっていない

レッド5 『なっ、なに!?!』

【DBサイファア】に5つに分離した【ドットフェニックス】のパーツが、合体していった。最初は、両足にパーツが接続され、次に背中の中のバックパックが外れ、【ドットフェニックス】本体部分が接続された。最後に右腕に巨大な槍、左腕には大型のシールドが装備された

【DBサイファア・ジーエクスト】

そこには、【ドットフェニックス】と合体した【DBサイファア】の姿があった

レッド5 『がっ、合体した!?!』

【DBサイファー】『ああ！、これが最終形態にして最強の姿【DBサイファー・ジーエクスト】だ!!』

レッド5 『【DBサイファー・ジーエクスト】!?!』

【DBサイファー・ジーエクスト】『行くぞ!!。これで終わりだ!。覚悟は良いか!!』

レッド5 『ああ!!。来い!!』

【DBサイファー・ジーエクスト】『【必殺ファンクション】!』

【アタックファンクション 真刀・カムイ】

その電子音が鳴つたら、【DBサイファー・ジーエクスト】は、槍を空に上げて、最強必殺技を発動させた。槍に大量のエネルギーが集まり、巨大なレーザーソードへと変わった

男の娘がチームラビッツに手紙を送り、新たな挑戦を渡し、更には新たな相棒を手にするのは良いのか？

ルート変更

イズル「う……此処は？」

イズルは目を開けたら、医務室の場所になっていた

イズル（僕は確か……そうだ。あの時！）

イズルはあの戦いときの事を思い出した

イズル（そうだ。僕は、負けたんだ……）

イズルが負けて、落ち込んでいたが、あの子が言っていた事を思い出した

イズル（ヒーローは、悪と戦うんじゃないくて、人々を救い、皆を守る。そうだったんだ。なのに、僕は…ん？あれは？）

イズルは棚の所にアタツシユケースを見つけて、それを

イズルはベットから起き上がって、棚の所にあるアタツシユケースを取って、開けてみた。そしてら

イズル「こ、これは!？」

イズルが見たアタツシユケースの中身は、小さい「DBサイファー」と少し似ていた機体と戦闘機の「ドットフェニックス」があった

ケイ「イズル!、身体は大丈夫なの!」

タマキ「どうしたの、イズル?」

アタル「おいおい、どうしたんだよイズル!」

アンジュ「何かあったのですか!、イズルさん!」

イズルの仲間が来て、大丈夫?みたいなのでやってきた

イズル「こ……これ……」

イズルは1枚の紙を読んだ。他の皆も

イズル以外「「「「「
???」」」」」

イズル達もその内容を読んだら

【第1回 異世界大会アルテミス】

「内容。このチケットを持っている人は、この大会に出場出来る。出場者は最大6人。5人以下は出場できない。なお、この大会はこの大会の主唱者。井上創の【LBX】と言う機体で出場しなくてはいけない。なお、この大会では、優勝者と準優勝者には賞金が送られる。準優勝者の賞金は1千万円!!!!。」

「「「1千万円!」」」

「そして、優勝者に送られる賞金は」

533 男の娘がチームラビッツに手紙を送り、新たな挑戦を渡し、更には新たな相棒を手のは良いのか?

「
1
兆
円
!!!!!!
」

535 男の娘がチームラビッツに手紙を送り、新たな挑戦を渡し、更には新たな相棒を手のは良いのか?

イズル達

「「「い、

……兆円

「「「「「「「「「「「

!!!!!! ????????

「
「
「
「

イズル達

「「「「……」」」」

イズル達はかなり驚いた。なんと優勝賞金は1兆円だったから

「以上。大会内容でした。ルール内容は、大会で決めます。参加自由です。さあっ！、優勝目指して頑張ろう!!。更に向こうへ、『plus ultra』!!」

ケイ「イズル！これ本当の大会なの!？」

イズル「でもこれ、井上創が作った機体〔LBX〕と言う機体が無いと出られないけど…」

アサギ「待て。イズル、そのロボットはどうしたのだ?」

アサギは「ドットプラスライザー」の方に指を指した

イズル「ああ、あれ。あの子がアタツシユケースに入っていたんだ。この機体と、手紙と、チケットを」

アサギ「それだ！。そのロボットが【LBX】だ！」

イズル「え!?!。でも、小さいし」

アサギ「実は、シャルロットと言う【パーフェクトワールド】が言っていた。【LBX】は手のひらサイズのロボットで、創の改造でアツシユぐらいまで大きく出来る所まで改造を行ったって」

イズル「それじゃあ！」

タマキ「大会に出場できる！」

ケイ「待って、この機体1体だけしかない。後5機は要るのに、それが無い」

イズル達は悩んだ。6機要るのにそれが無いのだから。イズルはあることを思い出した

イズル「もしかして…」

アタル「イズル？」

イズルはもう一枚の手紙を調べたら

創「どうせ、1機だけじゃ足りないのは解ってるから、ラビッツのイズル以外に、ベットの下にアタツシユケースがあるから、それを開けて、見せろよ」

イズル「…なるほど」

タマキ「どうしたの、イズル？」

イズル「これを読んで」

イズルが手紙の裏を読んだら、直に皆は自分の部屋に戻り、ベットの下を調べたら、ア

タツシユケースが見つかった。イズルは、もう平気になったから、皆でアサギの部屋に来ていて、アタツシユケースを開けて見たら、

アサギは〔バル・ダイバー〕

ケイは〔マグナオルタス〕

タマキは〔ジャンヌD〕

アタルは〔トライヴアイン〕

アンジユは〔グルゼオン〕

があつた

アサギ「これが、俺が使う〔LBX〕…」

ケイ「凄いですわ…」

タマキ「カッコいい！」

アタル「こいつは…狙撃機能も付いていて、爪の攻撃が可能な【LBX】」

アンジュ「凄いですね。この【LBX】。でしたね」

それぞれ、その機体の説明書を読んで、【Dエッグ】を起動させ、皆で大会練習を行っていた

男の娘が侵入者がかなり大変で、
〇〇になるのか?それは良いのか?

「ルート変更」

「パーフェクトワールド」は、この物語を終わらせて、元の世界に帰ろうとした

はずだった

シャルロット「うそ!?!。旅行はまだまだ続くの!?!」

創「ああ、旅行はあそこでもかなりの時間が経ったのに元の世界では1日しか経っていないんだよ」

東「つまり、1週間旅行は、7回も異世界に向かわないといけないの。シャーちゃん
シャルロット「じゃあ、まだまだ続くってこと？。…それにしても、本当によかったの？」

創「良いじゃんかよ。楽しいイベントをやらせるのは」

シャルロット「ちゃんとお金あるの？」

創「忘れたの？毎日5百億円追加される」

東「それはすごいけど」

創「だけど、主催者は俺だ。だから外で見ているから、大会には出場出来ない」

シャルロット「私たちは？」

創「もちろん参加できないよ。それに、出たとしても、こっちは皆強いから、出たつて勝つてしまうから、さすがに参加できないよ。そのことを話した後。かなり面倒な事が起こったけど。対処できるか? 束？」

束「どんな面倒な事？」

創「そこに隠れている。人はどうするかの話」

創はそう言ってダンボールの方に向いて言った

束「どう言う意味？」

創「侵入者だ」

その発言で皆は迎撃態勢を取った

創「そこに隠れている奴、出て来いよ」

創がそう言ったら、数秒は出てこなかったが、やっと相手が出てきた。あいつは!?

ルティエル「ハイ。また会えましたわね」

創「何でこの船に乗ってるんですか?。ルティエルさん」

隠れていた相手はなんと、皇族のルティエルだった

創「何で、此処に来ているんですか?。東、ルティエルさんを元の場所に合わせて戻せる?。」

東「出来ないわけでは無いけど…」

ルティエル「お願いそれはやめてくれないかな?」

創「そもそも、どうやって入って来たんですか?此処はどんな侵入者でも完璧に入れないセキユリティーに、インビジブルもかかっているこの船を、どうやって入ってきたのですか?」

創は急に睨む顔でルティエルを見た

ルティエル「それは、アマテラスつと言う可愛い子に言われて、此処に入ってきたの」

創「あの馬神様があああああ!」

創は、アマテラスがルティエルをこの船に入れてしまったようだ

創「それで、何の御用でこの船に?。俺にはよく、分かりませんが」

ルティエル「それはね…貴方の事を欲しくなったのよ!」

ルティエル以外「「「「「……は？」」」」」

創達は、ルティエルが言っていることは、凄く呆れた

創「いちよう。断ります。それに3百歳の人と付き合うのは残念ながら断ります」

アマテラス「良いじゃないですか♪。楽しいですし♪」

創「どうせ来るだろうと思ったよ。アマテラス!!」

男の娘が何であいつが、宇宙人を家族にして、説明をしたのは良いのか

創「何で、連れて来たんだ？アマテラス」

アマテラス「良いじゃないですか。こう言うカオスが満載な人生を送ってほしいから、此処までやったのよ」

創「満載過ぎる!!。さらに、別の異世界の人…いや、ウルガル人をいくらなんでも、この船に乗せるんだよ!。元の世界に帰ったら、ウルガル人は、元の世界に帰れなくなってしまうんだぞ!」

創はそう言つてアマテラスに向けて怒った

アマテラス「ちゃんと元の場所に帰すよ。でも、彼女はどうしても、君の事を好きらしいから、返されないのかもよ？」

創「おい、いくらなんでも無理だろ」

アマテラス「無理でも、やるの」

創「何処までもカオスを出し続ける。神様だなあ!!」

アマテラス「はい。カオスが足りない神様ですよ」「ニコ」

創「笑うな!!」

それから、時間が経ち言い合いの喧嘩がやっと終わった

アマテラス「それで、ウルガル人を家族の一員にするの？」

アマテラスが言ったその言葉で、創は悩んだ。どうせ断つても無理やり入れられるかな。仕方ない

創「分かった。一員にする」

シャルロット「創！、良いの!？」

東「そうだよ！。こんな危ないウルガル人を家族の一員に入れるなんて。そもそも3百歳も年を取っている叔母さんだよ！」

ルティエル「誰がおばさんさんですか!!」

東とルティエルでまたガミガミしていた。創はその行為に呆れていた

ルティエル「ありがとね。私を家族の一員にしてくれて」

創「そもそも、入れてもアマテラスが無理やり入れられると思うから。仕方なく一員

にしたんだ。それに、口が地球人の言葉で喋っていませんか？」

創は、ルティエルが何故日本語を言えたのが分からなかった

ルティエル「あら♪、アマテラスさんに日本語つと言う言葉を教えてくれましたの。
この言葉もかなり良いですわ」

創「あつ、そうか」

どうやら、ルティエルはアマテラスに日本語を教えて貰ったため、言えたらしい

アマテラス「そうそう。ルティエルさんにも、『LBX』をお願いしますね」

アマテラスはそう言つて次元の穴を作り、穴の中に入り、消えた

創「やつぱり、作らないといけないか。仕方ない。作るか」

シャルロット「創！、良いの!？」

東「そうだよ！、敵に【LBX】をあげるのは駄目だよ！。そもそも叔母さんだから駄目に決まっている!!」

ルティエル「だから！、誰が叔母さんよ!!」

東「君だよ、お・ば・さ・ん？」

ルティエル「ムキィイイイ!!!」

ルティエルは東に殴りかかたが、東は「ヒラリ」つとかわした。まるで闘牛みたいな事になっている…仲がいいんだな

それから時間が経ち新しく家族になった1人の叔母さん。ルティエルが仲間に加わった

ルティエル「だから叔母さんじゃない!!」

第2章 聖機師物語編

男の娘が新たな世界に着き、古代砂漠のひし形の【LBX】で助けに行くのは良いのか？

それから、アマテラスは帰り、創は直さにラボに向かい。ルテイエルに、新しい【LBX】を作り始めた

創「じゃあそろそろ、新しい【LBX】を作るか」

創はそう言うと、新しい【LBX】の開発を始めた

30分後

創「完成した！。これでバッチリだ！」

創が作っていた【LBX】は

【ジ・エンプレス】【カラー黄色】

何故なら、ルティエルの前の機体に似合いそうな【LBX】は、【ジ・エンプレス】だ
と思っただからだ。それに武器は【ラグナアクセス】の黄色バージョン

それから、創は新しく完成した【ジ・エンプレス】をルティエルにあげた。ルティエ
ルは喜んでいた

そして俺たちは、新たな異世界に向かった

今頃

俺たちは新たな異世界に着いた。内容は

学園

ロボット・アクション!!

作者「上手くいくかわからないけど」

そして最後に、ラブコメ!?

の世界が入った異世界の名は

そう

異世界の聖騎士物語

創たちは直さに「エクリップス」を着陸させて、外に出た

創「次の世界にやって来たぞ！」

創「しかし、この世界だったらかなり、面倒な異世界に来ちゃったなあ」

シャルロット「この世界の事を知っているの？」

創「ああ、この世界の主役は、「ドカーン!!」…説明は後。敵は俺一人で相手になる。だから、皆は【エクリップス】に乗っついて」

束「良いの、はっくん？」

創「一人で1回相手になりたい【LBX】があるんだ。それを使いたい」

束「分かった!。じゃあ、行ってらっしゃい！」

創「…行って来る」

創はそう言って爆発音がなった場所に向かった

創「あれだな」

創は、爆発が起こった場所に向かって、状況を見た。あの赤いロボット。確か、あのロボットは……あいつが乗っているロボットだったわけ？。それに、数は……15体

創（流石に酷い虐めだろ。仕方ない、あいつにするか）

創は相手の数を見てスマホを出し、今回出す【LBX】を直に決めた

【LBX】セレクト、【LBX】シン・エジプト】

そうやってスマホのコマンドを押し

最後に

この【LBX シン・エジプト】でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした

そしたら、いきなりスマホから、キューブが大量に出てきて、そのキューブが創を包み込んだ

そして、頭と身体もひし形のような胴体がある。【シン・エジプト】になった

【シン・エジプト】は直さに赤いロボットを見たら、他のロボットは一斉に銃の構えをとっていた

【シン・エジプト】『急いで助けないと！』

【シン・エジプト】は赤いロボットを助けに向かった

男の娘が新しいひし形の形をした【LBX】でワンキル?
するのは良いのか?

ルート変更

とある少女は苦戦していた。1機たい15機。流石に不利な状況だった。完璧に押し負けて、銃を突き付けられた。その時少女はかなり絶望に陥って、少女は目を瞑った
だが、此処から、最強の助っ人が現れるのが分からなかった

「ドン!」っと何かが地面に着いた音がした後。一斉射撃

「ビューン!ビューン!ビューン!」

「シャシャシャシャシャシャシャキン
!!!!!!」

と一斉射撃の音が聞こえたが、何かを防いだ音も聞こえた。少女は目を覚ますと、そこには

黄色いひし形の頭をして、コアの場所は見えない見た事が無い、黄色い聖機人の姿が居た

少女「なに、あの聖機人?…」

少女は戸惑った。15機の聖機人の一斉射撃を全て、剣で防いだから

そして、黄色い聖機人は飛び出して、前の1機の聖機人を1撃で防御を壊し、2撃で聖機人を吹っ飛ばして、直に右の聖機人を1撃で吹っ飛ばし、身体を左に向けて、次の聖機人を1撃で吹っ飛ばし、もう1機の聖機人は銃で撃ってきたが、それを剣で防ぎ、1撃を与えて吹っ飛ばし、もう1機は左手で頭を掴みずつきをして倒れた。

次に左に向かい、もう1機は剣で1撃で吹っ飛ばし、攻めて来た聖機人が来て、黄色い聖機人は、ジャンプして1撃で吹っ飛ばし、着地寸前に後ろに居るもう1機の聖機人

も吹っ飛ばし、次にもう1機の聖機人も剣で吹っ飛ばした。

もう聖機人は、壊れている状態だった

少女「早い！」

少女は驚いた。10秒も経って無いのに9体も聖機人を倒した

それから、打ってくる聖機人は銃で撃ってきたが、黄色い聖機人は、剣を投げて、聖機人の首を斬り、ブーメランのようにもう1機の聖機人の胴体を斬って、黄色い聖機人の手に帰って来た。そして、直さにジャンプをして、銃でねらい撃ちをしようとしていた聖機人に後ろに着地して、剣を振り下ろし、1機の聖機人を倒した

少女「凄い……」

8秒も経って無いのに3機も聖機人を倒した

そのスピードで残りの3機も、倒した。これで、相手の聖機人は全滅した

「全部倒すなんて…」

少女は、黄色い聖機人の強さに驚いていた

そしてその黄色い聖機人は、走って消えて行った

ルート変更

【シン・エジプト】(この【LBX】で相手のロボットを倒すのは最高にワンキルだ!。楽し過ぎる!!)

【シン・エジプト】は、誰にも見えない所で、【シン・エジプト】をしまい、【エクリプス】の所に帰って行った

それから創は、帰ってきて家族みんなでご飯を食べて準備を済ませ、ベットの所で

563 男の娘が新しいひし形の形をした【LBX】でワンキル?するのは良いのか?

眠
っ
た

男の娘が理不尽な事に頭で考えて、【長距離耐用型LBX】を○○になるのは良いのか？

それから時間が経ち、やっと原作開始の第1話で白いロボットと戦い、完璧に勝って、帰ろうとしていた……

筈だった

創「何で俺がこんな事になってんだよ」

それは、創が独房の中に入っていた

理由は、ただ助けて【LBX】をしまつて、森を歩いていたら、ダークエルフに色々あつて森の抜け方を聞いたら、いきなりナイフを突き出されて、話も聞かずに独房に入

れられた。理不尽な……

創「はあ、暇だ。(……) 何で俺が独房の中に入ってるんだよ?。俺はただ助けてやった……それは古い話か……でもあの機体だけは戦って何とかしてやったのに、何故俺が独房行きに入ってるんだ?。この世界は理不尽が満載に起こる場所だったわけ?」

創は少しその事を考えていた

創「暇つぶしに、ロボットを【カスタマイズ】にでもするか……」

創はそう言ってポケットから、【手持ちラボ】を取り出した

作者「どうやって出したんだ?」

創『色々だ』

そして創は、【手持ちラボ】を起動させ、【VR眼鏡】付けて、コンピューターを起動

させ、をこの世界にあう1体の【LBX】を作り始めた

完成したな。…ん？、後ろに気配。何をしに来たのかを見に来たのか…だったら、早く完成するか

創は急いで【LBX】を隠し、道具全てしまい、空を見ていた

扉が開くと、紫のツインテールの髪型をした少女が居た。だけど洗濯バサミは要らなかつたらもつと可愛いのに

紫色のツインテール「ねえ、さっきのあれは何？」

創「…あれはなに？、つて言われても、何を言っているのか分かりませんが？」

紫色のツインテール「とぼけないで、貴方がさっき眼鏡を着けていながら、指を動かしていたじゃない」

創「眼鏡ねー。別に見せても良いですが、何も無いと思えますよ」

創はそう言つて、眼鏡を紫色のツインテールに渡した（偽物を）

紫色のツインテール「確かに、何も仕組まれていない。でも、これは偽物ね」

創はその事を聞いたなら創は少しだけ笑つた。

創（この女性、頭はかなり良いな。いや、最新の白のロボットを作り出すだけの頭は良いだけか）

創「ほおー、どうやって偽物だつてわかつたんだ？。見た目はそっくりだぞ？」

紫色のツインテール「だって、さっきの眼鏡のレンズを押してたじゃんか。この眼鏡は、それを押しても、何も反応が無かつたし」

創「どうやら、監視をしていたようだな。…そうだ！。特別にやってみるか？」

紫色のツインテール「な、なにを？」

創「今から面白い物を出してやるよ」

創はそう言って、スマホを取り出して、さっき作っていた【LBX】を動かした

創がスマホをしまったら空から、【長距離型LBX】【ハンター】が現れた

紫色のツインテール「聖機人!?!。にしては、狐っぽく見えるけど…」

創「違うな。あれは【LBX】と言う機械だ」

紫色のツインテール「【LBX】？」

創「それはな」

創は紫色のツインテールに「LBX」の説明した。その時、紫色のツインテールは驚いた。創は異世界からやって来て、そしてこの「LBX」はおもちゃ（アニメの事）として売っている品物だったから

紫色のツインテール「つまり：私たちが居る世界では聖機人と呼ばれているが、君の世界じゃあ、ロボットって言うの？」

創「まあそう言う事だ。どうだ？、1回乗ってみるか？」

紫色のツインテール「え？、良いの？」

創「もちろん。使っても良いよ。それにこの「LBX」は、凄い所が満載なんだよ！。とりあえず乗ってみたら？」

紫色のツインテール「どうやって？」

創「これを使えばいい」

創はそう言って、紫色のスマホを取り出して渡した

紫色のツインテール「これは？」

創「スマートフォン。長いからスマホと呼んでいる」

紫色のツインテール「スマホ？」

紫色のツインテールはスマホ見ていた

創「そう、スマホ。この機械さえあれば、これと同じのスマホと持っている人と会話が出来る、地図も見れて、誰が何処にいるかも分かる、機能が入っている」

紫色のツインテール「そ、…それは凄いわね…」

創「これでもまだ普通だ。それより、乗らないのか？」

創がそう言ったら紫色のツインテールは、「はっ！」っと気が付いた

紫色のツインテール「そう言えばそうだったわね。で、どうやれば良いんだ？」

創「簡単だ。まずはスマホに電源を入れ、【LBX】っと書いている場所にタッチすれば良いだけだ。ちなみに軽くタッチでな、直に壊れることもあるから気負付けろ」

紫色のツインテール「わ…分かった…やってみる」

紫色のツインテールは直さにスマホを起動し、「【LBX】」と言う部分にタッチし、「ハンター」に乗っていた。そして「ハンター」を色々操作していたら、狙撃で長距離でも5キロぐらいは、超えていた。【長距離耐用型LBX】の事を説明したら、かなり楽しんでいた

創「じゃあ、終わりだ。そろそろしまってください」

紫色のツインテール「分かった！」

紫色のツインテールはやり方が覚えたのか、「ハンター」をしまつて、創に返した

男の娘が、最大級で最大級の、最大級の【LBX】をスケッチに書いて隠し、皇女にある秘密の事を出そうかな?出さないかな?つと言う秘密を言おうとするのは良いのか?
?

あの子に【LBX】を使ったら、かなり楽しかった見たいでいつも来て居る。【LBX】つと言うロボットの狙撃にかなり上手くなっている

創(いちおう、メイド3人とあいつだけは見えていて覚えている。だが、あいつらに俺の正体と色々聞くのは少し警戒した方が良いな)

創はその事を考えて、月を見ていた。今夜は満月だ

夜になったら、1人男の人がやって来た。創は直さに顔を伏せた

創（あいつには絶対に言うと思ってるのか？、バカが！）

「ドン」

創は顔を上げて、落とした物を見た。食べ物があった

??? 「どうぞ、お腹がすいたでしょう？」

創は男の人に睨んだ

??? 「そんなに睨まないでください。別に被害を加えたりはしませんので」

創「…」

??? 「ずっと黙って無いようですが、せめてお名前を聞かせて貰えませんか?。私は
ユライト」

男の人はそう言ってニツコリ笑って自分の名を言った

創 「……ミゼル」

ユライト 「ミゼル、ですか?」

創 「ああ、ミゼル。それだけが俺の名だ」

ユライト 「女の人なのに男の言葉を言っても良いのですか?」

創 「良いんだよ。俺は男だから」

創がそう言ったら

ユライト「君は男の子なのかい!？」

創「悪いか？」

ユライト「いえ、驚きました」

創「用は無いな、だったらさっさと去れ」

ユライト「仕方が無いですね。分かりました。それでは」

ユライトはそう言って此処から去って行った

創（これで良いな。さて、月でも見るか）

創はそう思い、月を見ていた

創（満月の月は素晴らしい。…それに、懐かしいな。12年前の生活が思い出す）

創はそう考えると、涙が出てきた。創はその涙を服で拭いた

創「そろそろ、新型を考えるか」

創はそう考え、スケッチブックとシャーペンを出した

作者「どうやって?」

創『分かった言おう。俺のポケットはスペアポケットで出来ているからだ!』

作者「なっ、何——!!」

話は置いといて、ポケットからシャーペンで、子共に似合う新型【LBX】の考えを
スケッチブックに書いていた

30分後

創「何とかこれで完成した」

創が新しい新型「LBX」のイラストが完成した

名前は「キング・アースー」。「K・アースー」のバージョンアップしたバージョンだ

この「LBX」の性能は、普「K・アースー」と比べて「飛行形体」になっている状態の頭がファルコン部分の頭は「オーデイン」の翼にある…何と言うか…青い部分あるじゃないですか、その部分にしている。翼は別です。それと、翼は、上部分にも「ジェットブースト」も付いている。「飛行形体」の時は、背中の羽部分は、上から下に変わる。それ以外は変わっていない。カラーは普通。だが「ジェットブースト」は水色。「必殺ファンクション」は、「ソードビット・極」効果は、「ソードビット」と比べて「ソードビット」が6つ放たれるが、「ソードビット・極」は、「超多弾頭ロケット」みたいに6発放つたら、6から、12に変わり、更に24発の超小型「ソードビット」だ。さらに、触れたら爆発するシステム。キラー○○○と同じようなシステムも搭載。さらには「新必殺ファンクション」。「エクスカリバー・スラッシュ」。効果は、「テンペストブレ

イド」の光剣で、一刀両断する「必殺ファンクション」さらに、「イカロス・ゼロ」のウエ
ポンフォームも装備可能!。さらに!、またまた「新必殺ファンクション」は、「イカロ
ス・ゼロ」の場合、「メテオブレイカー」だが、「キング・アース」バージョンだつた
ら、「アルティメット・ブレイカー」効果は、黄金の両手光剣で、横斬りで敵を切り裂く。
どんな防衛でも破られる「必殺ファンクション」。最後の「必殺ファンクション」は「ブ
レイク・クロス・ファイナル」効果は簡単。「テンペストブレイド」と「イカロス・ゼロ」
のウエポンの武器を二刀流に持つて、クロス斬りをする「必殺ファンクション」。武器は
「プロト・カリバー」。Fa○○アル○○アが持つている剣にした。以上

創「後は、いつも道理」

創はスケッチブックとシャーペンをポケットにしまった

???「何を書いておつたのだ?」

突然後ろから声をかけられた

創（この声はあいつか。設計図を見ていたか？。いや、内容は見ていなかった。何とかなるか）

創は聞こえた方に顔を向けたら、そこに居たのは

創「何の用だ、ラシヤラ」

ラシヤラ「まるで我の事を知っているようじゃのう」

そう、後ろに居たのはこの世界のヒロインの1人ラシヤラだった

創「知ってるに決まってるだろ。理由は言えないがな」

ラシヤラ「理由を言っってはくれ無いかのう？」

創「今ここで言ったらそこに居るあいつらにバレる。そうやすやす理由を教える訳にはいかないんだよ」

ラシヤラ「それはどう言う意味じゃ?」

創「これ以上言えない。言ったら、敵のテロリストが聞かれてしまう。これ以上話
しない」

創がそう言って後ろに振り向いた

ラシヤラ「そうか、なら、言わなくても良い。じゃが、テロリストに聞かれてしま
うとはどう言う事じゃ?」

創「自分で考えれば簡単に分かるはずだぞ」

ラシヤラ「…まさか」

創「そう、そのまさか。テロリストの仲間は2人居る」

ラシヤラ「何じやと!？」

ラシヤラは驚いた。ラシヤラを狙ったテロリストの仲間がこの船に乗っているからだ

創「信じるか信じないかお前次第だ。話は終わりだ。さっさと去れ」

ラシヤラ「お主、答えられないのか!？」

創「誰も居ないお前と俺で2人で話が出来るなら、誰がテロリストの仲間かを話せられる。今日はもう、遅い。もう一度言う。さっさと去れ」

ラシヤラ「了解した」

ラシヤラは、仕方なくから去って行った

男の娘が、テロリストが誰なのかを話し、異世界の女尊男卑の意味を教えるのは良いのか？

創が言ったその言葉にラシヤラは仕方なく、誰にも見つからない場所まで移動した。そこで創はテロリストの名前を言ったら、ラシヤラは驚いたてこう考えていた

ラシヤラ（先生がテロリストの仲間？。そんなのありえるはずが無い！）

ラシヤラはその事に頭が痛かった。先生2人が、テロリストの仲間だったからだ

創「言ってる事は信じるか信じないか、自分で考えろ。話はこれで終わりだ」

ラシヤラ「待て！、お主に聞きたい事があった！」

創「何だ？」

ラシヤラ「お主はあの時、助けてくれたのか？」

創「俺が誰を助けた？」

ラシヤラ「もう1体の白い聖機人は、お主が助けたのか？」

創「もう1体？、何の話ですか？」

ラシヤラ「とぼけるな、お主がキャリアを助けたのだろう？」

創「……ああ、確かに助けた。だが、独房に入っていた時点で、敵だと思わないのか？」

ラシヤラ「いや、敵じゃない。お主はキャリアを助けたんじゃない？」

創「2度もな。だが何度も裏切られた」

ラシヤラ「2度も？」

創「ああ、あの時だ」

創は「シン・エジプト」であいつを助けたのを話した。もちろんラシヤラは驚いた。1
5対の聖機人数に、1の聖機人。圧倒的な差があるのに、それを全て20秒以内で相手
の聖機人を全て倒したからだ

ラシヤラ（実力があり過ぎる！）

創「せっかく助けたのに、独房に行くか…本当にいつもだな」

ラシヤラ「いつもとはなんじゃ？」

創「俺の世界の話だ」

ラシヤラ「お主の世界は、どんな世界なのじゃ？」

創「……女尊男卑つと言う言葉の意味を知っているか？」

ラシヤラ「何じゃ？、その言葉の意味とは？」

創「世の中は女性の地位が上であり、男性は下つと言う意味だ。でもその差別的な考えは、法律によって禁じられていた！。男性の犠牲者が出るからな。その差別で男性が虐めや自殺、そうなくても学校の教員は関心を持たない！。まだまだあるぞ！、男性を奴隷に、駒、道具！。3歳の子供でも、そう言う扱いもする事もあるんだ！」

創から聞いたその言葉に、戸惑いが起こった。それじゃあ、生まれてきた男性の子供は、報われないって事になるからだ。でも

ラシヤラ「でもそれは、法律で禁止されていたなら、何故そんな事を話すのだ？」

ラシヤラは解っていないかった。創の世界では一体どうなっているのかが

創「だが、俺の世界ではI Sと言う兵器が誕生した。でもそのI Sつと言う兵器は、女性しか乗れなかった。つまり：そうだなあ、例えでこの世界じゃあ王女だったっけ？。つまりその禁じられた差別は、王女の考えで解放した！。つまり、俺の世界では、そう言う扱いになっているんだぞ！」

創が言ったその発言にラシヤラは涙が出てきた。その差別はもう始まっていたからだ

創「その差別で、力の名声を手に入れようとしていた家族も居た。名声のためなら、手段を選ばなかった。俺みたいにな」

ラシヤラ「それは：：どういう事じゃ？」

創「俺は、家族は俺を捨てた。3歳でな」

今この男は何て言った？。3歳で捨てた？。まだ幼い子供を！、ラシヤラはまた涙を
2 滴流した

創「それから、7年まで1人で生きてきた。：いや、そもそも1人じゃなかった」

ラシヤラ「1人じゃなかったってどう言う事？」

創「俺には、仲間が居た」

創はそう言って、スマホを出し、全ての「LBX」のデータを見せた

ラシヤラ「こ…これは!？」

創「LBX」。この世界じゃあ、聖機人と呼んでも良い。「LBX」は、俺にとっても大切な存在だった。決して、手のひらサイズの大きさでも、俺にとって最高の相棒達だった。だから1人でもさびしくは無かった」

ラシヤラ「そうじゃったのか…」

創「話は終わりだ。で、どうする？俺をこのまま独房行きか？」

ラシヤラ「いや、もうよい。じゃが、少し来て欲しい事がある」

創「何だ？」

ラシヤラ「我にも【LBX】つとと言う聖機人が欲しい！」

創「そもそも、聖機人は例えだ。本当の名前は【LBX】。まあ別にいいけど」

ラシヤラ「そうじゃな、我に作ってはくれない…くれるのか！」

ラシヤラは暗い顔から突然明るい顔になった

創「何かを書いていたのは、お前の【LBX】の設計図を書いていた所だ。後は作れ

ばいい話だ。それに、最初からあげるつもりで書いて居たからな」

ラシヤラ「ミゼル…」

創「…もうその名前はいい。俺の本名は井上創だ」

ラシヤラ「じゃああの名前は嘘だったのか！」

創「テロリストの仲間に自分の名前を話すか普通」

ラシヤラ「そうだとしても！。皇女を騙すとは許さんぞ！」

創「だったら、【LBX】で対抗するまでだ」

ラシヤラ「そう来るなら、我は聖機人で対抗するまでじゃ！」

創「ちなみに、聖紀人じゃあ、俺が作ったザコの【LBX】で十分だ！」

ラシヤラ「何じやと〜！」

創「そろそろ戻るぞ。誘拐されたって言う勘違いの話が出てくる前に、早くな」

ラシヤラ「了解した」

ラシヤラは創を連れて船に戻った

男の娘が、完璧な王様を持てる器を、持つべき主に渡すのは良いのか？

それから、ラシヤラが「悪い人じゃ無い」って話をして、何とか独房から解放してくれた

今頃

創「どうして俺が学校に行く事になるんだ、この世界の英雄、剣士だけで十分だろ？」
ラシヤラ「それでも、お主はこの世界の事を知っているようじゃから、一緒にこの学校に入れば良いのじゃ」

創「だが、前の世界じゃあ、学園に入っている。そうやすやす学校に入る気は無い」

ラシヤラ「学園？学校とは何が違うのだ？」

創「例えば、凄い優秀な人じゃないと入れない学園みたいな場所だ」

ラシヤラ「へえー、そうなのか。それじゃあ、お主が入っている学園は？」

創「・・・女子学園」

ラシヤラ「女子学園？」

創「つまり、女子だけしか行ける学園だ」

創はそう言ったら、ラシヤラは大爆笑していた。男は1人だけだからだ

創「だけど、もう1人居るよ。男が」

ラシヤラ「そうなのか？」

創「ああ、タダの馬鹿だ」

ラシヤラ「馬鹿？」

創「つまり、女子の心が解っていない」

ラシヤラ「あ、そうなのか？」

創「うん。告白したのに、相手の気持ちから別の意味になっているから、傷付きやすい」

ラシヤラ「なるほどー。その気持ちは大体分かる」

創「だよな」

ラシヤラ「じゃが、どうして、この世界に行こうとしていたのだ？」

創「決まっている。旅行だ」

ラシヤラ「旅行？」

ラシヤラは首を横になりそんな顔をしていた

創「つまり、俺はこの世界に来たかったんだ。皆が馬鹿を燥いで、楽しみ、そして最後に戦う。それが俺にとって最高の世界だ。だから、俺はその目的でやって来た」

ラシヤラ「そうじゃったのか」

ラシヤラは納得いくような顔をしていた

創「それと、これもな」

創は一枚の紙を見せた

ラシヤラ「何なのじゃ、これは？」

創「読めば分かる」

ラシヤラは、創に言われた通りに紙を読んだら、ラシヤラは驚いていた。何故だつて？

そりやあもちろん。大会の事の招待券をです

創「どうですか？参加しますか？」

ラシヤラ「無論、我も参加する！」

創「はい、1名エントリー。残り5人居りますが？」

ラシヤラ「それは、お主が決めてくれ」

創「分かった。じゃあ話は終わって、これを渡します」

創は紙をあげて、アタツシユケースを渡した

ラシヤラ「これは？」

創「完成したぞ」

ラシヤラ「本当か！」

創「ああ、開けたら？」

ラシヤラ「言われ無くても、開けるのじゃ！」

ラシヤラは子供のようによい表情でアタツシユケースを開けたら、そこには「K・

アーサー」に似ているが、「オーディーン」の羽もあって、横には「CCM」（コジヨ
の【CCM】と同じ）

ラシヤラ「これが我の【LBX】か！」

創「ああ、これが、ラシヤラに似合う最強の【LBX】、「キング・アーサー」だ！」

ラシヤラは子供のように楽しんでた。それから、「Dエッグ」をプレゼントさせ、使
い方と【LBX】の戦い方も教えてた。更に楽しんでたようだ

男の娘が、自分が何者かを皇女に話したら、皇女は笑うのは良いのか？

ラシヤラ「ありがとな創！」

創「エントリーの出場者のリーダーには十分だからな。だが、本当に俺も学校に出るのか？」

ラシヤラ「何を言っている？当たり前じゃ。」

創「だからって、俺はもう15で学校は終わっているんだけど…。」

ラシヤラ「だけど、お主が独房で閉じこもって居たから、結局は行かなきゃいけないのだぞ。」

創「先ずは家族に話してから、考えるよ。」

ラシヤラ「ん？、確か、お主は1人じゃなかったのか？。」

創「3歳から7年間。つまり、7年で終わってるよ。」

ラシヤラ「何じゃ、あの時悲しんで損したわ。」

創「だけど、元の世界に帰ったら、両親は俺の【LBX】データを盗みに来ると思う。」

ラシヤラ「だったら、何故旅行でこの世界にやって来たのだ？。盗まれてはいけない物があるのに、何故やって来たのだ？。」

創「馬神様が見たいっていうから仕方なくな。」

ラシヤラ「馬神様？。」

創「本当にイラつくなあー。」

ラシヤラ「いや、つい楽しくてな。その夢は、叶ったのか?。」

創「どう考えても、叶っているさ。さっきの【LBX】を見せたからな。」

ラシヤラ「そうじゃったな。」

創「それより、家族に連絡しても良いですか?。」

ラシヤラ「もちろんだ!。じゃがどうやって連絡をするのじゃ?。」

創「これを使う。」

創はスマホを取り出した

ラシヤラ「何じゃ？その平べったい物は？」

創「これはな」

創はラシヤラにスマホつと言う物を教えた。ラシヤラは、また大きく驚いたようだ

ラシヤラ「何と！。遠くの人と連絡が出来るとは。」

創「ちなみに、お前の【CCM】にも入っているぞ。」

ラシヤラ「何じゃと！。つまり、我も遠くから連絡が出来るのか!？」

創「残念。遠くから連絡は、【CCM】から入るから、持っていない人は、意味が無いんだよ。」

ラシヤラ「そうなのか・・・。」

ラシヤラは「シューン」つとすねた

創「何すねてんだよ。6人大会出場者は【CCM】を持っていなければならない。つまり、5人だけ遠くから連絡出来るって事。」

ラシヤラ「そうなのか!。」

創「急に元気になったなあ。ああ、ホントだ。だが、俺が帰ったらな。」

ラシヤラ「分かっておる。」

創「話は以上だ。」

創は話を切って、家族に連絡した。その後滅茶苦茶に怒られた。

男の娘が、家族と再会し、せつかくだから、娘はあれって事になっても良いのか？

創の家族は再会し、色々怒られて、今は「エクリップス」に居る。ついでにラシヤラも連れてな。集まって話さないといけない事を話した。

創「どうやら俺は、学校に行かないといけないようだ。」

シャルロット「でも、15なんだし。」

創「確かにそうなんだが、今の俺は独房に入っていたから、犯罪者とばれないようにしないといけないって、ラシヤラが。」

創はそう言い、ラシヤラの方に顔を向けた

ラシヤラ「何じゃ？、我が悪人に見えるところでも？。」

創「そもそも助けてやったのに、独房かよ。」

シャルロット「分かる。」

ラウラ「排除する。」

クロエ「ムカつきますね。」

東「今すぐにも、改造したい気分だよ。」

ルティエル「血祭りにも上げたいですわね。」

命「お父さん、ぶっ殺しても良い?。」

ラシヤラ「待て待て!、さっきのは我が悪いのは確かじゃが…ちよつと待った。今ならんて?。」

命「ぶっ殺しても良い?。」

ラシヤラ「その前。」

命「お父さん?」

ラシヤラ「お主!もうとつくに結婚していて、子供を産んでいたのか!?。」

ラシヤラが勘違いしていた

創「誤解だ。正確には、作ったんだ。」

ラシヤラ「作った?」

創「実はな…」

創は、命を作った事を話した

ラシヤラ「なるほどの、ISから人間に変わったって事か。もう凄すぎて頭に入らぬぞ。」

ラシヤラは、右手で頭を支えた

創「分かると言うのが分かってくれ。」

ラシヤラ「そうだとするものう」

創「分かっている。」

ラシヤラは溜息を出して、呆れていた

創「それはどうでもいいとして、問題は、俺があこの学校に入る事だ。」

ラシヤラ「別に、大丈夫じゃないのか？」

創「学園通っているのに、学校に行けか？。理不尽な結果だぞ。」

命「だったら、私が行きたい！」

命は手を「ビシッ！」っと上げていた

創「だからと言って、本当に良いの？。無罪の俺の代わりに行くって事「良いじゃない？。……束？。」

束「子供が勉強したいって気持ちがあると思うから、行かせたら？」

創「……いちよう、勉強は凄すぎるけど……それに、ラシヤラが乗っていた舟は、俺の顔を覚えてる。簡単に誤魔化せる事は「それなら大丈夫！」。はい？。」

束「その時は、記憶修正機で書き換えたら良い話だし。」

創「それで良いのか？、束。」

創は呆れていた。記憶修正。つまり記憶を書き換える。って事。

創「…腹を括るか。良いよ。学校行ってらっしやい。」

命「本当！、お父さん大好き！」

命はいきなり、創に飛びつき抱きついた。

創「あっはっはっはっはっは……。」

この先も面倒事が続きそうだ。

男の娘が、テロリストを迎撃するのは良いのか？。前編

命が学校に通って5日月経った。創は、「エクリプス」で新兵器を開発していたが、命から連絡があつて、巨大な不幸物体が現れた事を電話で聞いて、創は家族を集めて迎撃態勢に向かった。

今頃。

創「皆、準備は良いか？。それと、被害で犠牲者は増やしたくはないからな。一気に片づけるぞ！」

母の以外家族「「「「了解！。「「「」」」」

創はスマホを取り出して、コマンドを入力した。

「LBXセレクト、LBX ナイトメアファイアー」。

そうやってスマホのコマンドを押し。

最後に。

この「LBX ナイトメアファイアー」でよろしいですか？。

創はその選択に「はい」を押しした。

そしたら、いきなり箱が現れて、創の身体を食べた。

箱が割れたら、水色と青のマントに白と黒と黄色の身体を持つ、狂った笑顔を持つている【LBX ナイトメアファイアー】の姿が居た。

【ナイトメアファイアー】『アルファ、【ベータ】！。全ての【XF-5】の【LBX】で、空に居る聖機人を撃破！。』

【アルファ】『了解しました！。』

【ベータ】『了解した！。』

【ナイトメアファイアー】『【ベクター】！。【マスターコマンド】と【マスターコマンド改】でこの学園をハッキング！。』

【ベクター】『…何で？。』

【ナイトメアファイアー】『ハッキングで命中率を上げる』

【ベクター】『成る程ー、その考えはしていなかった。オツケー！。』

【ナイトメアファイアー】『【ルシフェル】は、砦に向かい、聖機人を撃破し、生徒を避難！。』
【ルシフェル】『了解！。』

【ナイトメアファイアー】『【ジ・エンプレス】は、森に居る敵を撃破！。人質を解放する！。』
【ジ・エンプレス】『分かったわ。』

【ナイトメアファイアー】『命は、【エクリプス】で、敵の居場所を特定し、【キラードロイ

ド」で攻めてくる聖機人を撃破』

命「分かった!。頑張るよ!。」

【ナイトメアファイアー】『全機発信!。』

【ナイトメアファイアー】がそう叫んだら、【ナイトメアファイアー】達は、弾のように発射された

発射された後、【ナイトメアファイアー】達は、武器を取り出した。

それから、全機は、バラバラになって、【ナイトメアファイアー】が言った作戦を行った

バトルルルト変更

【ルシフェル】『はあっ!』

【ルシフェル】は、「ヘブンスソード」で、次々に来る聖機人を撃破していた。

他の生徒たちは、『何あれ!』『あんな聖機人は見たこと無い!』と声が聞こえた。

どうやら、【LBX】の姿に驚いていた。

【ルシフェル】（確かにこの姿は、皆驚くよね。でも言いたい事は一つ）

【ルシフェル】『何をしているんだい?。君達は非難した方がいいと思うけど?。』

【ルシフェル】の声に生徒たちは『ハッ!。』と気づき、急いで避難をとった

【ルシフェル】（これで、生徒たちは居ない。頑張つて、皆。）

バトルルート変更

【アルファ】『楽勝ですね。爆発音が聞こえなくて、残念ですけど…。』
【ベータ】『姉さん。爆発音が聞こえないって事は、この星にも優しい、動力で出来ているの。それにしても』

【ベータ】は、「インシオンキャノン」のレーザーで聖機人切り裂いた。

【ベータ】『やっぱり、つまらないね。』

【アルファ】『確かにね。』

2人は呆れながらも、敵を撃破し続けた。

バトルルート変更

【ベクター】『とにかくこれで、オツケー！』

【ベクター】は、ハッキングで警備システムを強化した

【ベクター】『残りは、「マスターコマンド」と「マスターコマンド改」がしてくれるから、

男の娘が、テロリストを迎撃するのは良いのか？。後編

バートルルート変更

【ジ・エンプレス】『あら？、この程度でやられるなんて、当分甘いのですね？。』

【ジ・エンプレス】は「ラグナアックス」で、敵の聖機人を撃破して、人質を解放していった。

【ジ・エンプレス】『これで人質はもう居なくなつた。後は、「ルシフェル」と合流するだけ。』

【ジ・エンプレス】は、直さに「ルシフェル」に向かった

バートルルート変更

命「次右！。次は左！。」

命は、コックピットで「キラードロイド」達を命令して動かしていた。

やっと、空に居る敵の聖機人を狩り尽した。

命は、地図で何処に、敵の聖機人が居るのかを探した。

バトルルート変更

【ナイトメアファイアー】は、聖機人の攻撃を全て踊っているかのようにかわしている。

【ナイトメアファイアー】『フフフフフフフフ。』

【ナイトメアファイアー】は、笑っている。聖機人が「LBX」に勝てる筈が無いと言う意味を教えるために、かわしているからだ。

【ナイトメアファイアー】『そろそろ、かわすのが飽きてきたなあ。今度は、こっちから行かせてもらうぞー!。』

【ナイトメアファイアー】がそう叫んだら、空から箱が落ちてきて、【ナイトメアファイアー】が入った。その箱からいきなり1から6箱増え、7箱になった。その箱の扉が開いた。中に入っていたのは、【ナイトメアファイアー】の7体居た。

【ナイトメアファイアー】『弱い聖機人に教えてやろう。箱に入っていたのは7体の聖機人その中の1体は本物。それ以外は偽物だ。さあ!、どれが本物か!、その目で。』

【ナイトメアファイアー】が、左手で、目指した

【ナイトメアファイアー】『その感覚で!』

「ナイトメアファイアー」は、「魂滅ソウルスラッシュ」を出した。

「ナイトメアファイアー」『さあ！、ショーを始めようじゃないか!!。』

7体「ナイトメアファイアー」は、相手の聖機人に突撃した。

「ナイトメアファイアー」1は、敵の聖機人の首を狩り。

「ナイトメアファイアー」2は、敵の聖機人の胴体を切断。

「ナイトメアファイアー」3は、敵の聖機人の「魂滅ソウルスラッシュ」で聖機人のコアを鎌の先で貫いた。

「ナイトメアファイアー」4は、後ろから敵の聖機人のコアを貫いた。

「ナイトメアファイアー」5は、両腕を切断して、敵の聖機人を狩った。

「ナイトメアファイアー」6は、「魂滅ソウルスラッシュ」を投げて、逃げようとした敵の聖機人を粉々に壊して、殺した。

「ナイトメアファイアー」7は、両手で敵の聖機人をバラバラにして殺した。

「ナイトメアファイアー」『おや？、もうショーは終わりですか？。まだまだ楽しみたかったですか？。』

「ナイトメアファイアー」は呆れて、7体居た「ナイトメアファイアー」。は1か所の「ナイトメアファイアー」に向かい飛び込み、1体の「ナイトメアファイアー」が居た。

「ナイトメアファイアー」『こちら、「ナイトメアファイアー」。命。敵の確認。』

命 「大丈夫。ありんこ一匹居ないよ。」

【ナイトメアファイアー】 『分かった。皆を【エクリップス】に集めてくれ。撤収だ。命「分かった！」』

男の娘が、物語とあいつのさよならと、・・・・・・・・ある人に再開するのは良いのか？。

創の命令で、皆は「エクリップス」に戻って、状況を説明した。どうやら、もう攻めてこないようだ。おまけに、誰かがガイアを殺したから、物語は終了となった。

創「どうやら、この世界にいる意味はもう無くなったようだ。」

シャルロット「それって……」

創「ああ、物語は終了。別の世界に移動となった。」

その事を聞いて、命は暗い顔になった。

創「命、お前の学校は、何とかする。大丈夫。止める訳ではない。」

命「へ？」

創「実はな、あの馬神様が、何とかしてくれるらしい。」

束「……本当に何とかしてくれるの？。」

創「まあ馬神様がまた馬鹿な事をするのは、まあ、分かっている。」

束「だったら何で？」

創「嫌だと思っても、やるしかないからな。」

束「…やっぱり?。」

創「やっぱり。」

束「だよなー。」

創「仕方ない。」

創は、仕方なく、馬神様に連絡して、馬神様に異世界の聖騎師物語の世界を出た。

今頃

創は、あの世界で、似合う【LBX】を作っていた。

まずは、柁木剣士には【アキレスD9】【ホワイトカラー】

キヤイア・フランには【オーデインM2】【レッドカラー】

アウラ・シュリフォンには【フェンリル】【普通カラー】

ドールには【エンペラーM3】

ユキネ・メアには【パンドラ】【普通カラー】

大会に出る【LBX】を完成させた。全て似合っている【LBX】だ。

あの世界には、まだまだ渡せる【LBX】が合ったから、それもあげた。

フローラ・ナナダンには【プリンセスM】

ワウアンリー・シユメには「ハンター」をあげた。

創（これで全部だな。）

創は、その2つのアタツシユケースに「LBX」を入れた。

大会用は大きめ。

それ以外の2つは、1つずつにアタツシユケースを分けて、校長室の本棚の隠し扉に隠した。

それから、創は、コックピットに向かい、新たな世界に向かった……此処からまた、デ
ンジャラスが起こった。

創「……誰?。」

創の後ろに、シャルロットぐらいの身長で、胸も大きくある、ソード・アート○○○○
○○のリー○○髪型と……いや、全て似ている少女が居た。

???「我の事を忘れたのか!?!。」

創は左手で、頭を押さえて考えた。

創（こんな女子見たこと無いし。それに、生意気な女の子と言えば……まさか……）

創「……もしかして、……ラシヤラ!?!。」

創は見た少女は、何と15歳のラシヤラが居た。

作者「マジか!?!。」

ラシヤラ「やつと我だと分かったか。…まったく、お主は何故我を置いて行く!!」

創「何で大きくなってんだ!?。それに、どうして此処に居る!?!」

ラシヤラ「それはな、…。」

ラシヤラは創にどうして此処に居るかを話した。

創「あいつの仕業か…。でも何で来るんだ?。お前の世界の方が楽しくは無いのか?。」

ラシヤラ「それは、…：お主の事が好きになつたからだ!!」

創「…理由を聞かせてもらおうか?。」

ラシヤラ「それは、…。」

ラシヤラは顔を赤くして、もじもじしながら話した。

創「なるほどな。」

ラシヤラ「まあ、我に会えたのが嬉しいじやろ?。」

創「頭が痛いけどな。」

それから、話が続き、ラシヤラは家族の一員になつたらしい。

井上創は、デンジヤラスが起こりやすい体質です。

第3章 最弱無敗編

男の娘が、新たななる世界に着き、少女を助けて、男の娘が欲しい物を奪いに行くのは良いのか？

創がコックピットで、新しい異世界に向かっていった。

創「そろそろ新しい世界に着くぞー。」

創は、マイクで、皆をコックピットに呼び出した。

創は新たな世界に付いた。

その世界の名前は。

最弱無敗の神装機竜

結構有名なアニメの世界だったから、行ってみたら。

創は、皆を集めて「LBX」を改良した。何故なら、この世界はISと似ているけど

大きいし、無敵すぎるチート効果。こっちも全力で改良しないと、圧勝できないから。何とか改良して、神装機竜に対抗できる。おまけに、どんなアビスでも完璧に対抗できるこっちだって、無茶苦茶機能も追加だ!!

それから、時間が経って。

今頃。

創（あー、此処は、確か：第2話の：戦闘の場所か?。）

創はある女性が戦っている姿を見ていた。そして

創（どうやら、助けないといけないようだな。）

創は直さに、スマホを出して、コマンドを入力した。

【LBXセレクト、【LBX DBサイファー・X】

そうやってスマホのコマンドを押して。

最後に。

この【LBX DBサイファー・X】でよろしいですか?。

創はその選択に「はい」を押した。

そしたら、いきなり空から、黒い煙が創を包み込んだ。

そして、【DBサイファー】が【ドットブラ斯拉イザー】と同じ姿の【DBサイファー・

X】の姿が居た。

【DBサイファー・X】『遊んでやろう』

【DBサイファー・X】は、あの少女の所に向かった。

【DBサイファー・X】は、急いで少女の所に向かい、助けた。そこから、【マルチギミックサック】の二刀流と【オーバードロード】で無双しまくった。だけどこれで。

創（俺が黒き英雄になっちまったか。：ほんとは主人公なだけだな!!）

創はそう考えながら、マツハ20で【エクリプス】に帰った。

それから創は、いつも道理にな日常を送った。

数日

この世界では【DBサイファー・X】は駄目だから、隠すための【LBX】を作った。
機体名【オーディーン】

この世界で龍が強いなら、こっちは神で対抗するまでだ。

その神、北歐神話の最高神の名を持つ【オーディーン】なら、うまく行ける!!。

その時

「ドカーン!」

創「な、何だ!?!」

創は急いで【エクリプス】を出て、外を見て見た。そしたら、ルクスが厄介な敵、バ

ルゼリアと戦っていたから。

創（…でもこれはチャンスじゃないか？。）

創は思った。敵の神装機竜を奪えば、こっちの【LBX】が改良できるからだ。

創（だけど、触られたらなあ…：仕方ない。被るけどやるか。）

創は東に頼んで、協力してくれて、一緒に神装機竜、アジ・ダハーカ捕獲作戦決行した。

創は、何とか近くに移動できた。此処から、色々聞いた。

創（…：恋に落ちるような落とし方だねえ。）

創はニヤニヤしながら笑っていた。

創（そろそろ始めるか。）

創は、またスマホを出して、コマンドを入力した。

【LBX】セレクト、【LBX ベクター】

そうやって、スマホのコマンドを押し。

最後に。

この【LBX ベクター】でよろしいですか？。

創はその選択に「はい」を押しした。

そしたら、プログラムが創を包み込み、「ベクター」の姿になった。

【ベクター】（「インビジブル」。発動。）

【ベクター】は「インビジブル」で透明になって、目的のアジ・ダハーカに近づいた。そこから、1つ【ベクター】は思い出してしまった。

【ベクター】（確か、止めって…まさか……。）

【ベクター】は急いでターゲットの後ろに隠れた。

そして、相手の主人公が突撃してきた。

【ベクター】（マジかー!!。急げ!!）

【ベクター】は盾が無くなった敵を掴み、「ベクター」の【ゴーストジャック】をうつして、アジ・ダハーカが自動で回避した。

自動で動いた神装機竜は、強制的に解除し、武器に戻った。

バルセリア「な、何故だ!？」

バルセリアは驚いた。いきなり、解除されたから。

???『欲しかったんだよね。神装機竜。』

何処見えないのに、声が聞こえた。その声と同時に、不気味な神装機竜が現れた。

ルクス「誰だ!」

【ベクター】『誰だだと?。…何日かあの少女を助けてやった。ただの神装機竜の仲間だ

が?。」

ルクス「少女?……まさか…。」

「ベクター」『そうだな。名は「ベクター」と呼んでもらおうか?。こいつの名前だ。』

ルクス「「ベクター」?。」

ルクスは考えた。そんな神装機竜は聞いたこと無かったから。

「ベクター」『確かに、「ベクター」と言う神装機竜は、聞いたことが無いからな。』

「ベクター」『此奴を貰っていくぞ。ルクス。』

ルクス「何故僕の名前を!?。」

「ベクター」『俺は、お前は何者かも、そこに居るクルルシファーの過去も、全て知っている。』

クルルシファーとルクス「!?!」

2人は驚いた。見たこと無い神装機竜が知っていたから。

「ベクター」『近いうちに、また何処かで会おう。』

「ベクター」は、「インビジブル」を使い、アジ・ダハーカを持って、姿を消した。

男の娘が、ウイルス強化体を完成させて、イカを撃破し、学園に入るのを約束をしても良いのか？

「ベクター」がアジ・ダハーカを持って帰って、創は束を呼んで、ラボに連れて行つた。そして束に手に入れたアジ・ダハーカを使って、新型「ベクター」を作っていた。

創「よし！、完成した。」

創は「ベクター」の進化型。「ベクター・ザ・キッド」。

名前の意味は、アジ・ダハーカ。触れたら、相手の能力を奪う事が出来るから、これを「ベクター」に改造させたら、相性が良いと思つて、「ザ・キッド」と言う名前を付けた。

アジ・ダハーカの銃は、斧に付けた。「ベクター」ように改造して、「ベクターハルバード」と名づけた。「ベクターハルバード」は、「ベクターアックス」の上の角の右左銃を付けているから、そして、切れ味が物凄くからそう言う名前にした。

創「後は。」

創は、新型の「ベクター・ザ・キッド」を束に帰した。もちろん束は喜んでいた。

それから、創は、ラボを片づけて「エクリプス」を出て、外に散歩しに行った。

今頃

創「何にも起こらないなあー。」

創は今、外でのんびり空を見ていた。

創「何か、楽しいことが、……ん？」

創は、目の前の場所を見て見たら、巨大なイカの足があった。

創「ほー。第7話か。面白い。だが再生か…頼んでみるか。」

創は仕方なく、3人だけ呼んで戦う準備をした。

【オーレギオン】『全員。良いな？』

【ルシフェル】『大丈夫よ。』

【イカロス・アルファ】『大丈夫ですよ。』

【イカロス・ベータ】『問題なし。』

4機は一斉に突撃し、ラグナレクを撃破に向かった。

【オーレギオン】『相手は、不死身だ！。【必殺ファンクション】の連発で撃破する！』

仲間の【LBX】『『了解！』』

全員【LBX】『『『必殺フランクシヨン!!』』』』

【アタックフランクシヨン】ステインガミサイル

【アタックフランクシヨン】セラフィックウイング

【アタックフランクシヨン】ααガトリング（ダブルアルファガトリング）

その電子音が鳴ったら、【オーレギオン】はミサイルを放ち。【ルシフェル】は翼を大きく広げて、光のレーザーを打って。アルファは武器になった【ベータ】を持ち、横に回転し打ちまくった。そして最後に「バアン！」っとキレを見せたら、無数のレーザー弾でイカの足に打ちまくった。

その後、あたりが爆発が起こり、何とかイカのラグナレクを撃破した。

【オーレギオン】『へ……もう終わり?。』

【ルシフェル】『主人公も、結構苦戦した敵が、【必殺フランクシヨン】の同時で負ける……?。』

【アルファ】『かなり呆れますね……。』

【ベータ】『ああ、確かに。』

【オーレギオン】とその機体達は呆れていた。不死身の相手に一度目で倒したから。

【オーレギオン】『……帰るか……。』

【ルシフェル】『そうだね……。』

【アルファ】『そうですね。』

【ベータ】『そうだな…。』

皆は、つまらなかったから、「エクリプス」に戻ろうとした。だが。

??? 「待ってくれ！」

後ろから男の声が聞こえた。

(この声は、ルクスか…。)

【オーレギオン】『何の用だ?。』

ルクス 「君たちは何者だ?。」

【オーレギオン】(何だそんなことか。だったら、)『言う必要あるか?。最初は風呂の覗き、更に女装して、そこに居る女子とデートして、俺の正体を教えると思うか!!。』

ルクス 「え!?!、何で知ってるの!?!。」

【オーレギオン】『色々知ってるさ。次に起こる事は、俺たちの力が必要だとは思わないか?。』

ルクス 「どう言う意味だ?。」

【オーレギオン】『何日か経てば、その事が起こる。助けが欲しいのなら、手を貸しても良い。だが、ルクス。お前は仲間を信じるのか?。』

【オーレギオン】『話は終わりだ。これで失礼す「待ってくれませんか?」…何だ?』

突然何やら、優しい声……まさか…。

【オーレギオン】『何の用だ。理事長。』

理事長『あらあら、私の事を知っているのですか?。』

【オーレギオン】『良く知ってますよ。』

理事長「でしたら、学園に入学できませんか?。」

【オーレギオン】『……普通に、学園に向かうのですか?。それとも……。』

理事長「はい。入学ですよ?。」

理事中はニツコリ笑って言った。

【オーレギオン】『……本気か?。』

理事長「ええ、本気ですわ♪。」

【オーレギオン】は難しい答えを皆で 考えた。電波で。

【オーレギオン】(どうする?)

【ルシフェル】(そう言えば、女子高生だっけ?。)

【オーレギオン】(そう。)

【ルシフェル】(……私達の世界と同じの学園?。)

【オーレギオン】(ああそうだ。)

【アルファ】(昔の事と同じだな。)

【オーレギオン】（昔か：確かに、そんな事があつたな。懐かしいなあ。）

【ベータ】（感心している暇は無いぞ。）

【オーレギオン】（確かに。入らないと、この先、原作は上手くいくかは分からないしな。仕方ない。入ろう。）

【オーレギオン】『だが一つ言っておこう。俺は男だ。それでも学園に入れるか？』

【オーレギオン】はそう言ったら、ルクスは大きく驚いた。入る学園は女子高生なのに男が一人、入るからだ。

理事長「あら、私は別に良いですわよ。男の子が学園に入つて来たら、女子達が喜ぶに決まっていますわよ。」

この事に、皆は気がひいた。そんな理由で、学校に入れるからだ。

【オーレギオン】『：無茶な奴だ。そんなの生徒は許すわけないだろ!!。』

【オーレギオン】の叫びに、前の2人は、『はっ!』と気づいた。

【オーレギオン】（やっとなづいたか。）『それでも、学園に入るのか？。』

理事長「入れるわよ。男の神装機竜を持っている男なら、是非学園に入つてほしいわよ。」

【オーレギオン】『：だが、入ったとしても、止めなきやいけない理由がある。体験入学。それでどうだ？。』

理事長「あら？。どうしてなのかしら？。」

【オーレギオン】『色々事情があるからだ。話は終わりだ。さつ、言いたい事があつたらどうぞで。』

【オーレギオン】は突然左に向き、敵の方を見た。

【オーレギオン】『どうする？。これは貰つとくぜ。』

【オーレギオン】は一つの真珠を見せた。

??? 「テメエ！、何してくれるんだ!!」

最初は神装機竜の肩に乗っている、髪色は白のクソガキが言ってきた。

【オーレギオン】『そんなの決まっている。ただ、助けただけだ。それがどうした？。』

白髪「お前のせいで、よくも…!!」

【オーレギオン】『たったそれだけで怒るか？。馬鹿にも程がある。』

白髪「何だと！」

【オーレギオン】『じゃあな。そして、また会おう。ルクス・アーカディア!』

【オーレギオン】は「スモークグレネード」を取出し、敵に投げた。

敵の神装機竜は、バリアで守ろうとしたが、これは、目をくらませた。

今のうちに【オーレギオン】とその仲間達は撤退した。

男の娘が、学校に体験入学したが、男の娘だから仕方なくあれで学校に通うのは良いのか？

創は、異世界からやって来た事を理事長に話した。当たり前のように理事長は驚いていた。

でも創が男の娘だと知った時、いつそ制服は女子が着ている服になった。

創（最悪…）

創は本当に女子の服を着る羽目になった。

今頃

先生「えー、本日より。我がクラスに士官候補生として通うことになったー。井上創さんに、シャルロット・デュノアさんだ。皆よろしく頼む。」

創（少し、テキトーな紹介だな。）

先生「ほら、あいさつ。」

創「あ…はい。」

シャルロット・デュノア「分かりました。」

創「井上創と申します。よろしくお願ひします。」

シャルロット・デュノア「シャルロット・デュノアです。皆さん。よろしくお願ひします。」

2人は礼儀良く頭を下げ、礼をした。

先生「じゃあ開いている席に座りなさい。」

創「はい。」

シャルロット・デュノア「分かりました。」

それから創とシャルロット・デュノアは授業を終わり、他の人と主人公が創たちを連れて行って遺跡に向かった。

色々俺が男だつて事を理事長がばらした。

創「この、裏切り者おおおー!!!」

創は、「オーディーン」の武器、「リタリエイター」で理事長に斬りつけようとしたが、理事長はその「リタリエイター」を剣で受け止めてしまった。

創「なっ!?!」

シャルロット・デュノア「嘘!?!」

創とシャルロット・デュノアは驚いた。「リタリエイター」でも剣は、切れなかった。リーシャ「そんなに驚くことなのか?。」

シャルロット・デュノア「何を言っているのですか!」。創の「リタリエイター」は、光槍。つまり、切れない物は無い槍で攻撃をしようとして、理事長は、それを剣で止めたのなら、もうその剣は完璧に断ち切られているはず!」

リーシャ「なんじゃと!」

創「確かに、切られていた。」

リーシャとシャルロット・デュノアは、創の方に顔を向いた。その時に、創は、理事長に押し付けている「リタリエイター」をしまい、離れた。

創「だが、あの時の機体で、「レギオンソード」を見て、それに対抗できる圧力まで上げたんだ。」

シャルロット・デュノア「でも、1日で出来る訳…出来る。」創?」

創「確かに、1日では、無理がある。だが、あの馬鹿が手を貸したのかも知れないな。」シャルロット・デュノア「……まさか」

創「ああ、「ベクター」。あいつが、理事長の剣を強化したんだ!」

ルクス「「ベクター」!?!。」

クルルシファー「「ベクター」ですって!?!。」

創「いやお前が思っている【ベクター】は俺の方だ。あいつは違う。」
ルクス「え!？」

クルルシファー「貴方が、【ベクター】ですって!？」

創「ああ、だけど持ち主じゃない。つまり、仲間に【ベクター】を貸して、つて言つて貸してもらつて、それを使つて、アジ・ダハーカを貰つた。」

創「どうだった?。あの馬鹿と会話して。」

創は理事長にそう言つたら、もちろん理事長は

理事長「ええ、本当に楽しいお人でした。」

創「理事長らしいな。」

理事長「いえいえ、私は、それ程ですが。」

それから、会話が続きやつと終わつて、遺跡探索が始まつた。

男の娘が、調査するのと、思いつきと、リベンジしてくる厄介な奴とまた始まったも良いのか？

この物語は、少し飛ばしています。

創は、「オーデイーン」になり、遺跡探索し始めた。遺跡は色々な仕組みがあつたが、特にあの巨大兵器の動力源の子が居た。ちよつと馬鹿だが、また寝てしまうから、：持って帰ろうかなつと思つた。命には妹が欲しいと言つていたし。

それから「オーデイーン」は、最深部に到着した。だがそこには、操られたフィルフィが居た。

この先の原作は知つてのとおり、ルクスに説明してやって、笛で命令を書き換え、フィルフィがあいつの笛を壊した。これで皆は勝つたと思つていても、「オーデイーン」と「ルシフェル」は分かつていた。やつはまだ切札を残していたことを

「オーデイーン」『油断するな。あいつはラグナレクの種を持っている。かなり厄介なラグナレクを。』

「ルシフェル」『皆さん、油断はしないように。』

「オーデイーン」と「ルシフェル」の声にそれ以外の皆は「はっ！」と皆は思いだし、

武器を構えた。その時に、武器を構えて急いで捕まえようとしたが、遅かった。

敵が笛を爆発させて、ラグナレクを産まれ出した。

【オーデイーン】『遅かったか。全員、1回離れる！』

【オーデイーン】の命令で全員離れようとしたが、ルクスと【ルシフェル】以外離れたが、リーシャ、クルル、セリスそれ以外は一斉攻撃をしてしまった。

【オーデイーン】『あの：バカ!!』

【オーデイーン】の命令を聞かずに、攻撃をしてしまった。

【オーデイーン】『ルクス！【ルシフェル】！3人を助ける！。【ルシフェル】はセリス！、ルクスはリーシャ！、俺はクルルだ！』

【ルシフェル】『了解です！』

ルクス「わ、分かりました！」

【ルシフェル】はセリスの所に向かい、襲ってくるラグナレクの触手を剣さばきで斬ってセリス助けた。ルクスはリーシャの所に向かい、同じくラグナレクの触手を斬り、リーシャを助けた。【オーデイーン】はクルルの所に向かい、【オーデイーン】が持っている槍でクルルを助けた。

【オーデイーン】『何とかなったか。』

クルル「ありがとう。」

【オーディーン】『さて、「ルシフェル」。あれを使うぞ。』

【ルシフェル】『なるべく使いたくは無いんだけど。』

【オーディーン】『仕方ない事だ。』

【ルシフェル】『……そうね。』

ルクス「何をするんだ？」

【オーディーン】『お前にも、あるんじゃないのか？。バハムートの力は、知っているだろ？。』

ルクス「……まさか……。」

【オーディーン】『そうだ。そのまさかさ。』

男の娘が、北欧神話でヨルムンガルドと似ている敵に、この言葉と止めを刺すのは良いのか？

ルクス「まさか…。」

【オーディーン】『そうだ。そのまさか。』

【オーディーン】と【ルシフェル】は、ひそかに用意していたあれを使うしかなかった。だが、もともとあるんだけどな。

【オーディーン】『行くぞー！』

【ルシフェル】『はい！』

【オーディーン】『【オーディーン】！。【エクストリームモード】！』

【ルシフェル】『【ルシフェル】！。【セラフィックモード】！』

【エクストリームモード】

【セラフィックモード】

その電子音が鳴り、【オーディーン】は力いっぱい黄金オーラを溜めて、放ち、黄金の姿の【オーディーン】の姿になった。【ルシフェル】は少しずつ黄金のオーラを放つ【ルシフェル】の姿になった。

【オーデイーン】『行くぞ！、「ルシフェル」！。』

【ルシフェル】『はい！。』

【オーデイーン】と【ルシフェル】は一緒に飛び出し、ラグナレクに攻撃をした。

だがラグナレクはダメージは効いたが、直に再生して、触手が俺たちに襲い掛かってきたが、2人は何とかかわした。

敵「バカが！。お前が攻撃したら、ラグナレクは強くなるのを忘れたか？。」

【オーデイーン】『それがどうした！。それが強くなって返ってくるのが攻撃じゃなくカウンスターなら！』

【ルシフェル】『こちらもカウンスターで、倒せるんじゃない！。』

2人は、ラグナレクの攻撃をかわしながらカウンスターを続けて、ラグナレクはボロボロになっていた。

【オーデイーン】『おいおまえ！。』

【ルシフェル】『こんな言葉を知っている？。』

【アタックファンクション グングニル】

【アタックファンクション ホーリーエッジ】

その電子音が鳴ったら、【オーデイーン】は力を溜め、【リタリエイター】を空に刺し、巨大な槍を作り出した。

【ルシフェル】は、「ヘブンズエッジ」に力を入れ、白く眩しい剣を生み出した。

【オーディーン】【ルシフェル】『更に向こうへ!。(plus Ultra)!!!』

【ルシフェル】の光剣をXの字を付け、

【オーディーン】の巨大な槍をXの真ん中に打ち込み、混ざり合ったグングニルが、ラグナレクの顔を貫き、ラグナレクを倒した。

敵「何故だ!。何故俺のラグナレクが!。」

敵は驚いた。無敵と言えるラグナレクを倒したのだから、

【オーディーン】『どんなに強いラグナレクでも、弱点があつたら、それを叩きこむ。簡単な手口だ。』

敵「クソが、クソがあああああああ!!!」

敵は仕方なく、撤退した。

敵が撤退した後、【特殊モード】の効き目が切れて、オーラが消えた。

それから、【オーディーン】は、そこに倒れている馬鹿を連れて、脱出した。

創はそう考えながら、次の異世界のために、大量に「バツテリーリチャージ」を作り続けた。

それから、創とシャルロットはこっそり部屋に戻って休んだ。

4日後

学園では建国記念祭で、戦いの試合出ることになった。

他の選手が終わり、残りは俺だけになった。だが、

創「本気で戦わないといけないのか?。…学園長。」

学園長「良いじゃなあくい♪。楽しそうだし♪。」

学園長はにっこり笑って答えた。創はかなりため息をついた。

創「本気か?。【オーデイン】で戦わせるのを。」

学園長「逆に、【オーデイン】というのは、少し機体名でそう呼んでいるなら、貴方の世界では、オーデインと呼ばれていて、北欧神話の最高神で、全てを守護する神なんですよ?。」

創「間違っていない。……分かった。少しだけ手加減をしてやる。」

学園長「本気で?。」

創「仕方ないだろ。【オーディーン】はどんなドラゴンでも軽々と越えられる最高神だ。ワイバーンのようなザコだったら、仕方なくだ。」

創「だが、それは【グングニル】と【エクストリームモード】の事だ。それ以外は本気で行かせてもらおう。」

学園長「本当に、使わないの?。」

創「ああ。だがそれはその二つだけの話だ。それ以外の技がある。」

学園長「結局、手加減なしじゃない。」

創「別に良いだろ。そろそろ行つて来るな。」

創は歩いて闘技場に向かった。

創は闘技場のステージに立った。

創（相手はワイバーン。ザコ中のザコ…か。）

創はスマホを取出し、コマンドを入力した。その時に、他の観客はざわめき出し、何をしているのかが聞こえた。だが、観客は気づかなかった。この後、創の神が動き出るのを、知らなかった。

男の娘が、北欧神話の一撃で終わりにし、チーム出動するのは良いのか？

〔LBX〕セレクト、〔LBX オーディーン〕

そうやってコマンドを押し

最後に

この〔LBX オーディーン〕でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした。

そしたら、空から「リタリエイター」が降ってきて、その槍を持つと、身体が光、〔オーディーン〕の姿になった。

〔オーディーン〕の姿になった時の観客は大きく驚いた。全装甲の機竜。あの姿は誰も見たことが無かった機竜だ。

〔オーディーン〕『始めようか。』

〔オーディーン〕の宣言で教師は『はっ!?』っとし、試合が始まった。

〔オーディーン〕『悪いと思うけど。一発で終わらせる!。〔必殺ファンクション!〕』

〔アタックファンクション JETTストライカー〕

その電子音が鳴ったら、「オーディーン」は身体を光らせ、飛行機形体の「オーディーン」の姿でワイバーンに突撃した。

ワイバーンの使いは、それを回避できず当たってしまった、ワイバーンを完璧に破壊した。

『し、勝者。井上創！』

観客はワイバーンを圧倒する姿の「オーディーン」を驚いていた。

創「やっと終わった。」

創は「オーディーン」を解き、いつもの創の姿に戻った。

学園長「いくらなんでも早すぎます・・・。」

創「良いだろ。俺は早く終わってほしいんだ。」

学園長「それはどうしてかしら？」

創「そろそろ、終わりが近づいてきたからだ。」

学園長「どんな終わりなのかしら？」

創「聞かない方が良くぞ。それと、試合は見る気は無いから、別の所に向かう。じゃあな。」

創は次の自分の試合が来るまでメンテナンスを行っていた。

それから時間が経ち、夕日が見える夕方になった。その時も試合がまだ残っており、その試合はリーシャがやる試合だった。

だが、その試合でリーシャは何故か機竜がゆうことが聞かなくて周りを暴れまくった。

創「どうやら、始まるか。」

創はスマホでみんなに連絡して、準備を行い。最終決戦の準備をした。

【オーレギオン】『総員、リーシャ助出作戦、開始！』

チームパーフェクトワールド『『『『了解！』』』』

チームパーフェクトワールドは、リーシャを助出し、リーシャは自分の神装機竜で巨兵を止めようとしたがその巨兵は動きだした。

リーダーの【オーレギオン】は、全ての【キラードロイド】でやっと巨兵は止まったが、その巨兵は最終兵器のレーザーを放とうとしていた。

命『エネルギー、60%まで上がっています!』

『キング・アーサー』『何とかすることは出来ないのか!?』

『ベクター・ザ・キッド』『方法なら1つあるよ』

『ベクター・ザ・キッド』は『オーレギオン』に向けてニッコリ笑う。

『オーレギオン』『なるほど。俺が開発した追加機能を使うかだ』

『イカロス・アルファ』『追加機能ですか?』

『オーレギオン』『ああ、今の「オーレギオン」じゃあ皆には超えられないから、追加機能を追加させた。』

『イカロス・ベータ』『具体的にどういう機能だ?』

『オーレギオン』『ドットブラスライザー』やら『DBサイファー』と同じ、『ドットフェニックス』と似ている戦闘機を使う!』

リーダーと『キッド』以外『?????』

『オーレギオン』『もし、火力が足りなかったら、皆の「必殺ファンクション」を入れてくれ!』

チームパーフェクトワールド『『『『了解!』』』』

男の娘が、太陽の炎で巨兵を撃破は良いのか？ それと、音楽流しても良いのか？

【オーレギオン】『皆！行くぞ！』

チームパーフェクトワールド 『『『『はい！』』』』

【オーレギオン】『来い！【アークフェニックス】！』

【オーレギオン】の叫びで空から【ミゼルオーレギオン】の翼と似ている戦闘機がやってきた。

【オーレギオン】『【アークフェニックス】』

【オーレギオン】アーク・リンク

【オーレギオン】の翼が取れ、【アークフェニックス】の翼がつながり、【ミゼルオーレギオン】の姿になったが、白い色が赤くなり、いつもの武器は【ミゼルオーレギオン】専用のオレンジ色の武器になった。

まさに、太陽を見ているような明るい姿。

【アークオーレギオン】『これが、【オーレギオン】の追加機能と合体した姿。【アークオーレギオン】だ！』

【アークオーレギオン】『プロミネンス我王砲（ガオウキャノン）、発射!!』

【アークオーレギオン】専用の「必殺ファンクション」を発射した。

無論、巨兵もレーザーを放ち、2つのエネルギーがぶつかり、そのエネルギーが真ん中で止まった。

【アークオーレギオン】『まだまだ〜!!!』

【アークオーレギオン】のエネルギーが巨兵のエネルギーを押したが、

巨兵も押してきた。だが、

【アークオーレギオン】『負けるかあああああー!!!』

【アークオーレギオン】も押して、だが巨兵も押して、お互い押している一方、此処で、

神様『やつほ〜!』

【アークオーレギオン】の耳から神様の声が聞こえた。

【アークオーレギオン】『こんな忙しいときに何だ!!!』

神様『実は、この時に忘れていたことがあるの』

【アークオーレギオン】『だから何だ!!』

【ベクター・ザ・キッド】『アークオーレギオン、なにぶつぶつ言ってるの?。ふざけてるの?。』

【アークオーレギオン】『違えよ!。馬神がいきなり話しかけて来るの!』

チームパーフェクトワールド『ええっ!?』

チームの皆は驚いた。「アークオーレギオン」神様がいきなり話しかけているからだ。

神様『それで忘れていたことは、これ!』

神様はいきなり、○○○ライーフオー○のコズ○ツクを流してきた。

「アークオーレギオン」『・・・何だこれ?』

「アークオーレギオン」やチーム皆に聞こえていた。

神様『その音楽を聞いて頑張つてね♪』

その後、馬神の声が聞こえなくなった。

チーム全員『何処までふざけてんだあの馬神めく!!!!』

全員馬神のふざけに怒鳴っていた。

「アークオーレギオン」『(馬神の事は置いといて、限界突破ああああああ!!!!!!)』

「アークオーレギオン」は気合で押して、押し続けた。

「アークオーレギオン」『止めだあああああああー!!!!!!』

「アークオーレギオン」のエネルギー砲を押し切り、巨兵に「プロミネンス我王砲(ガオ

ウキヤノン)」を喰らわせ、爆発した。

男の娘が絆で、力をねじ伏せるのは良いのか？

皆「『『『『よっしや（ヤッター）（やったわー）（わーい）ー』』』』」

チームパーフェクトワールドやルクス達も喜んでいた。

敵「よくもよくもよくも……！」

その声が聞こえ、直に銀髪の最後の敵が「アークオーレギオン」に仕掛けてきた。

「アークオーレギオン」『そんな攻撃、喰らうと思うか！』

「アークオーレギオン」はその攻撃を回避した。

此処ですみませんが、cosmic mindスタート!!（音楽）分からないなら、前の作品を読んで、コズ○ツクと同じです。作者より。

「アークオーレギオン」『お前、「絆」というかけがえのない宝の事も知らないのか!!』

「アークオーレギオン」は「レギオンセイバー」||「アークセイバー」で敵を吹っ飛ばした

敵「あ、あ？。何だよそれ、そんなの知るかよ!!。この世は力が全てなんだよ!!。力が王様になれるんだよ!!!」

「アークオーレギオン」『違う!!。力があれば、未来や、王様という偉い言葉なんて、意

味ないんだよ!!。それに絆は、世界にとって、友情の証なんだよ!!。それを教えてやる!!。絆と言う最強の力を!!」

【アークオーレギオン】は一旦敵から離れ、ある言葉を言った。

【アークオーレギオン】『【アークモード】解除。来い!!、【コズミック・フェニックス】!!』
【アークオーレギオン】の追加装備された【アーク・フェニックス】を解除し、どこかに飛んで行った、それから3秒後、【アーク・フェニックス】と似ているが、ボディは青、翼の先は、水色の【アーク・フェニックス】コズミック・フェニックス】が現れた。

【オーレギオン】コズミック・リンク

【オーレギオン】の翼が取れ、【コズミック・フェニックス】の翼がつながり、【ミゼルオーレギオン】の姿になったが、白い部分が青になり、緑の部分は水色になった。だが、武器は【ミゼルオーレギオン】専用だけど、色は変わっていなかった。

まさに、宇宙を見ているかのようだ。

【コズミックオーレギオン】『宇宙キターッ!』

【コズミックオーレギオン】は大きなガッツポーズをした。

敵「ふざけてんのか!!」

敵はそれに怒って、【コズミックオーレギオン】に攻撃をしようとしたが、

【コズミックオーレギオン】『はっ!』

【コズミックオーレギオン】のエネルギーが、敵の攻撃をブロックし、敵を吹っ飛ばした。
敵「何イイイイイイイイ!」

【コズミックオーレギオン】『オーレギオン』と【コズミック・フェニックス】の合体は、異世界全てロボットのデータが含まれている。そんな攻撃じゃあ、傷1つ付かねえ!!』

敵「何い!」

敵は、動こうとしたが、

敵「!?、動かねえ!!。おい!、テメエの仕業か!!」

敵は動けなかった。

【コズミックオーレギオン】『ああ!。此処で止めを刺してやる!!』

敵「な、何!。や、やめろ!!」

【コズミックオーレギオン】は今の形体の【コズミック・ソード】を手に取り、奥の手をぶつけた。

【コズミックオーレギオン】『絆の力で、宇宙を掴む!!。【必殺ファンクション】!!』

【アタックファンクション 超銀河・コズミックスラッシュ】

その電子音が鳴ったら、まずは

【JETストライカー】

【コズミックオーレギオン】が飛行形態になり、敵にたいあたりをし、後ろにワープゲ-

トを作って、そこに敵と一緒にワープゲートの中に入った。

【コズミックオーレギオン】はワープゲートを進み、やっとワープゲートを抜けたら、

なんと、本当に宇宙にいたのだ？!!!

作者「アンビリーバボー!!!」

飛行形態の【コズミック知ーレギオン】を解除し、人型に戻り、また

【コズミックオーレギオン】『本気で、宇宙に…キターーッ!!』

大きなガッツポーズをした。しかも大声で声も長く。

敵「ここは、何処…だ、う！」

敵は、口を押えた。

【コズミックオーレギオン】『ここ宇宙だから、酸素無いんだよ。じゃ、止め。』

【コズミックオーレギオン】は【コズミック・ソード】に青い光剣を出して、横回転をし、青いスラッシュが敵を切り裂いて、

敵「うああああああああああああああ!!!」

爆発した。

【コズミックオーレギオン】『これが、宇宙の可能性だ!!』

第5章 魔装学園編

男の娘は、言い忘れていたことを話す事と、女性に苦手な世界に連れて、新作【LBX】の試すの準備は良いのか？

創は敵を撃破し、学園に戻り、学園長に【LBX】を託し、【エクリプス】に乗り、この世界から出て、【エクリプス】の中で作戦会議を始めた。

今頃

創「これで集まったな」

束「そうなの？。それにしても少なすぎると思うけど」

創「チームで戦うのが何故か3チームらしい」

創「チームを探し終えても、まだ異世界の旅行が残っているから、まだまだ行かなきゃいけないし」

創「おまけに、俺たちは大会に見ることも出来ない」

ラシャラ「え、そうなのか？」

創「そうだ。あくまで馬神が見る大会だから出来ないんだよ」

創「さ、会議は終わり。そろそろ次の異世界に向かうぞ」

皆「「「「はい（了解）（分かりました）（分かった）（分かったよ）」」」」

作戦会議を終えると、創、束、命、見喜で操縦し、新たな異世界に向かった。

今頃

創たちは、着いた後、外に出てみると、それはの綺麗な海に砂浜。

創「…なるほどね」

シャルロット「ここ分かったの？」

創「無人島つてのは確かだ。それと、この形と見た目、ここは」

魔装学園H x H

創「異世界の内容は解っているけど…」

束「やっぱり来なかった方が良かったかもね」

ラウラ「どういう事だ？」

束「実はね、」

束は創以外に物語の説明をした。子供にはしていないけど。

聞いた皆はかなり怒っていたが、束と一緒になんとかおさえた。

それから、皆は、原作開始して、主人公が来るまで無人島で暮らすことになった。

食料の魚は、創が作った水中型「LBX」のテストを行いながら魚を捕獲していた。飲み物は、創が開発した機械で海水をドリンクジュースに変えた。

やり方はただ機械に海水を入れるだけ、で完成するジュース。味は海水入っていない本物のジュースに変えられる。

寢床は「エクリプス」の中で寝る。

まさに極楽な生活が続き、5日。

とうとう、時は来た。

束『はつくん!』

束は電話で連絡してきた。

創「どうした、束?」

束「そこから100メートル先に飛行物体。しかも4体。それに人が乗っているよ」
創「(どうやら、始まったか。)分かった。なら、他の皆に知らせて、「エクリプス」に俺以外全員乗せてくれ。邪魔な敵が「エクリプス」を狙うのかも知れない。」

束「でも、「エクリプス」には「インビジブル」があるんじゃない?」

創「もしも、「インビジブル」が効いてても、弾が当たるのかも知れない。って話があ

るだろ？。その守りだ」

束「分かった〜」

創「それと、言い忘れていたが、ここにやってくる4体に、シャルロットが使う新作【ルシフェル】を使う」

束「完成していたの!?!」

創「ああ、【カスタムフレーム】だが、全てのバランスが高く、自分で考えたオリジナリティ能力を追加している。テストデータを3人で見てくれ」

束「分かった〜」

創「じゃあ、切る」

創は束の電話を切り、そこで待った。

男の娘が、真実という恐ろしいのんで1人の女性に驚きを与え、最新【LBX】を出すのは良いのか？

創は、あの4人を来るまで、砂浜にいて、後ろ向きで待っていた。

そして、4人がやって来た。

??? 「ねえ、貴方はどうしてここにいるのかな？」

その声が聞こえたら、創は、

創「やつと来たようだね。飛弾 傷無。千鳥ヶ淵 愛音。ユリシア・フアランドール。

姫川 ハユル」

創はそのことを言い、ゆっくりと振り向いた。

名前を当てられた4人の表情は、直にハイブリット・ギアを付けたようだ。

創「俺の名は、井上 創。君たちの事は良く知っている。特に、そのハイブリット・ギアのデメリットを知っている」

その言葉を聞いても、4人は解っていない表情をしていた。

創「ま、そこにいる4人組でも、傷無。お前の姉なら知っているだろ？。だったら、お前の姉、飛騨 怜俐を連絡出来ねえか？。デメリットの事を話してやる」

創の事は信じられない事ばかりだが、傷無は、すぐさま自分の姉に連絡した。

怜悧『何の用だ傷無。任務の方はどうした？』

傷無「姉ちゃん。任務の方はまだ終わっていないが、厄介な人に出会ってしまった」

怜悧『任務の方は終わっていないってどういう事だ!!。それに、厄介な人は何だ？』

傷無「ああ、それは、「こっちが答える」…え?」

創「今時は、話している相手は別の誰かに話しすることだって出来るだろう?」

傷無「あ、ああ、分かった」

傷無は今連絡している相手、怜悧に他の人でも話しできるようなことが出来て、傷無から4人の名前と自分の名前を言われた事を話した。

怜悧『…デメリットの事は何だ?』

創「その4人は分からなくてもいい。たとえば、ハイブリット・ギアのエネルギーが0になった瞬間。どうなるのかを」

そのことに怜悧はかなり驚いていた。

怜悧『っ!、何処でそれを聞いた!?!』

どうしてその秘密を知っているのか。

創「それは自分で考えろ。それにその情報を世界に流す」

怜悧『そんなことをしたら、世界が大変なことになるのだぞ!!』

創「だったら、俺と戦って、勝ってみろ。この世界の武器、ハイブリット・ギアで。だが、まずは邪魔者が来ているから、それを倒してからな。」

創はスマホを取り出して、コマンドを入力した。

〔LBXセレクト、〔LBX アテナ〕

そうやってコマンドを押し

最後に

この〔LBX アテナ〕でよろしいですか？

創はその選択に「はい」を押しした。

そしたら、突然、空から、強力に眩しい光が創を包み込み、光が消えたら、

姿は〔ルシフェル〕と似ているが、両腕の肩は、〔ルキフェル〕と同じ。頭は〔ルシフェル〕の輪の下に〔ルキフェル〕の悪魔の角。黄色、青、白の3つが重なった。

〔ルシファー〕シリーズ最強の〔LBX〕それは、……〔アテナ〕!!

男の娘は、聖書の神を使って、敵を一掃し、手紙を敵に渡し、のは良いのか？

愛音「あれは…ロボット？」

ユリシア「まあ！、美しいですわ」

2人の声が聞こえてきた。

【アテナ】『お前らに教えてやろう。神という圧倒的な力を』

【アテナ】はそう言い、「ヘブンズエッジ」を敵の前に向け、突撃した。

経った0.2秒もしない間に50機あつた機体は、一瞬で破壊された。

愛音「な、何が」

ユリシア「一瞬で！」

傷無「これは！」

ハユル「まったく、見えなかった…！」

【アテナ】は、敵の機体を破壊した後、「ルキフェル」のジェットを使って、空に向かい。

ハイブリット・ギアを付けている緑のロング女子がいた。

【アテナ】『どうする？。俺と戦うか？』

??? 「……いや、止めとくわ。あなたと戦ったら、こつちが負けてしまうわ」

【アテナ】『それは残念だ。お前、元の場所に戻ったら、お前の第六征伐将軍。グラベルという奴に、これを渡してくれ』

【アテナ】は、手紙を取り出して、それを緑のロングヘアの女性に渡した。

??? 「!?何処でその名を知った!？」

【アテナ】『こつちの頼みを聞かないのか?』

??? 「くっ!、…それは何かしら?」

【アテナ】『手紙だ。その手紙をちゃんと、グラベルに渡せ。この言葉を言ってからな』

??? 「…内容は何なのかしら?」

【アテナ】『(動揺しているようだな。)『お前の大切な物が失ってしまう前に、俺らの所に、来い。もし来なかつたら、こつちから行く』ただ、それだけだ』

??? 「大切な…物?」

【アテナ】『時間が経ったら、それは分かる。そろそろ帰ったら、どうだ?。あいつらに築かれるぞ』

??? 「…分かったわ。あなたの名前は、何かしら?」

【アテナ】『録音していなかったんかよ。ずっと見えないように空に隠れていたのに』

??? 「最初から知っていたの!？」

【アテナ】『特別に、もう一度教えてやろう。俺の名は井上 創。通りすがりの救世主。だが、お前らが住んでいる異世界では、破壊者なのかもしれないな』

??? 『破壊者って、それだけの力を持っているのね？』

【アテナ】『まだこの機体で、1割しか力を出していないぞ』

??? 「あれだけでも!？」

【アテナ】『そろそろ、去ったらどうだ？』

??? 「そうね。そうさせてもらおうわ」

その女性は去って行った。

【アテナ】は4人の場所に戻った。

【アテナ】『どうする？。相手にしたいならしてやろう。したくないなら、別に相手にしなくても良い。さあっ！、どうする？』

【アテナ】の一言で全員は相手にしたくは無くなった。あんなにいた機体は全て破壊されてしまったから。

【アテナ】『傷無。お前の姉、伶俐に言っておいてくれ、秘密は黙っておこう。だが、『面白い物を渡す。だが、決して悪人に渡してはいけない。』そのことを言っておいてくれ』
傷無「あ、ああ分かった」

【アテナ】は「LBX」を解除し、元の姿に戻った。

創「それと、さつきとここに来た目的を果たしてくれ。アトランティアに向かつてやろう。面白い物をあげてないとな」

音愛「面白い物って何よ？」

音愛は渡す内容は分からないから、聞きに来た。

創「ああ、そうだな。見せるときに、見せられるかどうかは、分からないけど。バッテリーだ」

音愛「バッテリー？」

創「革命を起こすバッテリーだ」

音愛「何の？」

創「ハイブリット・ギアの新しいバッテリーだ。それより、早くしろ。そろそろ移動したい」

傷無「それなんだけど。時間が掛かるらしいから、今からは無理だつて」

創「…分かった。しばらく休憩に入るか。東、命、見喜。データはどうだ？」

創は人の名前を言うのと、何処からか、ウサ耳大人馬鹿と、2人の小さな子供が現れた。

東「うーん。性能はかなり良いけど」

命「『デビリティックチェンジ』は使っていないから、まだそのデータは取れてないです」

見喜「それ以外は、うまくデータを取れたよ！」

創「それは、ありがと。『デビリティックチェンジ』は、あの時に使うから」
束「あの時？」

創「この世界の異世界の英雄。そいつにぶち込む」

命「英雄って、まさか！」

創「そう。そのまさかさ」

傷無「……あのう……」

創「ん？、何だ？」

傷無「その人たちは……？」

創「俺の家族。それと娘たち」

愛音「む、娘!？」

傷無「マジか……」

創「マジだ」

!!!!!!?????

傷無達は驚いた。この年で子供が出来ているからだ。

創「それと中身はロボットだから、安心して接しろ」

傷無「ロボット!？」

命「正確には、ISですが……」

ユリシア「IS…?」

創「今着ているハイブリット・ギアと似ているスーツだ」

それから、チームアマテラスからの質問を次々答えて、目的を達成し、創が「エクリ
プス」で4人の中に入れ、アタラクシアに向かった。(「インビジブル」機能を使って)

男の娘が、ビジネスで爆弾発言を言っても良いのか？

創たちは4人チームアマテラスの人たちを「エクリップス」に乗せて、アタラクシアに向かい、研究所に向かった。そこに待っていたのは、総司令官であり、中東部・高等部
校長、飛騨怜悧とナユタロボの責任者でアタラクシア技術主任。識名京が待っていた。

怜悧「説明させてもらおう。あの意味は知っているのか？」

創「ああ、知っている。「ハイブリット・ギアのエネルギー残量が無くなったら、人は死ぬ」ってことを」

傷無「死ぬ…？姉さんどういうことだ？」

創はハート・ハイブリット・ギア秘密を怜悧に話し、その後に傷無が怜悧にさっきの質問の答えを聞きに来た。

創「説明は怜悧から聞けばいい、その後全て分かるだろう。終わったら連絡してくれ、ビジネスでも語るか」

怜悧「何処にビジネスが!!」

創「先ず傷無に説明してから聞け。じゃあな」

創は研究所から出て、「エクリップス」に戻った。

…それから数分後。

連絡がやっと来た。創は「エクリプス」から出て、研究所に向かった。

創「話は終わったようだな。ビジネスを見せる前にこっちの事情を言うか」

創は伶俐に傷無に俺達は何者かを話した。

傷無「異世界からやって来た者？」

伶俐「そんなふざけている話」だったらそういう世界で何で異世界があるんだよ」うっ

…

伶俐は否定しようとしていたが、確かにこちらも間違っていないかった。

創「此処からビジネスに変わるぞ」

創はポケットからあるものを取り出した。

京『それは？』

創「俺たちがいつも使っているアイテム。【バッテリーチャージ】。その名の通り、充

電端末だ」

傷無「それがビジネス？」

創「ああ。理由は簡単だ。例えばこの【バッテリーチャージ】は俺の機体【LBX】のバッテリーが完全回復だけじゃなく、ハイブリット・ギアのバッテリーも回復も良いんだよ」

